
罪（わたし）と罰（ぼく）

upる委員長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたし
のぼく
罪と罰

【Nコード】

N5407N

【作者名】

u p r 委員長

【あらすじ】

女顔で小柄な少年、篠屋亜夜しのやあやは高校入学後よく夢を見るようになった

そしてその夢を見るようになって数カ月後、最後に見た夢と同じように自分が『女』になってしまった

そしてそこから始まる友人に抱いた恋心、女になった真実、夢と現実が入り混じった世界で亜夜は果たしてどうなるのか・・・

1話

春の季節になり入学式を終えて一ヶ月校庭の桜は散っていき残りも後わずかとなっている

「……」

教室の一番後ろ、窓側の席に座っている少年、篠屋 亜夜は

見るものもなく教室の窓から雲の少しかかった空を見上げている

一応授業は聞いているのか教師から質問を出されると難なく答えていく

しかしあっさりと回答した亜夜に教師が舌打ちをしたのには気がついてはいないらしい

そして席に着席すると前の席、親友の神野 樹が声をかけてくる

「おいおい、あいつの問題よくさらっと答えれたな」

樹のいうあいつとは教壇に立っている藤沢 充康という教師である

ちなみに藤沢の出す問題は難しい上に何度か間違えると宿題を提出させるといったたちの悪い教師である

(そのおかげで藤沢の出ているクラスは大変よい点を取る)

そんな親友の言葉を見無視して『ふんっ』といった感じで再び外の空

を眺めだす

こんな感じで今日一日の授業も終わり、帰宅部の亜夜は早足で教室から出て行く

「おい、待てよ亜夜、さっさといくんじゃねーよ」

後ろから樹が追いかけてきて亜夜にむかって静止の一言をかける

呼びかけが聞こえて振り返ってみるといきなり樹の顔が目の前にありついたじろいでしまう亜夜

樹もそんな感じで『うおっ』と少し驚いた様子で後ずさりをしてしまい少し頬を赤くしている

「・・・なにがあくなってんだよガチホモ野郎」

冷たくそう言い放った亜夜は再び樹に背を向けて階段を下りていくと歩を進める

「まだ言ってるのかよ、ごめんってあやまってんじゃねーかよ」

このように亜夜が機嫌を損ねているのはある理由があった

つい先ほど数学の授業の2時間ほど前の昼休みのことであった

1話（後書き）

はじめまして、初投稿のuppるといいます

初めて書く小説なので見にくい部分も多々あると思いますが
徐々になんばっていくのでよろしく願います

感想、改善点などあれば書いていってください、願います

学校などがあるので投稿が遅れるかもしれませんが

がんばって最後まで投稿したいと思っています

では、どうぞよろしく願います

2話

「亜夜ー！ー！一生の願いがある」

勢いよく屋上のドアを開けて亜夜がいることを確認した樹はいきなり前に来て土下座を始めた

「ちよっ、何してんだよ樹」

土下座されて驚いた亜夜は食べかけの昼食をおいて樹を立ち上げらせようと声をかける

「頼みごとがあるなら聞いてやるから、早くたて、周りからの視線が痛い」

今、亜夜たちがいるところは周りからは見にくいところからあるが見えるところから

変な視線を感じてしまっ、しかも樹がかなり大声を出したので見に来た輩もいる

「・・・お願い・・・はな・・・」

そそくさと立ち上がり亜夜の肩をつかみ神妙な顔をしてしゃべりだす樹

何時になく真面目な樹の表情について亜夜も息を呑んで真剣な顔をしてしまう

「・・・俺の彼女になってくれ・・・」

「ふえっうい??」

なんと頼みごと?とは彼女になってほしいらしい

思春期の高校生なら好きな人一人ぐらいいるからね・・・

注：亜夜は男です

(えーと、俺頼みごと聞いたよね、うん、そうだね・・・で、ん
！・・・なんで俺告白されたの?)

一応男だね?付いてるもの付いてるし・・・ということは・・・
とまあ親友からとんでもない事をいわれ奇妙な声をあげた亜夜はひ
とつの答えを見つけ出す

「そうか・・・樹、精神外科いこっか」

表面上にこやかに、内面怒りで構築された笑顔を見た樹は亜夜との
視線をはずして苦笑いをする

そんな様子を見てニコニコしながら樹の手をつかみ徐々に力を入れ
ていく

「ちよ、痛い痛い!ストップ!!理由があるんだよ!!」

叫ぶほど痛かったのか樹は手を離してと頼むが

亜夜は理由を話さないと手をはなしてやらない様子である

「じゃあ早くしゃべれば？納得すれば『手』はなしてやるよ」

なおも握力を強める亜夜、華奢な体つきでよくこんな力が出るのかと樹も思っているであろう

そもそも手を離すだけあって逃がす気はさらさらない

「実は友達に彼女いるって言ってさ」

またも爆弾発言を言う樹に左手で頭をたたく亜夜

「いんじゃないか、バカっ！」

たった今『彼女になってくれ』といわれたばかりなのに『彼女います』といわれては

理不尽極まりないことに感じる

「だから最後まできけっ、っーかお前力強すぎ！！」

そろそろ樹も限界な様子でねを上げるが、それでも亜夜は手に入れる力を弱める気はないらしく

樹の手首からメキメキという音が聞こえるのも完全に無視している

「実は彼女はいなくて・・・」

とこの一言を聞いて亜夜は樹の言いたいことがわかり樹をつかんで
いた手を離しその手を肩に乗せると

そっと笑顔でやさしく言い放った

「・・・言いたいことはわかった、それ自業自得」

「NO」

「!!」

という感じが昼休みの出来事であった

2話（後書き）

ありがとうございました

今回のあとがきは主な主役亜夜と樹の詳細を書きたいと思います
以後新キャラが出るたびしたいとおもいます

篠屋 亜夜

光鷹高校に通う一年生

身長：154センチ体重35キロ

特技・趣味：勉強、運動全般・お菓子づくり

好きな・嫌いなもの：甘いもの・辛い、辛い熱いもの、腐女子

家族構成：母・かな 父・夜一 亜夜

備考：母親を幼いころになくし父親はアメリカに仕事に出かけ

現在は両親の昔の住宅に一人で住んでいる

神野 樹

光鷹高校に通う一年生、亜夜と同じクラスで席はその前

身長178センチ体重60キロ

特技・趣味：特にないが喧嘩は強い

好きな・嫌いなもの：亜夜？・父親

家族構成：母・秋 父・真実 樹 妹・雫

備考：顔がよくてよく女生徒から告白されるがいつも断っている

樹が小学校中学年のころ父真実が病弱な妹雫をつれて

行方不明になってしまい、今は母の秋と一緒に暮らしている

3話

「なあ、考え直してくれよぉ」

必死に手を合わせ懇願してくる樹を無視してさっさと靴に履き替えて学校を出ようとする亜夜

樹も後を追い、追いつくと亜夜の横に立ちあるきだす

「頼んでもやらねーぞ、だいたいお前が言ったのが悪いじゃねーか」
ごもつともな事を言い返されて黙り込む樹

これでやっと終わったと思った亜夜は携帯を取り出して時間をみると『17:12』と表示されている

「まだ時間あるな・・・」

中学の時から一人暮らしの亜夜は高校に入ると同時に社会勉強のためバイトを始めたのである

だから毎週土曜以外は大体バイトが入っている

学校がある日はいつも6時からバイトであるので、これから何かをして暇をつぶさないといけない

「時間があるなら、かのじよになっ、ごはあっ！」

またいいだした樹に裏拳を思いっきり当てて黙り込ませると、学校

を出てすぐ近くにあるコンビニによる

コンビニに立ち寄った亜夜は雑誌コーナーの前に行き雑誌を読み出す

樹もさすがに此処まできて頼むこともなく静かに少年誌を見ている

ちなみに樹は亜夜と同じバイトで働いていていつも一緒に行く

そんなことで時間をつぶした亜夜は17時40分になるとコンビニを出てバイト先に向かう亜夜と樹

バイト先は学校から1kmほど離れた場所にあるので歩いていっている

飲食店で働いている二人は亜夜が料理がけっこうまいので厨房で手伝い、樹はウェイターや皿洗いをしている

バイト中は二人とも忙しいので特に何も話すことなく4時間がすぎていった

10時10分バイトも終わり今は家へと向かっている

樹とは家の方向が違うので今は一人で帰路を歩いている

空が真つ暗で雲もなく月が綺麗に見え、ふっと頭を上げて月を見上げる亜夜

神秘的な月を見るものすべてを飲み込んでしまいそうだ

「……………」

ほんのチョット欠けている月をしばらく見ると、亜夜は再び前を向いて歩き出す

「……………ただいま」

玄関の扉を開けながらそういうが、返事は当然ない……

先ほど説明したように一人暮らし母親は病弱で亜夜を生むと同時になくなり父の手ひとつで育てられた

そしてその父は亜夜が中学3年の時、仕事でアメリカへと渡ることになり亜夜は一人暮らしになり

父も忙しく帰ってくるのは母親の命日の時くらいである

仕送りもしてくれるがなるべく親のお世話になるのも悪いと想っている亜夜はバイトをして自分の金は

自分で稼ぐといった感じでバイトを始めたのであった

そして今住んでいる家はもともと亜夜の両親が二人で住んでいた家である

リビングの明かりをつけて鞆をテーブルの横に置くと

二階へと続く階段を上り自分の部屋に入る

制服を壁にかけてシャツとパンツという楽な格好になると再びリビングへと戻る

階段を下りてすぐキッチンに向かうと麦茶を取り出しコップに注ぎついでに冷蔵庫の中身を確認する

「なにつくろっかなー」

暫くしてメニューを考えた亜夜は食材と包丁を取り出し慣れた手つきできざんでいく

きり終わったらフライパンを取り出して冷蔵庫から卵を取り出す

炊飯器のなかには今朝タイマーでしかけていたご飯がありそれを一人分より多めに取り出す

取り出したものを順番にいためていき炒飯が出来上がっていく

完成するとフライパンからお皿に移して食べれない分はラップをして冷蔵庫の中に入れる

「いただきます・・・」

テレビを見ながら夕食を食べ終わるとキッチンに戻ってお皿とさっ
き使った包丁やらを洗う

それも終わり時計を見ると11時30分となっており急いで風呂に
入る

「今日も疲れたなあ」

背伸びをして欠伸をする亜夜、

風呂から上がって眠気も徐々にきて眠くなりつつある亜夜はテーブ
ル横にある鞆を持って

二階の自分の部屋へと行く

「宿題は・・・朝やる・・・」

と言つとベットにもぐりこみやすやすと寝息を立て始める亜夜

3話（後書き）

今回は亜夜の母親、父親の説明をします

篠屋しのや夜一よいち

身長：179センチ 体重：65キロ

特技・趣味：カメラ撮影：かな、亜夜の写真を見る

好きな・嫌いなもの：かな、亜夜：かな、亜夜を悪く言うやつ

備考：亜夜とは正反対の見た目

嫁、息子大好きなすぎて危ないところもあるが

いつもは明るくて頼りがいのある人

そのおかげでよく大きな仕事を任せられる

かななどの結婚を親に反対され、それを原因に縁を切る

篠屋 かな（しのや かな）

身長：155センチ・体重：35キロ

特技・趣味：特になし：読書

好きな・嫌いなもの：亜夜、夜一・18禁系の本（小さいころのト

ラウマ・・・）

備考：夜一と同じで理由で親との縁を切る

病弱でたびたび入院することがあるが

そんなことを忘れさせるぐらい明るくメンタルが強い人だっ

た・・・

4話

病院の一室殺風景な部屋に一人の女性がベットに座っている

窓からそらを見つめる女性はにっこりとやさしく微笑んでおなかの辺りをなでる

「お母さん」

ドアが勢いよく開けられると学生服を着た少女が入ってくる

なぜかこの少女の顔がよく『見えない』

「『、何も来なくてよかったのに」

よく聞き取れなかったがきつと少女の名前を言ったんだろう

「だって心配だったもん」

そういうと少女は女性の寝ているベットの横にあるいすに座る

「ふふ、ちよつと風邪をこじらしたただけよ・・・でもありがとね」

女性はそつと手を伸ばして少女の頭をなでる

目を細めて気持ちよさそうにする少女は幸せそうに笑う

「『、いい知らせがあるの」

女性はなで続けながら少女に言いかける

「ん、なに？」

それに返事をして目を開ける少女

「とつとつお姉ちゃんになるのよ」

「ほえ？もしかして」

驚いた少女は女性の顔とおなかを交互にみる

女性のほうはそれが面白くてつい笑みをこぼしている

「・・・ほんとうに？」

念のためにもう一度聞く少女、ゴクツと息を呑むのがわかる

「フフ・・・、ほんとうよ」

やさしくそう言うのと、女性はおなかに手を回しそつとなでて子供が
いるのを強調する

少女はその返事と行動を見てパツと表情が明るくなる

「やったあ」

少女はそついつと女性に抱きつき思いつきり抱きしめる

そしてその空間がゆがみだし、やがて真っ黒になる

5話

次に目を開けて見えたのは見慣れた自分の部屋の天井

カーテンから漏れ出す光が朝を知らせている

その光が目に入り手を顔の前に持っていく亜夜

「またか……」

まるで何度も見たかのような言い方で亜夜はベットから起き上がる

そのとつりで亜夜は一ヶ月ほど前からあのような夢をよく見ている

とうの本人はさほど気にはしていないようでさっさと宿題を終わらせ弁当を作り学校へいく準備をしている

「行つてきます……」

誰もいない家にそう言い残して学校へ向かいだす

「よっ！亜夜」

学校の近く、昨日いたコンビニから出てきた樹が手をぶんぶん振りながらこちらへくる

「おはよ」と小声で言いかえすと樹が昨日の事を言い出す

「亜夜、考え直してくれないか？」

亜夜もその意味がわかったので軽くあしらう

「無理」

昨日なら嗚呼などいって落ち込むが口元を三日月型に歪ませてわらう

「フッフ、そういうと思ったぜ」

じゃあ言うなよと思うが樹はポケットをゴソゴソとあさって何かを取り出す

「じゃーん、これが何わかるか？」

その取り出した物を亜夜の目の前に持っていく

チケットのようなもので、そこには『sweet house』と書かれている

『sweet house』とはつい先日オープンした駅前にあるカフェでいつも行列ができるほど

おいしいケーキがたくさんあるのだ

そして今、樹の持っているのはその招待券である

「……あつ！、それ駅前の！！」

それを読み取った亜夜は大きな声をだししながら驚くと

登校中の生徒からの視線を感じて近くの木に隠れる

「そつだそつだ、お前のほしがってたやつだよ」

「ほ……ほしい……（ゴクリ）」

息を呑みながら言うほどほしいのは亜夜が大が付くほどの甘い物好きだからである

「だがしかーし、この招待券『女性限定』なんだな……」

手を差し出して亜夜がとろうとすると

樹はくるんと方向転換をして亜夜に背を向ける招待状をヒラヒラさせる

「もっ、もしかして……」

わかったように聞き返す亜夜、一方樹は『フッフ』と口の端をつりあげている

「これに行きたければ、女装して行け！！その時ついでに俺の用事を済ませ！！」

今まで行ってみたいと思うが毎回行列に並ぶ時間もないのでいつもあきらめていた亜夜

だがこの話では並ぶ暇もなくすぐいけて時間のない亜夜にとってはいい話だ

しかし条件として亜夜が一番嫌いな『女装』をしていかなばならないことである

言葉遣い以外女っぽい亜夜は今まで何度も『女装』をして・・・いや、やらされ続けてきて一種のトラウマになっているのである

「くう・・・」

「ほーれほれほしくないか？ほしいよなあ〜（ムフフ）」

亜夜が必死に考えているなか樹は目の前に招待状をヒラヒラさせて誘惑している

昨日と浜逆の立場になり明らかにフリになってしまった亜夜であった

それに加え最後の一押しといわんばかりに亜夜の耳でつぶやいた

「これにくれたのは俺の友達で知り合えたらもっといいいものくれるかもなあ〜」

これは訳すると「くればまたくれるかもね・・・（フフフ）」と言うことである

「行くっつっ！……！」

誘惑に負けた亜夜は大声で、それを聞いた樹は勝利のガッツポーズ

をした

そのあといつもより笑顔の多い学校生活を過ごした一人であった

6話（前書き）

どうも、u p p なんです今回は樹と亜夜が初めてであって何が起きたかを書いてみました

この話が終わるとまた『予兆編』にもどります
では、どうぞ

6話

『亜夜ー今日お前のうちとまっついていいか?』

バイトが終わった直後先に上がった樹から電話が入った

「別にいいけど、どうかしたのか?」

両親がいない亜夜は泊まっても言いと判断して了承したが

実は樹が泊まるのは初めてではなく、しばしばとまりに来るのである

そもそも樹と亜夜であったのは中学三年の秋

「亜夜、また仕事で移動することになったんだ」

亜夜そう言いかけるのは父の夜よいぢだった

「次は何処なの?」

何度も経験のある亜夜にとってはまたかと言う気持ちだが内心友達になったの連中と会えなくなるのは寂しい

「実はな、・・・アメリカなんだよ」

「アメリカ!？」

父の一言に驚いてつい大きな声を出してしまうが

深呼吸をひとつして落ち着けをもどそうとした

「驚いたろ・・・」

『当然だ、そんなところ行きたくないよ』と亜夜が言い出す前に父が続けて口を出す

「だから今回はお前を置いていく、昔俺とかんな(母親)が住んでいた家があるんだ

そこに住んでもらおうと思っている・・・」

物心付いた時からアパートやマンションを転々としていた亜夜は

そんなことは初耳であり少し驚いてしまう

「いきなりの一人暮らしで戸惑うかもしれないがその近くに昔の知り合いがいてな

困った時は訪ねるといい」

この知り合いと言うのが樹の母親であったのだ

そして引越してから数日後、段ボール箱もそこそこ片付き始めての登校日となったがひとつ問題があった

「これ・・・女子の制服じゃなか」

今亜夜が掲げているのは女生徒用の制服、もちろんスカートである

「業者とかが間違えたのかな？」

と制服が間違っていることで学校に電話をかけようとしたとき

ピンポンと玄関のほうからチャイムが鳴りそそくさと玄関に向かう

扉を開けて出てきたのはつい先日知り合った人物であり父の知人^{かん}神野^{あき}秋がたっていた

「おはよう亜夜ちゃん、今日が始めての登校よね一緒に行きましょ」

実はこの人亜夜の通う中学校の隣にある高校の教師である

登校日のことを教えてたぶん道を教えたりしにきてくれたのだろう

「はい、今日からなんですけど実は・・・」

ちようどいい具合にきてくれたのでさっきの制服に関する話を話し始める

「間違つたのがとどいちゃつたのね・・・まあ亜夜ちゃんならしうがないかもしれないけど」

『何がしようがないんだよ!』と突っ込みたくなるが、それをこらえてジト目で秋を見る

「・・・しようがないんですね・・・(ボソボソ)」

亜夜が小声でつぶやくと「あっ・・・ごめんごめん、つかわいくて・・・」とフォローにならないフォローを入れてくる

「じゃ、じゃあ、チョット待ってて学校に電話してみるわ」

数分間の電話後、新しい制服注文して届くには二日〜三日かかるらしい

その間、今回の場合は今週、私服登校でもよくなったのであった

「じゃあ行きましようか」

パジャマから私服に着替えた亜夜は玄関で待つ秋に手を引かれて車に乗せられた

その中にいたのが樹であり、これが初めての出会いだったのだ

樹と目が合って少しの間が空くとそれに気がついた秋が声をかけた

「その子、樹きって言って私の息子よ、ほら樹挨拶しなさい」

車に入って「誰？」と思った亜夜だったが秋による説明で理解して車に入り込むとかるく挨拶をする

「はじめまして、これからよろしくね」

できるだけ愛想よくふるまい手を差し出すが、樹は頬を赤らめて『こ、こんちは』といって外を向いてしまった

つれないやつだなと思いつつ車が発発する

その後は秋がこの町についてのことなどを教えてくれながら学校まで来たのだった

6話（後書き）

神野 かんの
秋 あき

身長：169センチ体重：『秘密よ!!』by秋

特技・趣味：見ただけでスリーサイズがわかる・かわいい子さがし
好きな・嫌いなもの：かわいい子・藤沢充康 【予兆に登場】

備考：かわいい子を見るといじりたくなる・・・という変な性癖の
持ち主

根はいい人で一部 以外頼れるいい人である

夜一とは中学の同級生で今でも相談に乗ってあげる時もある

7話

校門前、学校の廊下を見てみると生徒たちが何か楽しそうに会話をしているのが見える

先ほど車の中で樹と同じクラスということを知ったので色々教えてもらおうと思ったのだが

その樹は学校についたとたん逃げるように走り去ってしまった

秋も「私もそろそろ会議だから」と言っ隣の高校へ行ってしまったので今は一人ぼっちである

「さてと、とりあえず職員室行けばいいのかな？」

そついうと学校に向かって歩き出すがあることにきざずく

「職員室しらない・・・」

秋に聞いとけばよかったと思っているがいまさらもう遅いので

学校内にいる生徒に聞くこうとおもい止めた足を再び進めだす

校内に入り靴を脱いだ亜夜は近くにいる男子生徒3人を見つけると近づいて声をかける

「ちよつと君たち、職員室どこか教えてくれる？」

男子三人は会話をやめて親切に職員室まで案内してもらい「ありがとうね」と亜夜がいうと照れたように頭をかきながらどこかへ去っていきその後姿を見ながら亜夜は（最近の中学生背が高いよ・・・）と

シヨックを受けていた

「しつれいしまーす・・・」

職員室に入るとどうやら会議中らしく教師一人が今日のことについてなどを話していた

亜夜の声にきずいたのか奥にいる見るからに『校長ですよ』見たいなはげたおっさんが近づいてくると声をかけられる

「君が篠屋君かね？すまないねえわたしの手違いで」

ニコニコしながら謝罪をしてはつきり言つと反省はしてなさそうである

「いやいやー、失礼かもしれないけど実は君を女の子だとおもつてねえ〜」

「ええっ！」

昔から女に間違われたりするのは何度かあったが中三になっても言われるとは思っていなかったらしい
亜夜はつい大きな声で驚きを表した

「すまない、すまない髪も結んでいるし女顔だから間違えてしまったよ」

正直、亜夜も女っぽい髪型だとは思っていたが（最近受験で髪を切利に行く時間がなく前髪はパツツンでポニーテールにしているちなみに亜夜の場合は転校が多いので服装、頭髪の校則はほぼないに等しい）女顔という理由で間違われるのはさすがにきづつく

「そうだったんですか・・・」

半ばあきれたように返事をするとはほぼ同時に職員たちの会議が終わった

そこで一人の若い女性が近寄ってきたので沈んだ顔で会釈をする

「はじめまして篠屋さん、担任の宮本みやもと 優奈ゆうなです」

近づいてきた女性はどうやら亜夜の担任であるようで亜夜も自己紹介をする

「どうも、篠屋亜夜です、それと性別は『男』です」

今度は間違われないように強めに『男』といたので間違われないうしろ

それを聞いた宮本は笑みをこぼして「わかっていますよ」と言ってくれたので

この人はちゃんとした人だと思った亜夜であった

階段を上がってすぐ3-2とかいた表札が見え出して担任の宮本が
亜夜に話しかける

「じゃあちょっと待っててね急な転校生でみんなに説明してないか
ら」

と言って一人廊下に取り残された亜夜

教室からは予想していたとおり歓声の声があがっている

(毎回思うがなんで転校生って喜ばれるんだ??)

そんなことを思いながら黄昏していると教室の扉が開き宮本が「はい
つていいよ」と声をかけられて

教室へ入るとさっきまでの騒がしさが一変静かになってしまう

「では、篠屋さん自己紹介をお願いします」

「あ、はい」

最初に静けさを破ったのは担任の宮本でありそのまま亜夜に自己紹
介を促す

「えーと、東京から来ました篠屋亜夜です特技、趣味は特にないで

す好きなものは甘いもので嫌いなものは特にはないです」

なれた口調でそういうと決まり文句で宮本が横から「みんな質問は？」など言っが

みんな黙ってしまっってそのばは終わっってしまった

いつもならなんらかの質問をされるのに、なにか失敗したかなと思っった亜夜は宮本のいわれた席に

座るとちよつど窓側なのをいいことに外をむき出しクラスの視線を避けた

「HRはこれだけです、それと篠屋さん、樹君と知り合いのようですのでわからないことは樹君に聞いて

ください」

そついわれて斜め前にいる樹に視線をむけると樹のほつもちらを見ていたらしく目が合っってしまう

数秒間目を合わせたまま、いつしか樹が顔を赤らめ視線をはずされてしまつたのであつた

（よろしくぐらいいえっつーの）などと思ひながら朝のHRが終わつた

7話（後書き）

みやもと
宮本 優奈

身長・体重：163センチ・取材者負傷のため・・・

特技・趣味：格闘技（色々な大会に入賞経験あり）・汗を流すこと

好きな・嫌いなもの（場所）：ジム・デブ

備考：見た目とは裏腹に格闘好きな教師

体育教師で柔道部の顧問でもある

8話

「篠屋さんの肌すべすべだねえ」

朝の静けさは何処へ？と言った感じにHRが終わったとたん女子陣がいつせいに押し寄せてきてベタベタ触られている

「何か使ってるの？」

一人の生徒が聞いてくると（別に女でもないのに使わないよ・・・）と思いながら「い、いや何も」と言い返すと再び色々質問の嵐を受け続けた

（というか男なのみんなきずいてるのか？）女子たちの話し方や態度が異性ではなく同姓の扱いをしているのが亜夜にもわかる

少しの嫌悪感があるがあるのだが女が苦手な亜夜は「やめろ」とは言えずこまっていた

実際宮本から性別のことを話されていない（普通話さないとと思うが）生徒たちは亜夜の見目から『女』と判断している

それから数分後授業開始のチャイムがなりやっと女生徒からの手に開放された亜夜だった

その日の放課後、亜夜は樹と話そうと思いい樹の席に向かった

なぜかと言うと一緒に帰る人がいないから誘おうと思っているのだ

「樹、一緒に帰る」

ちょうど鞆に荷物を入れ終わった樹は後ろを振りかっけて声の主を探した

今、声をかけたのは亜夜だときづいた樹は持ちかけた鞆をいったん置いて返事をした

「ん、・・・ああ・・・べつに・・・いいけど」

顔を赤くしながら返事をした樹は鞆をもってそそくさと教室を出て行く

亜夜もそれについていき校内から出て行くこととする

「いや、今日は大変だったなあ」

帰り道亜夜がつぶやくと黙りこくっていた樹も口を開く

「そうみたいだな・・・女子からかなりもてたみたいだし」

樹も今日の亜夜の様子を見ていて同情してくれたいらしい

亜夜のほうは同情してくれたことよりもやっまとともに返事をしてくれたことにうれしくなる

「そうなんだよ、あの人たちベタベタ触ってきて・・・あんな人たちっ正直苦手なんだよなあ」

まともに返事をしてきたことをいいことに次々とグチをもらす亜夜

樹のほうもそれをちゃんと聞いているみたいでうなずいてくれている

「ああっ！後それと樹、今日樹の家に行くから」

暫くしてグチをもらし終えた亜夜は次に思い出したように言う

「ふん・・・って、うへっ!!」

樹は奇妙な声を出しながら亜夜のほうを向く

当然の反応だろうが初対面の人に「家に行くよ」といわれて驚いているのである

しかも樹は亜夜のことを『女』と認識しているためなおさらである

「実は高校のことで秋さんと話すんだよ」

「あっ、そういうこと」

亜夜の補足で納得した樹は再び前を向いて歩き出す樹

「じゃ、僕こっちだからまた後でね」

小さく手を振りながら樹に背を向けて歩き出す

一方樹はぼつとした表情で亜の背中を見つめていて、一言も言わなかった

「僕っ娘なんだ・・・」

8話（後書き）

何か批評などあればお願いします
つぎ書く時に役立てたいので・・・

9話

6時を少しすぎ、空が赤く染まりすでに山の向こう側は暗くなりつつある

亜夜は秋が迎えに来るのを待っている間、まだダンボールに入っている荷物を整理をして時間をつぶしていると「ピンポン」と玄関のチャイムが鳴ったのでいったん手を止めて玄関に向かう

「はい・・・あっ、秋さんもう終わってたんですか」

玄関を開けると当たり前のようだが秋が立っていた、心なしか息が荒いのは急いできたのかと思った亜夜であった

「あれまだ整理中なの？何なら手伝おうかしら？」

「ふう」と一息つくとすぐ近くのダンボールに目が言った秋は気を利かせて手伝おうかと言うが亜夜は自分ひとりでもできるので「大丈夫ですよ」と返事をして気持ちだけ受け取っておく

「じゃあ少し待ってて下さい準備するんで」

といて玄関に秋をおいてリビングのほうへ早足へ去っていく

数分後靴を持った亜夜が出てきて神野家へ向かったのであった

「おじゃましまーす」「ただいま」

二人それぞれ違う言葉で家に入ると秋に先導されてリビングへ入るリビングの中には樹がいなかったのできつと二階にいるのだろう

「それじゃあ亜夜ちゃん早速だけど高校は」

秋が話しはじめ、それから数十分間、亜夜と秋で高校進学について話し合った結果行く高校を決めて

この話はお開きになった

「じゃあ、亜夜ちゃんひかりだか光鷹高校ね、樹もそこ志望校でね一緒にいたらいいわね」

光鷹高校とは最近できた進学校で色々なイベントに力を加えているのが有名である

亜夜の成績なら授業料免除になる可能性があるのでそこに決めた

「はい、いけるといいですね」

秋に笑顔で返事をした亜夜は渡された資料を鞆にしまいこんで「じゃあこれで」

といつてたとうとした瞬間、リビングのドアが開き廊下から樹が入ってきた

「かあさん、腹減った〜」

そう言いながらこちらへ来ると亜夜を発見した樹は硬直する

今の樹の格好は風呂上りの様子でシャツとパンツ一枚だけである

亜夜のほうは別に同姓だとわかっているので気にはしていないが

樹のほうは『女』と思っているため口をパクパクさせている

硬直から数秒後我に返った樹は目にもとまらぬ速さでその場を去っていく

「あらあら、何してんだかあのこは」

樹の行動をおかしくて笑う秋、それにつられて亜夜もつい頬を緩めてしまう

「せっかくだから亜夜ちゃんも何か食べていく？遠慮はしなくてもいいわよ」

いつの間にかキッチンに立っていた秋に目をやるとエプロンをつけている途中だった

今から家に帰って夕食を作るのに時間がかかるとおもった亜夜は食べて帰ろうと思っ

「じゃあ」馳走になります」

そういうと亜夜も立ち上がりキッチンに向かう

「手伝いましょうか？」と聞くと「お客様は座ってていいわよ」と返されて、もと座っていた場所に戻ると

「亜夜ちゃん、樹のどこいったら？あの子どもどうせ勉強してないだろうしよかったら教えてあげて」

秋にそう促されて樹の部屋を教えてもらうと早速向かった

リビングから廊下に出るとすぐ目の前に階段がありそこを上る

二階の端っこのほうに樹の部屋があって二回をノックをして入る

「いつき、はいるよ」

そう言いながらドアを開けると中の様子が見えてきた

亜夜が思ったより片付いていて綺麗な部屋でバスケットボールが転がっていていい雰囲気を出している

樹はというとズボンをはいてベッドの上に寝て黄昏ていた

「な、なにはいつてんだよ！」

亜夜が入ってきたことにきずくと、むくつと上半身だけ起き上がり顔はいまだに赤いままの樹が叫ぶ

「えーと、邪魔だった？」

気に障ったと思い下に下りようと思った亜夜はドアに手をかけ出ようとするが

「いや・・・べつに・・・邪魔じゃねえけど・・・さ・・・」

口ごもりながらいうが、入ってもいいよとの合図に感じがした亜夜は一気に樹のいるベットまで寄るとと樹の横に座る

「じゃあ遠慮せず 実は僕、友達の部屋に入るの初めてなんだあゝ」
各地を転々としていた亜夜にとって『友達の部屋』はとっても興奮するものらしい

目をきらきらさせながら辺りを見渡すとバスケットボールに目が留まる亜夜

「樹ってバスケット部なの？」

ちょうど樹の足元にあり床に座ってボールを手に取り樹に上目遣いで聞いてみる

「お、・・・おう・・・もう終わった・・・けどな・・・」

途切れ途切れに言葉を言うと再び横になり亜夜に背を向ける

「いいな部活、僕も入ってみたかったな」

ボールを見つめながらつぶやく亜夜

中学を転々としていたので部活動に入ることなく卒業をしなければならぬので若干部活に入っていた樹を羨ましく思っている

そんな亜夜の気持ちを読み取ったのか樹はある提案をしてくる

「よかつたら今度・・・バスケットするか・・・近くの公園とかでさ・・・」

背を向けてまま言う樹、亜夜はそんな何気ない一言に返事をできな
いでいた

黙ってしまった亜夜が気にかかって樹が顔を上げるとぼけつと口を
半開きになっている亜夜がいた

「おい、どうしたんだよ」

心配した樹が声をかけるとすぐにわれにかえって「ごめん、ぼーと
してた」とにつこりとして言葉を返した

「僕さあ、転校ばかりで、友達って胸を張っていえるほどの友達
がいなくてね・・・ていうか此処に来る前まではね、いじめられ
てたんだよ・・・」

それを聞いた樹は表情こそ変えないが驚いていた

樹は昔から友達が多くて毎日遊びっぱなしだった記憶しかないが話を聞く限り亜夜にはそんな思いではひとつもないらしいし、逆に悪い記憶しかないのだと今言ったことに少し後悔する

急に重くなった感じがしてきまづくなった樹は何か話題はないかと考えるがそれよりはやく亜夜が口をあける

「ごめん、変な話だったね」

樹のほうから亜夜の顔は見えないが悲しい顔をしているのがまるわかりだった

そして少しの間をあけて樹がベットから降りて亜夜の横に座る

「俺じゃダメか?・・・」

「へっ?」

樹の言うことがわからなかった亜夜はつい樹の顔を見てしまう

その時、亜夜の瞳が少し赤くなっているのがわかった樹だった

「楽しいことは・・・今から作ればいい・・・だから・・・俺と・・・」

真剣な顔をしながら亜夜に言い始める樹亜夜もそれにあわせて真剣な顔をする

だがしかし亜夜はこれから先に「友達にならないか？」みたいな言われることに期待しながら待っていたのだが・・・

「付き合ってくれ!!」

・・・いい具合に裏切ってくれた樹だった

「ふえ!?!」

予想外なことを言われて亜夜は声に出して驚く

一方樹告白して吹っ切れたのか、あわてている亜夜をさしおいてさ
てらに話し始める

「実は前に写真で亜夜を見た時から好きになって・・・で今日あつ
てまた好きになって

なんていうか・・・一目ぼれだ!そうひとめぼれな「チヨット待
てーーーーい!!--」

語っている樹にを押し倒して無理やり入る亜夜、割り込まれた樹は
ポカンとしている

「い、いつき・・・僕が女の子に見える??」

上にのしかかった亜夜は恐る恐る聞いてみると、樹が考えたように
言い返す

「僕って言うのは珍しいけど・・・」

これが亜夜と樹の面白すぎる出会いだったのだ

その後、学校に男子生徒の制服を着ていくとクラスメイト全員が樹と同じような反応をしたのは言ってみてもないだろう

それから亜夜は髪を短くして口調も男らしく一人称を俺にかえていったのである

周りからは似合わないなど言われるがもう二度と間違われたくない亜夜はあえて『俺』とう一人称を使い続けている

(興奮した時や弱気になった時は僕を言ってしまう)

10話

「じゃまするぞー」

連絡から30分もたたないころに樹が家にやってきた

たびたび来ている樹はいつもと同じように一言断ってはいつてくる

「よっ、ほらプレゼント」

リビングに入ってきた樹は挨拶するなり紙袋を投げてきた

それをキャッチした亜夜は「なにこれ？」ときいてみると樹が「みればはええよ」と言うので中身を確認する

「これを・・・着ると??」

中身には服が入っていて手に持って出してみるとちよっとゴスロリ風な服と超ミニのスカートがはいつていた

おまけに黒髪ロングのウィッグも奥のほうに入っている

亜夜なら絶対に似合うだろうが一応男であるのでいくらケーキのためとはいえスカートには抵抗がある

「シヨートパンツとかならまだしもスカートなんて履けるか！」

手に持っていた服を樹に投げつけ、怒鳴りつける亜夜

「いや、考えたんだがその・・・亜夜のショートパンツエロイ・・・」

片手でキャッチした樹は亜夜に聞こえるように小声でささやく

昔のことを思い出した樹が鼻を押さえて顔を赤くする

亜夜も昔のことを掘り出されて顔を真っ赤にする

「あ、あれは勘違いするほうが悪いんだよ！！僕は女だなんていつてないし！」

いつもなら『俺』と言う亜夜だがこの時だけは恥ずかしすぎてつい僕と言ってしまふ

樹も樹で反論を返そうと思いつつ昔のことを思い出す

「いや・・・男も言っただけだな」

確かに性別をいっていない亜夜も亜夜だが、間違えるのも間違えるほうがなんともいえないのが現状である

「う、うるさい！」

口答えできなくなった亜夜は「そんなの絶対に着ないから！」と言いつつ早足で二階へと上っていった

樹もその後をゆっくりと歩き二階へとあがっていく

「亜夜ー、あけるよおー」

樹が扉に向かって言いかけるが、その中にいるであろう人物からは返事がこない

先ほどのことから約十分後、今は亜夜がすねて部屋に閉じこもっているのであった

暫くして痺れを切らした樹は最終手段をつかう

「亜夜ー、あんまりすねてるとケーキが逃げるぞおー」

こんなのが高校生に通じるわけが・・・

樹がそういうと中から『ガタンっ!』と言う物音が聞こえたきた

いったい中で何をしたのかわからないが何かが落ちるような音である

気になった樹はドアに耳を当てて中の様子を聞き取ろうとすると足音が近づいてくる音が聞こえる

「・・・ケーキはおいでけ・・・」

・・・通じました・・・

中からボソボソと小さい声で言う亜夜、樹はその反応がおかしくて
つい笑うが

こちらも約束は守ってもらわねばと思い何かないかと考えると亜夜
にまだいっていないことがあるのを
思い出す

「あつ、……そういえばあのケーキ屋カップル限定で……
まあ行かないなら言ってもしょうがない
か……」

わざと亜夜に聞こえる声で独り言を言っているとドアの鍵が開く

当然出てきたのは亜夜でありまっすぐ樹のほうを見る

「……行く」

そうして約十分間続いた争いは終わになったのであった

11話

数日後の日曜日、亜夜は朝からニコニコしていた

それも当然、今日は念願の「sweet house」のケーキを食べられるのであるからである

「ピンポン」とドアのチャイムが鳴り亜夜は出迎えるために玄関へ向かい扉を開ける

「……亜夜か?……」

扉を開けた瞬間意外な一言が飛んでくるのは理由があった

実はもうすでに昨日の服とウィッグをつけているので印象がかなり変わる

「……バカいつてんじゃねーよ」

さっきまでの笑顔は何処えやらと言ったようにまるでごみを見るような目で樹を見ている

少し頬が赤いのがまたなんともいえないかわいさをかもし出している

「え、俺まだ3文字と疑問符(?)しか言っていないよね!?何か悪い事言ったっ!?!」

「もういい、さっさといくぞ」

いつの間にか靴を履いた亜夜は樹の手を引つ張り外へと出る

「あつ、すつごい行列だね」

道路をはさんで向こう側にある店に約30人強の人間が開店前だといつものにならんでいるのを見て亜夜は感心したように言う

その店こそ亜夜のいつてみたいケーキ屋ナンバー1の「sweet house」である

「ん、ああ、本当にあんなにいるんだな」

亜夜の声に反応して同じ方向をみてみた樹はあきれながらそういう
駅で切符を買う二人はいまから電車に乗って樹の友達のいるところ
へと向かっていく途中である

「ねえ、もう友達なんかほつといてケーキ食べようよ」

その友達にからつきし興味のない亜夜は樹の服を引つ張ってケーキ
屋を指差す

「あーはいはい後でなあとで」

が当然樹の返答はそっけないもので、それに頬を膨らませるのであ
った

軽くあしらわれると樹から切符をもらい電車の時間が近いため歩きだす

ホームに行くところちょうど電車が来て急ぎ足で乗った二人であった

電車を揺られて十数分朝早い事もあり、スーツや制服姿の人がかなりいる

小さくて人ごみに押しつぶれそうな亜夜は片手で樹の服の端をつかんでいるのだが

樹のほうは必死な亜夜とは違いのんびりにケータイをいじっている

（女子かつ！！）とつつこみたい亜夜なのだが狭すぎてそれもままならないのである

そんなときであった亜夜が人生は初の『あれ』を体験したのは・・・

「ひゃう・・・」

お尻に何かに触れる感覚を感じた亜夜は次にやわやわといやらしい手つきでお尻を触られたのであった

見る見るうちに顔が赤くなる亜夜を無視して痴漢は手を止めることなくもみ続けている

「いつ・・・き・・・いつき・・・」

樹に助けを求めようとして、服を引っ張るが相変わらず樹は「ちよ、までもうすぐ終わる」といってケータイをいじり続けていた

幸いすぐに目的について降りたのだが亜夜はかなりの精神的ダメー
ジを負っていた

「ん？亜夜どうした顔赤いぞ？」

それに気づいた樹が声をかけてくれたが亜夜は瞳を潤ませて樹の目をじっと見る

「うつ」とたじろいだ樹は（こいつは男こいつは男・・・）と思い
此処でなかれたらまずいと思ったのか樹は亜夜の手をつかみ駅の外
へと連れ出す

「お、おい、どうしたんだよ」

樹に弱い目線を送り口をあけて小声でしゃべりだが、樹はきこえず「きこえねえよ」と言い返されたのもう一度亜夜はしゃべりだす

「おしり・・・もまれた・・・」

単語を二つ並べただけで顔を赤く染め下をうつむく亜夜

「はい？・・・えと、・・・痴漢って言うことですか？」

樹がそう返すと亜夜はこくんとうなずいて顔をさらに真っ赤にする
その様子を見た樹は亜夜の頭をなでながら「ごめんな・・・」とい
い一応反省はしているみたいだった

なでられて気分がよくなった亜夜は「なっ、なでるな!!」といい
樹の手を払いのけ、平常心を取り戻
したのであった

一方樹は（亜夜はなでられるの好きなんだな・・・）無駄な豆知識
が増えたのであった・・・

それからすぐ樹の友達と合流してどこかに遊びに行くことになった

12話

暫くの間ゲーセンに行ったりして暇をつぶした亜夜たちはお昼になり「sweet house」に来ている

「いやーそれにしてもなあ、樹の彼女がこんなにかわいはったとはおもわへんかったわあ〜^^」

関西弁でしゃべっているのは村谷 和弘むらたに かずひろで小学校の時から親友らしい

さつきから亜夜のほっぺをぶにぶにしてくかなり迷惑だ

「おいカズやめる嫌がってんぞ、第一初対面の癖になれなれしいぞ」

和弘に注意したのは東雲 龍しののめ りゅうで和弘と同じく小学校の時から付き合い

眼鏡をかけて容姿もいいのもてそうな人物である

龍に促された和弘はしぶしぶといった感じで手を離す

「そつえばなあ、今度こっちの高校で体育祭あるから暇ならみにきてやあ」

和弘はニコニコしながら亜夜に話しかけ、今度は樹と話し出す

やっと開放された亜夜はさつきまでいじられていた頬をもち「はあ」とため息をつく

「すまないな、あんなやつだから許してくれ」

それに気がついた龍が声をかけてきて、和弘のかわりに謝る

「あんなやつとは聞き捨てならんなあ、龍ちゃん？」

「『ちゃん』とはなんだ気持ち悪い、よるなごみクズカス野郎！」

罵倒の数々をならべて言葉で責めるが和弘はまったく気にしない様子でニコニコしている

「それはちょっとひどくないとおもわへんかい？」

相変わらずおっとりとした口調で言うがうつすら開いた瞳が少し怖いと亜夜は感じた

実を言うと和弘と龍はそれなりに喧嘩の強い不良でありたびたび問題を起こしているのである

一番すごいのは、二人で30人相手にしたことで、この時だけは警察のお世話になったらしい

こんな二人なのだが友達の数も半端なく多くかなり慕われているのが不思議である

「お前らな、こんなとききて喧嘩スナよ」

和弘と龍が口げんか（殴り合いの可能性も）を始める前に樹がとめてやり

和弘は元にした席に戻り、龍はもっていた本を読み出す

「（樹、この二人って仲悪いの？）」

樹の横にそつと移動して小声で尋ねてみると思っていたとおりの答えが返ってくる

「（まあそつだけど、でも喧嘩するほど仲がいいっていづじやん

」

12話（後書き）

たにむら
谷村 和弘 かずひろ

西山高校に通う高校一年生

身長177 体重66キロ

特技・趣味：お菓子作り・日向ぼっこ

好きな・嫌いなもの：かわいい子・「ん〜・・・ないわあ〜^^」

備考・細身で狐目なのんびり屋、

普段はおっとりしているが時には友達のことと怒ったりもする

そんな性格で友達も多くみんなから慕われている、実際亜夜

も嫌いになりに くいと思っている

しのめ
東雲 龍 りゅう

身長：182センチ・体重：69キロ

特技・趣味：特になし・妹と一緒に遊ぶ

好きな・嫌いなもの：妹・ に近づく男

備考：かなりのシスコンであり妹の言うことは何でも聞いてあげる

やさしい？お兄さんである

それと裏腹に学校ではかなりクールに過ごしている分友達関

係がからつきし である

13話

フォークを持ちケーキに近づけ、ある程度の弾力があり手に力をこめると、簡単に切れてしまう

そしてゆっくりと口に持っていき味わう・・・

「・・・おいしい〜（、*）」

頬に手を沿え幸せそうな顔をする亜夜、それを見た和弘と樹も笑みをこぼす

「ははっ、ほんっとお前好きだよな」

「そんな反応されるとめっちゃうれしいわあ〜親父も喜ぶでえ〜^^」

この「sweet house」と言うお店、実は和弘の父隆志^{たかし}が店長なのである

だから、樹が招待状をもらえたのだと納得した亜夜であった

「なんなら此処で働いてみたらあ〜？ケーキとか作れるし、あまりものとかももらえるでえ^^」

「ま、まじですか！！」

思いつきで和弘は言うが亜夜はその言葉に反応して椅子から思いっきり立ち上がり大声でいう

そのせいで周りの客から視線を集めてしまい顔を赤らめながら席に小さくなりながら座る

「あっはっはっ、いや〜亜夜ちゃんええわあ〜、おもろいな^^」

和弘は笑いながらそう言うと言手を伸ばして亜夜の頭をなで始めた

一瞬目を細めるがすぐに我に返りさつと手を払いのける

その一連の行動を見て（やっぱなでられるのすきだな亜夜・・・）と思う樹であった

「いまならなあ〜アルバイト募集中やけんな、すぐに働けるでえ〜^^」

「やります、やりたいです、ぜひ！」

またもや大声で言っつてしまい注目的になっつてしまふ亜夜であった

それを聞いた和弘は「あっはっは^^」と大笑いしてしまう

「んじゃあ、親父に言っつてくるから待っつときやあ〜」

そういつて席を立ち、奥のほうに入っつてしまふ和弘であった

亜夜はうれしさのあまり万円の笑みでケーキをほお張り一口のみこむたび「おいしい〜」といつてあつと言つ間に食べてしまつたのだつた

「おーい、働くのはいいけどお前今のバイトとかどうすんの?」

ケーキを食べあげた亜夜に樹が質問するが実にそっけなく「やめる

」と言われたので「おいお

い・・・」と苦笑いでうける樹であった

「そーいやさ、龍もここで働いてるんだろ、お前顔に似合わずパティシエ目指してるらしいじゃん」

さつきから黙り込んで本を読んでいる龍に樹が声をかけ、龍は本をたたみ返事をする

「かわいい妹のためだからな!」

この一言で亜夜はドン引きしてしまい持っていたフォークを落とすてしまう

どうやら龍はかなりのシスコンらしく、妹をめめている様子である話を聞くと、妹も妹でかなりのブラコンで休みのときはよく買い物に言ったり彼氏彼女みたいな関係である

その妹がパティシエになりたいと言うので自分が自らなって教えようと目指しているのである

そして最後に妹は小学6年生、背は168センチらしく、それを聞いた亜夜はかなり落ち込んだ

「・・・小学生に・・・小学生に・・・」

机におでこをつけて落ち込む亜夜に龍は励ましの一言をかける

「だ、大丈夫、亜夜ちゃん、背が低くてもかわいいからさ」

その一言が余計に亜夜を落ち込ませて、机におでこをぶつけだす亜夜

そんな時和弘が父親とともに戻ってきて難しい雰囲気から開放された樹と龍であった

「あららくなんかなつとるなあ〜亜夜ちゃんどないしたあ〜？」

さっきと同じように頭をなでて、慰めてあげるが和弘の父の一言でその行動をやめる

「かずつ、初対面の女をなでるな、お前はなれなれしいぞ」

ごつい声に反応して亜夜は顔を上げてみると目測で身長190センチあるうと言つ巨漢が目の前に立っていたので驚いてしまった

「・・・あう・・・でかい・・・」

周りの人物が大きすぎる亜夜にとってはこんなに落ち込むことはないだろう

ちなみに補足をする
と樹178センチ、和弘177センチ
龍182センチ
親父196センチである

一番小さな和弘でも23センチ、頭ひとつ分ぐらい違つのである

机におでこをぶつけながら落ち込む亜夜を心配する

「大丈夫かいなあ〜？まあ軽く説明だけ聞いていなあ〜」

うなずく亜夜を確認して説明を始める和弘はおっとりとした口調で話し始める

「ほな、まず働いてもらうことは最初にウェイトレスからやってもらってえ、やる気がある人だけ厨房、まあパティシエやれるっちゅう話なんやわあ」

説明をした和弘に続き親父もその後亜夜にはなしかける

「篠屋さんが希望するならすぐに厨房でもいいがな」

相槌だけを打つ亜夜は最後の親父の一言でぱつと顔を明るくさせてきらきらとした目で

「是非それで！！」と言いまたもや客からの視線を浴びる羽目になったのだった

そのまた数日後、無事今まで働いていたバイトをやめて、話し合った結果「sweet house」には

夏休みの間はウェイトレスで働いて、仕事具合がよかったら厨房で働くことになったのだった

その夏休みが、どんなにつらい日々になるのかも知らずに・・・

14話

7月中旬、夏休みまで後一週間と迫ったころであった、亜夜に災難が襲い掛かってきたのは

『ピピピ』と今日何度目かの携帯の目覚し機能が部屋に鳴り響く

けだるさの中ゆっくり目を開けて、携帯を手に取り停止させるとまだボーとした頭でさっきまでのことを思い出す

「またか・・・」

手で頭を押さえながらそうつぶやくと上半身だけ起き上がる

亜夜が言っているのは高校入学後、数日に一回見ていた夢を最近なり、毎日のように見ていた事である

そのせいか、頭痛で頭が痛なる亜夜であった

おぼつかない足つきで部屋にかけてある制服をとると、時間をかけながらゆっくりと身にまとう

その後部屋を出てリビングに下りると「はぁ」とため息をつきながらソファに横になる

時計はすでに8時近くになっているが、あまりにも体がだるく動けなかったのであった

「やばい・・・熱あるかも・・・」

手をおでこに当てて自分の体温を測ってみるといつもより高い気がするので学校に行こうか行かないかを迷っていた亜夜だが頭が痛くて眠るに眠れない状況なので学校に行くことに決めた

「それに、ちゃんと行かないと・・・悪いよね・・・」

そついうといまだにおぼつかない足つきで家を出て、普段30分くらいの道のりを一時間以上かけて歩いていったのだった

「亜夜、お前大丈夫か？保健室とか行ってみたらどうだ？」

休み時間、机に伏せきつた亜夜に心配した樹が声をかけてくれるが、今はそれも言い返すのもいやなくらいだるい亜夜であった

「・・・動くのも・・・めんどくさい・・・」

机に顔を伏せながら樹に聞こえるか聞こえない位の声でそついうとちょうどよく授業開始のチャイムが

鳴ったので樹は前にある自分の席に着いたのだった

そして最悪なことに次の授業は藤沢で、下を向いている亜夜は確実に当たるであろう

「じゃあこの問題、篠屋に解いてもらおう」

予想的中、藤沢に当てられた亜夜は顔をあげ、ゆっくりたつと今さら問題を見始めた

しかし、亜夜の視線はさだまらず黒板に書いてある数式がまったく読めなかった

「亜夜、やっぱりお前きついんじゃないか？」

また、心配した樹が後ろを向いて小声で声をかけるが今の亜夜の耳には届いておらず返答をしなかった

顔がどんどん真っ青になっていく亜夜を見てとうとう樹が「亜夜っ？」といい立ち上がると、まさにその瞬間、亜夜は視界の端に樹を見たたん意識をシャットダウンしたのだった

15話

虚無、それしか言いようのないような空間に亜夜は立っていた

何もなく、色もなく、自分が今たっているのもわからないような感覚であった

だがそれ以前に体の熱が高まりきってかなりきつい状態でそんなこともわからないままな亜夜であった

(熱いつ！熱いつ！熱い熱い熱いつ！)

胸から沸き起こる吐き気にも似た感覚

次第に体全体に周り痛みが変わってしまう

(いたいよお・・・頭がかち割れそう)

頭を抱え込み大声で叫び痛みを紛らわそうとするがそんな努力もむなしく痛みはさらに勢いを増す

(なに？・・・だれ？)

そんな亜夜はかすれた視界に入った人間らしき人物に意識を向けたが

視点が定まらず、どんな人物かもわからない

「・・・」

「・・・」

人影はつぶやくが、痛みに悶えている亜夜の耳には入らなかった

そして視界から瞬く間に消えた人影だった

・・・刹那、亜夜の体から炎が巻き上がりあつという間に飲み込まれる亜夜であった

ただの炎ではなく、蒼く透き通るような、現実には存在しえない炎だ

(いやっ！、もえるう、ひゃあ！あついい！)

声にならない声で叫ぶ亜夜、しかしそれが誰に聞こえることもなく自分の心で響く

もがき苦しむが一向に自分が死なない事が気にかかる亜夜はそつと目を開けてみるとそこには何も映らなかった・・・

そう、いつの間にか炎は消えていてそれとともに痛みも消え去っていったのだった

「苦しく・・・!!」

『苦しくない?』と言おうとした亜夜は自分の口を押さえて戸惑いの表情を見せる

もともと声が高い亜夜でも、さすがに女みたいに高くはない・・・はずだ

だが今出した声はよく透き通るソプラノの声なのだった

もしかしてと思った亜夜は次に視界の下に見える男ではありえない豊かなふくらみを凝視する

『乳房』、そう表現しかできないものがそこについていた

次にその下にいつもならあるものを見ようと思つが一瞬ためらって目を瞑る

見なくてもわかる・・・今までであったものが急になくなってるのでから・・・

そんな言葉が脳裏をよぎるが、確認してみないとまだわからない亜夜は恐る恐る自分の股間を覗く

「・・・そんな・・・」

やはり間違つてはおらず、自分の股間にあるのはあるはずのない恥丘だけであった

(あはは・・・そうだ・・・これは夢だ・・・夢なんだよ・・・何本気になってんだよ)

今見ているものはすべて夢、そう思った亜夜は狂つたように笑い「あははは、ばかみたい、ははは」と言いながらなぜか涙を流していた夢とわかっていても、現実に戻ったら女になっていた・・・そんな悪いイメージが思い浮かび目を覚ましたくないのもまた本当であった

笑いながら泣きじゃくり、疲れきつた亜夜はいつの間にか夢の中で

眠りについてしまった

16話

目を開けると何度か見たことのある天井が見えたので、すぐに今いる場所がわかった亜夜だった

頭痛がまだするが体のだるさはある程度取れているので、上半身だけを上げて辺りを見渡すと

どうやら自分がベットに寝ていたことにきずく

頭をおさえながら、上履きを履き、薄き緑のカーテンを開けるとそこには樹と

保険医の先生が座ってなにか話をしていた

「亜夜っ！お前大丈夫か、急に倒れて、心配したんだぞ」

椅子に座っていた樹が急いで近づいてきて少し大きな声で言う

「まだ頭痛いけど、もう大丈夫だと思う・・・心配・・・ありがと・・・」

大丈夫だと言うことを伝えると、心配してくれたことに感謝の言葉を照れくさそうにかけて言う

ほっとした樹に続き、保険医の先生が来て今まで樹がずっと心配してくれたことを伝えてくれた

「じゃあもう下校時間だから帰りなさい、それから帰ったら無理し

ないように寝ておくのよ」

とつくに5時すぎてもうそろそろ30分近くになるので下校を促される、安静にしておくことを最後に
言われ「はい」と短く返事をする、樹が持ってきてくれた鞆を持って保健室を出た

「いや、今日はまじでびびったぜ」

きつと倒れたときのことを言っているのだろう、保険医が言うには樹が背負ってつれてきてくれたらしい

「……うん、僕も今日はだるかったから……行かないほうがよかった……」

頭痛がするせい、かつい『僕』が出てしまう、亜夜はいまさらながら、学校に行ったことを後悔する

暫く亜夜にあわせてのろのろと歩く二人だが、時間がたつにつれて頬が赤くなりせきをしだす、亜夜だった

「おいおい、大丈夫かよ」

いったん足を止めて尋ねてくる樹に亜夜は「……やばい……」

かも」と言って冷や汗を流しだす

樹もやばいと思ったらしく、亜夜のそばによつてしゃがみこみ「ほら」と言つて亜夜をおぶろうとしている

いつもなら「乗るかばか！」とか、嫌がるだらうが本当にきついのかすぐに樹の背中に抱きついた

「ありがと・・・」

立ち上がつて帰り道を歩こうと思つた樹にすうすうと亜夜の息が聞こえてきた

そして夏の暑い中、亜夜をおぶつて帰つた樹であつた

16話(後書き)

最近テストやらで(授業出てないけど...)ネタを考える暇がまったくなかったよ...orz

でも今日からまた暇な日々がすごせる!!

ので、今日は予兆編を終わらせて次の...何にしよう...
タイトル考えてない...ま、いつかww

と言う独り言でした、お暇な人がいればできるだけ感想を、ダメだだけでもいいのでお願いします。

17話

「亜夜、おい、家ついたぞ」

背中にいる亜夜に声をかけるが深い眠りについていてみたいで返事がない

あいてないだろうと思いつつも一応玄関の扉をあけてみると予想と反して簡単に扉は開いてしまった

「誰かいるのか？」と思つた樹だが、中を見てもいつもの亜夜の家なので別の理由があると考えた樹であつた

「そんなに疲れてたのか・・・無茶しすぎだろ」

亜夜はきちんとした性格なので、いつも家を出る際戸締りをしているが今日と言う日はつかれもあり、やるのも忘れていたのだろう

そう思つた樹であつた

家に入り、リビングに行くとき亜夜をそつとソファにおろす

まだ顔が赤く、おでこに手をやって体温を確かめると普通より高いと感じた

また亜夜をおぶり、今度は二階へと上がり亜夜の部屋へと向かう

部屋に入りベッドに亜夜をおろすと暫く様子を見て大丈夫と判断した樹は亜夜の家を後にした

本日二度目の、何も無い空間に来た亜夜

しかし今回は痛みや苦しみを『何も感じない』・・・いや痛みだけではない、『すべて』感じない・・・

やあ・・・

直接脳に響くような声が聞こえた亜夜だった

バツと後ろを振り返ってみると、見覚えのある・・・毎日鏡で見たことのある人物がたっていた

「お・・・俺？」

白い布つ切れを着た『自分自身』がたっていたのだった

フッフ・・・違うよ？

不気味に笑う自分に恐怖を覚えながら、後ずさりをして逃げようとする瞬間『自分』が目の前に立っていた

「うわっ!」

驚いて後ろに倒れこむと、不気味な笑顔のまま『自分』が迫ってくる
鼻と鼻がくっついてしまいそんな距離で頭に直接しゃべりかけてきた

時は来た、返してもらおうよ……

言い終わった直後唇を重ねられてしまい逃げようにも、のしかから
れていて身動きの取れない亜夜だった

十数秒、長い間の口付けが終わり、気持ちの悪さに口をぬぐう

そして胸のおくが熱くなる感じがしてくるとそれは次第に痛みにな
り、その痛みにもがきだす亜夜

「……何しやがった！」

『自分』から見下されるような目線で見られると、この痛みが『自
分』の仕業だとわかり怒鳴り声を上げる

しかし『自分』が返事をする前に、ある異変に気がついた

『自分』の着ている服は、さっき亜夜が着ていた制服で、亜夜が着
ているのは『自分』の着ていたぬの
つきれだった

疑問を浮かべそのことを聞こうとした亜夜は再び『自分』に視線を
向けるがもうそこには何もいなかった

立ち上がり辺りを見渡すが何もない真っ白な空間しかない

胸の痛みで手を胸の前にやっているがさっきの混乱で気がつかなくなつた異変を感じてしまう

『胸が膨らんでいる』、『下に何も感じない』またかと思い確認すると案の定自分の体は女になっていた

「・・・またか・・・よ・・・」

苦しさに耐えながら一言言つとそこでまた意識がシャットダウンしたのだつた

17話（後書き）

いや〜やっとなんか新しい章？（というのかな）にたどり着きましたよ
なんかだからなら書きすぎて失敗しましたね・・・

まあこれが私の性格なので勘弁してください

感想、評価等お願いします！では！！

18話

雨のふる音で目を覚まして、ぼうつとした頭でなぜ今いる場所にいるのかを考えていた

(ん・・・あれ？何で部屋いんだ？)

自分が寝ているはずのない場所で起きて戸惑うが、すぐ近くにおいてある紙をみてわかった

『無理スナよ！そして感謝しろ！！』と一言、見慣れた字で書かれていて、すぐに樹が此処までつれてきたのだとわかった

でも、まだわからないことが亜夜にはあった、それはなぜ自分の記憶が朝起きてから今まですべてが『抜けていた』からだ

(熱あつて、学校に行こうとして・・・それから・・・)

思い出そうと朝の出来事を思い出してみるのが『熱があるのに学校に行った』という記憶しか思い出せず、その後のことを思い出そうと急に頭痛が襲ってくる

(つつ！・・・いた・・・)

そんなに激しい頭痛ではなく、すぐに引いていくが思い出す前にまず、熱のせいで汗を大量にかいたのでシャワーでも浴びようと思つた亜夜は部屋を出て行く

(汗でベタベタだな・・・)

制服を脱いでいこうとシャツに手をかけたその時胸にないはずのものがあつた

いやな予感で冷や汗を流すと、次第に記憶のなかつた『夢』を断片的に思い出していく

(まさ・・・か)

フルフルと小刻みに手を震わせて、視線を下に向けるといつもは膨らんいるはずのない胸が見えた

「なんだよ・・・なんでだよ・・・」

怒りと悲しみが入り混じつたような声色でつぶやくと、下のほうも確認するためズボンをぬぐがそこには男のシンボルはなかつた

ただあつたのは薄い産毛のようなものと、それに包まれた肉の割れ目だけであつた・・・

この日、亜夜は本当の女になってしまったのだった・・・

18話（後書き）

長かったようで長くなかったような・・・

そして今日、ついに亜夜ちゃんが女になってしまった！！

ちなみに が設定です

身長：152センチ体重34キロ

まあロリです、ツンデレです、時々甘え方が凶器になります

スリーサイズは・・・どうしよう・・・

未設定です！！、たぶん平均ぐらいですよ小5ぐらいのWWW

では感想等お待ちしております！

モチベーションあがるので是非してほしいです、お願いします！

「……………」

部屋の中、夜中だというのに電気もつけず亜夜はベットの上で魂の抜けたような表情をしていた

ないてもなく、怒ってもなくただぼうつとうつろな目でひざを抱えて座っている

これは夢であってほしいと願いつつも、目が覚めて現実だったらと知ったらなおさらショックである

だからさつきからずっと寝ようか寝ないか迷っていた亜夜であったそんな時、携帯からメロディーがなり、着信を知らせる

誰だろうかと画面を見て確認すると『神野 樹』と表示されていたこの時亜夜は迷っていた、『自分が女になったことを樹にしられたら……』そんなことが頭の中に浮かぶ

初めてとも言える、まともな友達、たった一人しかいない身内の次に大切な人

(どうしよう……、出ようか……でも……ばれたら)

十数秒間考えて結果亜夜は携帯をおいてベットにもぐりこんでしまったのだった

(いやだよ・・・樹と・・・いられなくなるかも・・・)

自分が女になったことを樹にしられ、最悪の結果を思い浮かんでしまふ亜夜は電話には出ず眠りにつこうと考えたのだった

カーテンの隙間からこぼれる光に当てられ、目を覚ます

それと同時に自分の体がまるで自分の体ではない感覚をいやでも感じてしまう

胸の重さとしたの喪失感、それだけで昨日の事が現実だと思い知らされる

なかばあきらめていた亜夜もつい涙を流してしまい、唇をかんで涙をぬぐう

ベットからおりて携帯を手に取り時間を確かめると着信に樹の名前がいくつも並んでいた

電話が2回にメール三通、亜夜が眠りについてから来ていたのだ

「樹・・・」

うれしかった、ただそれだけの感情が女になったことも忘れさせてくれる

特殊な環境のせいで、今までこんなに心配されたことなどなかったのだから……

しかし、忘れさせてくれたのはほんの一瞬だけであった

部屋からでて顔でも洗おうと洗面台にたつと始めてみる自分の体をつい凝視してしまう

「これが……俺……」

顔こそあまり変わっていないが、全体的に小さくなったことがわかる腕や足を見ても少しあった筋肉がそげおちてぷにぷにした肉質になっていた

見違えるほど、と言うわけでもないが変わったのは目で見ればわかる

「……」

改めて女になったことを思い知らされて落ち込み言葉が出ない亜夜しかし、いつまでもうじうじしてられないと考えた亜夜はまず汗をかいた制服を脱いで風呂に入ることを決心した

19話(後書き)

誤字脱字等ありましたら教えてください。
感想もできればお願いします、では。

20話

「はぁ……」

短く、感情のこもったため息をひとつ、シャワーを浴びながらついた目の前にある鏡に映る自分の裸体をぼうつとみつめては目を瞑り、また目を開いてを繰り返していた

(いつそ狂いたいよ……)

そう思うのも無理はなく、壁に手をつけて下を向き落ち込む亜夜

しかし今自分が狂えるほど荒れていないのは事実で逆にものすごく落ち着いていた

(いつまでもうじうじしてらんないよな、さっさとあがる)

いったんシャワーの蛇口をとめて、浴室の椅子に座るとシャンプーを手に取りあわ立てて頭を洗い出す

触って気づいたが髪質がやわらかくなっており、自分の髪じゃないみたいな感覚だった

再びシャワーの蛇口を回しお湯をだし、泡を洗い流し次に体を洗うためタオルを手に取り泡立て始める

腕、胴、足と洗っていき途中胸を洗う時、変な感じになってしまい頬を赤くなるが綺麗に洗いあげて最終的にどうしても洗いたくない

場所までたどり着く

「どうしょ・・・」

亜夜は迷っていた、此処に触れてしまえば自分が本当の女だとわかってしまいそんな恐怖ともいえる感情を抱いていた

明日起きたら元に戻ってるかもしれない、じゃなかったら、いつかは慣れればいけないかもしれない

（でもいつか戻れるよね・・・うん、それまでの辛抱だよ・・・）

そう信じた、いやそう信じるしかない亜夜は意を決してフルフルした手で秘部を洗い出す

「ふにゃっ!!」

体中に電気が走るような感覚をかんじて猫のような甲高い声を発する
何がおきたかわからなかった亜夜は内心あせってしまい椅子から落ちちてしまう

立ち上がって自分の恐る恐る、そーと触ってみると今度は強くない刺激が、そして誰もが感じたことのある感覚を感じた

「ん・・・はあ・・・」

自慰をする時の『気持ちいい』と言う感覚

好奇心・・・そんな感情だけで今の亜夜の枷をはずすのは十分だった

芽生えた欲望はとめれることのできず、指を肉の割れ目へと埋めていく

しかし男の時とは違い感じ方は数倍もいいと思った亜夜は欲望に負けてさらに自慰行為にふけてしまう

くちゅくちゅといやらしい音が浴室に響き渡りその音と比例して肉の割れ目からどんどん愛液があふれ出す

目の前の鏡に映る自分はとていやらしく、目はとろんとして見るものすべてを誘惑しそうな表情だ

(こんなの、だめ……でも……気持ちいよお)

頭の中ではダメだとわかってても、それに反して指は激しく動くだけで欲望をとめれない亜夜であった

女になってすぐやることが自慰だと自分でも思っていなかった……

欲望に負けて、気持ちよくなっちゃえば？

女の体はこんなにいいんだよ？

この先を体験してみれば？

更なる誘惑が亜夜の頭に響いて、よりいっそう激しく指を激しくなっ
つていき絶頂まであと少し意のところまでいく

この時亜夜はただ本能に忠実な、雌となっていた……

「くふう……んはあ……んああ！」

あまりの激しさのせいで、指が割れ目の突起物にあたり亜夜を更なる高みへと追い上げる

「い……くう」

頭の中が真っ白になりながら、意識をつなぎとめようと必死に壁に手をつけて息を整えようとす

そして、後悔と恐怖に身を震わせて今時分のしたことに涙を流してしまう亜夜

「あ……ああ……何してんだよ……俺……」

男の癖に？……やらしい……

思ってもいないことが頭のなかで、眩きかける

（ち、ちがう！！）

いつそ女になつちやえばいいんじゃないの？

「だれがなるもんか！！」

つい声に出して大声で発してしまう亜夜の声は誰に聞こえることもなく、風呂場にこだまする

でもそこ、まだ物ほしそうにしてるよ？

指摘されて視線を下に向けると、割れ目から蜜をたらしながら物ほしそうな女の秘部が見える

「ちがう……ちがう……」

再び瞳から大量の涙がこぼれだし、こんな自分に絶望を覚える亜夜だった

クフフ、体は正直って事だよ……

亜夜はもう逃げ出したかった、自分自身で身を滅ぼすようなこの衝動を抑えるため

「本当に欲望に負けてしまう」そう思った亜夜はびしょびしょな体のまま服を着て風呂場を後にしてリビングのソファに泣き崩れてしまった

20話(後書き)

今回はエロさも含まったシーンが主でしたね
表現がおかしいところもあるかもしれないけど、自分一応14歳なん
で・・・
では感想等お待ちしております！お願いします！

A r u s h e l i k z e r o l o v e n e l i t h

「あはっはっはっ、女になってすぐ自慰とは、おもしろいやつだな」
茜色の空に『浮かぶ』二人の人の一人、長身で男らしい顔立ちの男
が大きな笑い声で亜夜をあざ笑う

「それにしてもお前、あいつに何かあるのか？」

視線を変えてもう一人の長髪のほうの男に声をかける

長髪は少しの間を空けて、考えたように口を開いた

「君には関係ない・・・それにあの子はおもしろいしね」

微笑むように、かすかに口を曲げた長髪の男は、手をさし伸ばして
かざした場所の空間を『歪ましていく』

「じゃあ、僕は行くから・・・」

そういつて『歪んだ』空間に入っていく、だんだんと周りの空と『
同化』する

「はっはっはっ、そんなお前も十分面白いがな!!」

またも大声で笑うとその男も周りの空間を『歪まして』空間と『同
化』していき消えてしまった

A r u s h e l i k z e r o l o v e n e l i t h (後書き)

すみません!!

今日用事が詰まって超すくないです!すみません!

それと最近パソコンの調子が悪いのでちかじか修理に出して使えなくなるかもしれません

その時はまたお知らせいたします、

それとお願いです私のモチベーションを上げるため感想等かいてくださいm(ー)ー)m

あとおかげさまで総合評価100に達しました

ほかの小説見ると何干とかいってるけど、私これだけでもうれしいです

ありがとうございます、これからもご愛読おねがいします、では!

21話

「ん……」

うつすらと目を開けて、ボーとした表情でソファからたつ亜夜

夕方の五時になって、目を覚ました亜夜は真っ先に自分の体を確認した

わかりきっていたが女の体で、もう本当に夢ではないと信じた

（……もう、だめだよ……戻れないんだよ……絶対に……）

もうなくことにも疲れた亜夜はただリビングの床にひざまずいて気分を落ち込ませるだけであった

あきらめかけた亜夜は再び立ち上がって、ぬれた服を着替えてできるだけ露出……女だとわからないような服を着て気分を落ち着かせようとテレビをつけた

そんな時、不意に玄関からチャイムが鳴って誰かが来たことを知らせる

出ようかでないか迷った亜夜だが扉にチェーンをして出ればいいと思っただ亜夜は玄関に向かった

扉をゆっくりと開け、チャイムを鳴らした人物を確認しようとした亜夜は今一番あいたくない人物に出会う

「よつ亜夜、まだ熱とか、っておい！」

扉から亜夜の顔を見ようとして覗き込む樹に反応してつい亜夜は扉を閉めてしまったのだった

ばれたら、もう前みたいな関係じゃいられなくなると亜夜はそう思っていたからだ

今まで友達と言える友達がない亜夜にとって初めてとも言える親友なのだから、この関係は崩したくない、それが亜夜の正直な気持ち、今はまだ伝える時ではないのだ

「おい亜夜、どうしたんだよ？何かあったのか？相談なら乗るぞ？」

(相談なんてできるわけないだろ・・・女になったなんて・・・)

樹の気遣いの言葉すら今の亜夜にとってはただ苦しめる武器でしかなかった

「・・・ゼッターなんかあったな・・・」

返事のしない亜夜を絶対に変だと思った樹はため息混じりにそういうと次の言葉を亜夜にかけてくる

「よしっ！お前が話すまでここいるから話したくなったら出て来い
！！」

いったいどのくらいの時間がたっただろうか、本格的に空が暗くなり始めたころ亜夜は痺れを切らして扉のチェーンをはずして外の様子を伺う

「やっぱ・・・帰ってるよね・・・」

かえって女だとばれることもなくなったが、少し心が傷ついた亜夜だった

どうせ自分はどうでもいいんだ、そんなあきらめた表情で振り返って家に帰ろうとした亜夜は、急に後ろから肩をつかまれてびくつと体が大きく反応してしまう

「亜夜、やっと出てきたかほらこっち向けよ」

肩をつかんだのは樹だった、今、最も会いたくない人物とあってしまったのだった

樹が腕力で体を振り向かせようとして、亜夜も一応抵抗したが女になった力では弱弱しくすぐに力に負けてしまった

「亜・・・・・・y?」

正面を向いた亜夜を見たたん樹は驚きのあまり亜夜の名前がうまくいえなかった

一方亜夜は自分が女だとばれてしまい、今にも逃げ出したいのだが足が言うことをきいてくれずうごかない

「お前・・・亜夜だよな？」

疑いの表情した樹に、亜夜は返事を返せずただ立ち尽くすしかなかった

「おい、返事しろよ、亜夜だろ？どうしたんだ？」

つかんだ肩を強く握り締めて、痛さを感じた亜夜だがそれすら口に出さずただ下唇をかみ締めて瞳を潤すしかできなかった

「・・・何があつたかしんねーけど、俺に話せることなら話してくれ？・・・な？」

樹のやさしい一言に亜夜は涙を出して返事をする事しかできなかった

ただ泣いて泣いて、涙がもう出そうにないのに、たくさん嗚呼をもらしながら亜夜はないていた

亜夜はこの一言で救われるような気がして、つい樹に抱きついてしまった

「おい亜夜・・・」

そんな樹は頬を赤らめながら、亜夜の頭をなでて落ち着くまでまっただであった

21話（後書き）

やばいで本格的に・・・パソコンが・・・
今日起動させるのに30分くらいかかった・・・
んゝいつ修理に出そうか・・・ただの容量不足じゃないからなあ・・・
早く直したいですね、うん
では感想等お待ちしております！お願いします！

22話

「じゃあ、話してもらおうぞ?。」

やっとのことで泣き止んだ亜夜をリビングに誘導して、話を聞く樹
さっきの反応とは違い、コクリとうなずくと亜夜は重たそうに口を
開いた

「昨日、学校から帰ってだるかったからそのまま寝て、おきたら女
で・・・あはは、変だよねこんな
の・・・でも・・・俺・・・女になっちゃって・・・」

乾いた笑い声で昨日の話をする亜夜は再び瞳を潤ませて泣きそう
になっていた

「その・・・本当か?。」

樹の質問に頭で返事をする亜夜は樹の座っているソファの横に移動
すると樹の腕をつかんで自分の胸へと持っていく

フニツとやわらかい感覚を手に感じた樹は顔を赤らめて拒むことな
くつついっ触ってしまう

「ほら?それに下も何もなくなってるし・・・」

「お、おい、わかったって、もういい、もういい」

次に立ち上がって、ズボンを脱ごうとした亜夜は樹の静止の言葉でその行動をやめた

実をいうと今の一連の行動で樹の息子は元気を出してきていたのだ

(うおお、こいつは男だ男男男・・・)

と自分に言い聞かせてやったのことで落ち着きを戻したのだった

「じゃあ・・・これからどうするんだ？戻れそうなのか？」

「わかんないよ・・・わからないから戻れないんだよ・・・」

樹の質問でより落ち込んだ亜夜であった

「で、でもこれからどうするんだ？学校とか？」

「学校はいく・・・これ以上何もかもが変わるのはいやだ・・・でも、ばれたら怖いし・・・」

それに樹もおかしいと思うだろ？・・・いきなり女になったから？」

樹の核心を聞こうとつい言葉に出した

正直おかしいとおもわれてるのはわかっている亜夜は、これからの関係が前と変わるかもしれない、そんな言葉が脳裏によぎっていた

「亜夜・・・大丈夫だよ、俺はお前の親友だろ？今までと同じで、これかもずっと一緒だよ」

亜夜の心配していることがわかったのか樹は笑いながらそういつてのけた

予想とは裏腹に、樹の笑いながらいった言葉に驚いた亜夜はうれしさを飛び越して、安心感すら抱いていた、樹と一緒になんだか落ち着く、そんな感情が芽生えていた

樹の笑顔が、今の亜夜にとって、最高の幸せを与えてくれるような、そんな感じがした亜夜

「んじゃあ、帰ってこのこと母さんにはなしてみるよ」

ソファから立ち上がって、亜夜にそういうと、鞆を持って帰る準備をする樹

亜夜はそんな樹の手をつかんで、「もう少し……いて……」といておしとどめたのだった

そうして暫くして樹から「もう大丈夫か？」と聞いてきて亜夜も満足したのかコクリとうなずいて返事をした

「じゃあ、今度からなんかあったら言えよ、ぜってーに何とかしてやるかな」

そう別れ際に言ってきた言葉が再び亜夜の支えになって、亜夜はうれしかった

「うん……ありがとう……」

できるだけ明るく笑おうとした亜夜だが、さっきまで泣いていたせいもあつた涙の後がみえて痛々しい

「じゃあな、明日ここくつから無理な時は無理って言えよ」

手を振つて、玄関からでていく樹の背中を見つめる亜夜、しかしそれは扉が閉まり一瞬で終わってしまった

「……樹」

親友の名をつぶやくと、ぬくぬくと胸のおくから暖かさが滲み出ていき、安心感に包まれた亜夜だった

22話(後書き)

では感想等お願いします！

23話

朝早くからおきて、朝食も食べ終わった亜夜は学校に行くため、制服と格闘していた

「う・・・きつい・・・」

胸が大きくなって、男子用の制服がきついのでなかなか着れないでいたのだ

何度か試した後、無理と思った亜夜は樹にでも相談して見ようと思いい、樹の来るのを待った

十数分後、玄関からチャイムが鳴りいってみると樹と秋さんが扉の前に立っていた

「亜夜おはよ」「おはよう亜夜ちゃん」

二人で亜夜に挨拶すると亜夜は秋がいることに警戒して、胸を隠すように腕組みをする

しかし秋は、昨日、樹から話を聞いて亜夜の現状について知っていたのでその行動を見てチョットおかしく見えたようで、亜夜に微笑みかける

「亜夜ちゃん、昨日いつちゃんから話し聞いたわよ」

秋の補足でなるほどと思った亜夜は、気を抜いて肩の力をそっと抜いてあんよのため息をついた

二人とも家に招き入れると秋が亜夜に話しかけてくる

「じゃあ亜夜ちゃん、こっちにきて」

秋に手を引かれながら玄関から離れると、秋は亜夜の部屋へと上がっていき樹に「いっちゃんはいってこないで」といって内側から鍵をかけたのだった

「あの〜？なにするんですか？」

いやな予感がした亜夜は秋に尋ねるが、聞かれた本人はとびっきりの笑顔で「身体検査（死語）」といった

その台詞で完全に凍りついた亜夜は顔を引く付かせながら「冗談・・・ですよ「本気」と言われた瞬間秋にのしかかられてしまいひどい目にあった

24話

身体検査から数分後

「ひゃあ！、秋さん・・・そこは・・・あう・・・」

「いいじゃない減るもんじゃないし）ぐへへ」

「いやー！いつきー！たすけてえー！」

『身体検査』は本当なのだろうかとドアの外で思った樹であった

）そして数分後

「あつ・・・ん・・・そこはあ・・・（恥）」

部屋の中から如何わしい行為をしめす声が漏れてくる

「むふふふふふふ……（ハアハア）」

秋はそのかわいらしい反応につい興奮して亜夜を押し倒しているの
だろうと外にいる樹はそう予想していた

（やばい！！俺のキャノン砲が！！）

そして樹のほうも、欲望との戦いをしていた……

くさらに数分後く

「いやく完璧な女の子だったわく（ニヤニヤ）」

亜夜に背を向けながら半端なく笑顔な秋、それとは反対にかなり落ち込んで自分の服の乱れを直し流れ出てきた亜夜

顔が真っ赤になっているから、大体の予想（すでに声を聞いていたが）はあたっていたのだろうと樹は思った

「んでさ、『完璧』ってどゆこと？」

秋の発した言葉にふと疑問を感じた樹がたずねてみると、秋はちよつと笑いの表情を隠して真面目な顔をした

「亜夜ちゃんには悪いけど・・・あと1、2ヶ月後に生理がくるわ」

秋の言葉を聞いてため息をする亜夜、きつとそうだろうと、いつかは自分が『普通』の女になることになるのをうすうす感じていた

だがしかしこの言葉で逆に亜夜は吹っ切れたように、自分の頬を思いつき叩いた

「ぱん！」と乾いた音が鳴ると、少し痛かったのか手で頬をさすっている

「うすうす感じてましたよ・・・でも、いつかきつと戻ることを信じてますので、それまでの辛抱です」

少し無理のある笑顔で秋に振舞ったが、秋はその言葉で顔を曇らせたのだった

樹は何かあると思いき秋に聞こうと思った瞬間、秋は自らの口で亜夜につげた

「亜夜ちゃん・・・この際言っわね・・・『戻れない』かもしれないわよ？」

秋のあまりにもひどすぎる言葉で、亜夜は固まってしまった

「一日で男から女になるなんて不可能よ、まあここに実例がいるけど・・・体に負担がかかりすぎて二度も性別が変わったら本当に命

にかかわるわよ……」

続けて現実的な事実をつきたてられて秋をみていた視線がどこか遠い視線に変わる

樹もひどいと思い「母さん！何言っただよ？冗談だろ？」と亜夜の変わりにいってやるが

秋の返事は無言で、戻らないことが事実だとしらされる

「え？……あ、……う……そ……だろ？」

あまりにも衝撃的な事実には亜夜は口をぱくつかせ、瞳にはもう力はない

秋もやばいと思ったのか亜夜のそばにちかよって、そっと抱き上げた

「亜夜ちゃん聞いて？女になってもね、私たちはあなたが男だったのを知っているのよ？……それに自分が男って思ってるなら、男よ……わかった？」

そのかけ声で、亜夜の瞳に色が戻っていきいつもの力強い目になる

（そうだよ……そうだよね……それに落ち込んだらせつかく心配してる二人に悪いよだからできるだけ……できるだけ心配かけないようにしないと）

「はい……ありがと……ごじます……」

目にたまりかけた水分を手でふき取り秋にそう返事をすると秋はに

こつと笑い亜夜を再び抱きしめた

(なにか懐かしいかも) と思った亜夜は嫌がることなく受け入れた

「じゃあ学校行きましょ!、遅刻するわよ」

時計を見た秋はぱつと手を離して、亜夜と樹に呼びかけると三人でリビングへとむかった

24話(後書き)

ああ〜・・・疲れた・・・

やばいですねえ、小説のネタが尽きそうにやのだ!

堂々と言うことではないけど・・・

でもがんばっていききたいと思うので、これからもよろしくお願いします
ます

では、感想等あればお願いいたします批判とかアドバイスでもいいので
お願いします!!

25話

「あっ・・・」

一階へ下りてきた亜夜は思い出したように、声を出した

それに気がついた樹が何かと思い「どうした？」ときいてみると、自分の胸をさして「制服が着れないんだっ」と言い返す亜夜であった

確かに今の亜夜は男子用の制服が切れないのはかなりやばいことであるので、そのことを秋に話してみると、いったん車までもどり、包帯みたいなものを持ってきた秋だった

「そうだろうと思ってね、さらし持ってきておいたの、チョットはふくらみをおさえられるわよ」

この事を予測しておいた秋は、亜夜の服を兆速で脱がしてさらしを巻こうとして、その間樹は顔を赤くしながら横目でチラチラと見ていたのだった

「はい、出来た〜苦しくない？」

「うーん、チョット苦しいけど大丈夫だと思います」

制服のボタンをつけながら少し息苦しいも、いつもの生活に支障が出ないと思った亜夜は秋に大丈夫と声をかけた

「じゃあ、行きましようか」

その言葉を聞いた秋はふうと一息入ると、亜夜の手をとって車に乗り込み学校へとむかった

「あららく完全に遅刻ね・・・でもまあ色々事情があるから今回は良しとしましょうか」

学校についたとたん、授業開始のチャイムがなり始めて、秋は二人に言う

そのことを聞いてゆっくり学校に向かって歩き出そうとした時、後ろから秋に呼び止められたので振り返ってみる

「亜夜ちゃん、今日用事ない？」

秋は車の鍵を鞆にしまいながら、亜夜にきいてきて、今日何かあるか考え出す亜夜

「別にないですけど」

「じゃあ放課後職員室に来てくれない？いい？」

「はい、わかりました」

別に用事のない亜夜はすんなりOKを出したが後々思えばもう少し内容を聞いてみればよかったと思う亜夜である・・・

25話（後書き）

亜夜の絵を描いてみたけど………なんかチャイナ風になってしまった……

たぶんストーリー上中国関係がでてくるので（わからないけど）そこで出したいと思います（期待はしないで下さい！絵下手なので！）

では、感想等お待ちしております！

26話

「……大丈夫かな……」

教室に向かう途中、亜夜は無意識のうちにつぶやいていた

それを横で聞いていた樹は亜夜のほうを振り返ってやさしい笑顔で言う

「大丈夫だよ……ほら行くぞ」

そっと手をさし伸ばして手を引いていく樹に亜夜はただただついていくしかなかった

一歩ずつ教室に近づくと、亜夜は不安が蓄積して、教室の前まで来ると樹がつかんでいた手を振りほどいてどこかに行ってしまうおもう思ったりしていた

「亜夜はいるぞ」

しかしそれは樹の言葉によってとめられた、昨日の一件から亜夜は樹に信頼以上の何かを『感じて』ていたのだ……安心感ともいえる……愛おしいともいえるような曖昧な感覚を

二人は樹の合図で教室に入り込む、不幸なことに今は藤沢の授業で舌打ちをされながらこちらへ近づいてきた

ほかの生徒たちの目もあり亜夜は樹の後ろに隠れるようにたっていた藤沢が肩をつかんで無理やり樹とつきはなした

「お前ら、連絡もなしに授業を休むとは・・・それになんだ二人で一緒に来て、お前らはできてんのか？」

酷い様で、ある意味正解にちかい藤沢の一言で亜夜は目をあわせられないでいたが樹が反論しようとして一歩前に出た

「遅れたことは謝ります、でも今日はうちの母が用事あって遅れたんですよ、聞いてみたらわかりますよ」

そういうと樹は亜夜に「座るぞ」といって自分の席へと向かっていく、亜夜もその後を追っていくがクラスからの視線がなぜか痛かった

「理由があるにしろ遅刻は遅刻だ、ちょうど今年でも解けそうなセンター試験の問題があつてな、それをといてもらう」

机に荷物を置いた後二人はしぶしぶ前にいき、黒板に書かれた見るからに難しそうな数式などが書かれていて、樹はもう絶望的な表情をしていた

逆に亜夜は若干手惑いながらも、藤沢に出された問題をといて見せた

「・・・時間切れだ、樹にはこのプリント次の授業までにやって来い」

藤沢は問題を出すにあたって制限時間を5分と決めているため、樹はとうとう時間切れになって宿題を出されてしまった

先に机にもどった亜夜は帰ってきた樹にむかって「ちょっとなら手伝ってやんよ」といって励ましてあげたのだった

26話（後書き）

今日は週一回ぐらいで行ってるお店ゲームのに行つてなぜか店員になってしまいましたw

いや〜子供の相手つていいですね、私小さいの好きで好きで（ロリコンとはいわないで）笑）

「デュエルマス ーズの大会やるからでる人はこっちきて〜」
とかいつてたらなんか本当に店員に間違えられてしまい、「すみません、これほしいんですけど・・・」「はい、え〜と、じゃあ1980円で〜す」とかそんな風に・・・
そののりで店長に「ちょ、今日店員になるww!!」「とってのり
でなつてしまった・・・

なので今日はちょっと遅れましたすみません!!
ではご感想等お待ちしております!!

27話

昼休みになり亜夜は朝作ってきた弁当を食べるために屋上の人目につかない場所に来ていた

ほかのところから見えにくくて、友達の少ない亜夜はいつもここにいる

日にあたりながらのんびりと弁当を食べていると、後ろから亜夜に向かつて声をかけてくる生徒が来たのだった

「あつ、篠屋君、大丈夫だった？おととい倒れちゃったけど？」

振り返って確認すると、同じクラスの女子数名が近寄ってきた

「そうよ、それに声も高いし、まだ悪いんじゃないの？」

そういわれた亜夜は自分が少し変化したのにきずいたよりも、自分が心配されていたことに驚き、そして少し嬉しかった

「うん、声は暫く治らないって言われたけど、大丈夫だよ、心配ありがと」

声が高くなった理由を考えている暇もなかったので病院に行ったようにごまかして、できるだけ笑顔で返してあげると、女子のうち一人が亜夜に近寄ってくる

「言っちゃ悪いかもしれないけど篠屋君、別にメイクとかしてない

でしょ？正直に言っちゃうけどかわいいわ」

亜夜の顔をまじまじと見ながら言われると、亜夜は内心ドキッとしてしまった

もしかして自分が女だとばれるんじゃないかと、心配をしていたのだがしかし女子のほうは亜夜を前からかわいいと思っただけで、今亜夜が女になっているとは少しも思ってもいない

そして悪のりしだした女子たちが確かにと同意して次々に亜夜に向かって言葉を飛ばしてきた

「ほんとに、女の子みたいですねえ」

「もしかして本当だったり」

亜夜はそろそろ限界になっていた、本当にばれるのではないかと、そう思った時だった、一人の女子が亜夜の目の前に近寄ってきて言う

「そつだ確認してみよお！」

「っ！、やめろっ！！」

最初に言い出した女性徒がそーと体に手をさし伸ばして、体に触れそうになると亜夜ははそれを手ではじいて、大声を出して叫ぶ

その反応を見た周りにいた数名の女子全員がきよとんとして唾然としている

少しの間が空いて我に返った亜夜は「あ……ごめん……」とい
って女子達に謝ると

「あ……いや、そのごめん！！こっちも人の嫌がることいつち
やって……」

と言い出した一人の女生徒が頭をかきながらいうと、「じゃ、これ
で……ごめんね」と謝りながらほかの女子たちとさっっていた

「はあ~~~~~」

どこかに行ったのを確かめると大きなため息とともに床に倒れて、
青空を見ながらぼーとたそがれ出した

（あーあ、何してんだろ……素直に嫌って言えばよかった……
怪しまれたかな？）

27話(後書き)

感想等お待ちしております！

暫く目を瞑って先ほどの行動の事を後悔していると、ふにっと誰かが頬をつねってきたので目を開けると、樹がパンを持ってかがんでいた

樹もよくここで昼食を食べにくるので大体いつも一緒に食べているのである

「ふう、購買の戦いは激しかったぜ」

亜夜のよこに座ると額に流れる汗を手でぬぐい、持っていた焼きそばパンを開けて食べた

これもいつもの事で、樹は購買に行つてパンやらを買ってきているのである

「また、それ食ってるし・・・お前よく飽きないな・・・」

そんな樹に注意を呼びかけると、樹が反論しようと思ひしゃべろうとするがパンが口に詰まってしまうた

「ばか・・・、これのめ」

といいながら亜夜は飲みかけのお茶を樹に差し出して飲めと促し、樹は急いで受け取り、そのお茶を飲み始めた

「ぶはあ・・・サンキュ！」

三分の一ほど残ったお茶を亜夜にかえすと樹は話し出そうとした話を語りだす

「いいか亜夜、焼きそばパンってのは~~~~~（以下略）」

その後数分かけて焼きそばパンに語りだした樹だった

しかし亜夜はそれを聞こうともしないで、食べかけの弁当を食べていて話の内容を聞いていなかった

そんな感じで昼休みも終わり、教室に戻っていった二人であった

その後別にいつもと変わらずに学校が終わり、亜夜はそそくさと教室から立ち去って樹もその後を急いで追っていったのだった

教室を出てから亜夜はいち早く学校から抜け出したい気持ちであったのだが、朝した秋との約束があったので、ややめんどくさいながらも、足を職員室に向けた

「失礼します・・・あの、神野先生いますか？」

職員室に入って近くにいた男の先生に聞いてみたら、事務室にいるので少し待ってくれといわれ廊下で待つことにした

一分ぐらいたつと秋が亜夜たちのところまではや走りで向かってきて、それに気がついた亜夜はまず何をするのか聞いてみようと思っ

だが秋はそんな暇を与えず「チョット待っててね」といいながら職員室に入ってしまった

「あの〜秋さん、今から何するんですか？」

今は三人で秋の車に向かっている最中である

ちなみに教師用の駐車場なのでめったに生徒が通るようなところではない

「そういえばまだ言っていなかったわね、今から亜夜ちゃんの『下着』を買いに行くのよ」

「?・・・下着って・・・別にありますよ??」

この時亜夜は秋が言った下着の種類までわからなくて、何でそんなものいるのか聞いてみた

「いやいや『男物』じゃなくて、『女物』よ〜」

「え・・・」

秋に言われた瞬間亜夜の背筋に言いようのない寒気が走った

まだ女になって数日しかたっていない亜夜にとって『女物』の下着、すなわちショーツやブラを身に着けるにはまだ少し抵抗がある

「ちゃんと体にあったものをつけないと悪いのよ、今のパンツじゃ

違和感あるでしょ？」

確かに秋の言うとおりである、実際今わさらしを巻いているが家で何もつけていない時は乳首がすれて痛く、下も心なしか違和感を感じてブリーフをはいてるのである

「まあ……そうですね……でも、買いに行ってもしほかの生徒に見られたら嫌だし……」

どうしても行きたくない亜夜はとりあえずその場のぎにでもなるかと思い知り合いに会うのが嫌だといって適当なことを言うが、樹が「それならこの前の服があるぞ」と余計なことを言い出して結局いくは目になってしまった

この前の服とは、和弘と龍と合ったときの服である

28話（後書き）

いつになったら恋愛系になるのでしょうか・・・

実際私でもわかりません（笑）

結局恋愛じゃないよという落ちにはならないと思いますが長くなり
そうな・・・

でもいつまでも見てもらえるような作品にしていきたいと思います

^^

では感想等お待ちしております！

29話

車を走らせること30分弱、街中にあるそこそこ大き目のデパートまでやってきた三人

平日なので今はそんなに人はいないが休みになると人が多くなる場所である

うきうきしてやってきた秋とは別に、亜夜は二度も着るとは思っ
てなかったゴスロリ系の服を着て、恥らいながら樹の後ろに隠れるよ
うに歩いてデパートの中に入ってた

入り口に入っすぐ、エレベータに乗って八階まであがると女向
けの衣類やら下着などが並べられていフロアにでる

きっと女性用のコーナーなのだということはされもが見てもわかっ
たのだがいなくてもいい人もつれてきたのじゃないかといまさらに
思う亜夜であった

「俺は此処に着てよかったのかな？」

自分でも気づいたらしく、樹はちゃんとした男なので場違いなよう
な気がすると思いつきに「俺はどうすりゃいいの？」と尋ねたのだが、
秋は「別にいいんじゃない？最近カップルで来る人もいるし（ニヤ
ニヤ）」と笑いながら亜夜と樹を見てくる

「カップルじゃないですよ！こんなやつと！」

一時カップル設定になったものの設定は設定であるので、とりあえ

ず全力で否定する亜夜だが樹はそんな亜夜の言葉を「ひどっ!」と
いって若干傷ついていた

なんだかんだで樹はひとつしたの男性用の衣類などを置いている場
所に向かつて亜夜は秋につれまわされることになった

「実莉ちゃん、久しぶりね」

秋は早速近くにあるお店に入っていくとなにやら知り合いらしい店
員と話し始めた

おくから秋より若干背の高い女性が出てくると亜夜に向かつて笑顔
で「はじめまして」と挨拶してきて亜夜も一応笑顔で返す

モデル体系というのが正しい実莉のスタイルに亜夜は（羨ましいな・
・・）と思っていた（主に背の高さ

「またかわいい子連れてきましたねえ、秋さん」

『また』ということは以前亜夜と同じようにつれてこられた人物が
いるということである

（とゆーかまで!これはこれで犯罪じゃないのか?・・・学生をこ
んなとこに連れてくるのはセーフなのか?）

実莉の言った台詞で秋の本当の姿を知ったような気がした亜夜はそ

「と二人から遠のいて逃げようと思ったその時

「じゃあ早速スリーサイズはかりますので、奥に来てくださーい」

亜夜の手をがっちりつかんでにっこりと笑い出す実莉

そうして奥に連れて行かれるやいなよ、速攻で服を脱がされてしまい泣きそうになってしまう亜夜、しかも途中胸を触って「ごめん手滑っちゃった」などいいながら大胆にもんだりもしているので亜夜は反应的に実莉の事を秋と同類と決め付けた

29話（後書き）

みやもと
宮本 実莉

身長：体重 172cm：52キロ

好きな：嫌いなもの 服作り等：しいていえば隣の店のデブ野郎、
嘔吐き

特技：趣味 特にない：街中ぶらり旅

備考 容姿端麗で学生時代はモデルをしていたが、そのうちデザイナー
ンに興味ができてきてデザイナーに転職その後才能を開花させて今で
はお店を構えているほどの人物

新キャラ登場！実莉ちゃん！！

今後ちよくちよく出てくるキャラですね

では感想等お待ちしております！

30話

「上から〜」

亜夜はスリーサイズのことなどわからないのだが、秋から「いいスタイルなのよ」といわれて内心チョット嬉しかったがすぐに自分は男だと意識してうれしさを素直に受け入れず自己嫌悪をってしまった

「じゃあ亜夜ちゃんのサイズもわかったことだし、早速似合いそうな探しますか！」

やたらと気合の入った秋は亜夜の手を引きながら店の中をどんどん物色していく

「これなんかいいわねえ」「あ、こっちも・・・」と色々持ってきているうちに実莉も「これとかいいんじゃないですか？」といつて入ってきて次々に試着させられた亜夜だった

ちなみに今はブラの試着で一人でつけられない亜夜は二人に手伝ってもらっているのだが、二人ともわざと胸を触ってくるので迷惑していた

そしてブラのほうがきまり次に下のほうの試着に入ると完全暴走しだした二人が亜夜に色々着させようと、まだ店に出してないもので持ってくる始末になってきたのだった

「さあ亜夜ちゃんこの下着なんてどうかかわくない」

持ってきたのは実莉で、白の清纯そうな一般的？な下着である

ほぼ無理やり着せられた亜夜は顔を真っ赤にして恥ずかしくっている

「……(赤)」

「まあこっちのほうがいいんじゃないの?」

次に持ってきたのは水色と白の縞々の下着でまだ此処までならわかる亜夜はしぶしぶつけて見せたのだが、男の時とはちがいはびりたりとしていて何か違和感を感じていた

「……(恥)」

「亜夜ちゃんにはこっちのほうが」

今度は秋が赤の細い、まあ具体的に言うとTバックという物を持ってきた

さすがにこれはつけられない亜夜は必死で抵抗するが二人にかなうこともなくとも簡単にはかされてしまった

「……(ウルウル)」

羞恥心がいっぱいになってきた亜夜はとうとう限界まで来たのか瞳を潤ませて泣きそうになってしまいがそれでも二人は暴走し続ける

「いや、あえてこんなだいたんに……」

「ああっそれすごくいい！エロかわいい！てかエロッ!」

「にゃーーーー！！！！」(泣)

急に二人から抱きしめられて驚いた亜夜は、突拍子もない声を上げて暫く二人に抱きつかれたのだった・・・

30話(後書き)

秋&mp・実利の最強コンビはマジ強いですw

では感想等お待ちしております！

31話

「はぁー」

やっとのことで地獄とも言える時間が終わり、大きなため息をついて自分の顔を手で覆い隠す亜夜

秋は亜夜の下着を購入してから「ほかに買うものがある！」といてどこかに走り去って言ったので取り残された亜夜は樹と一緒にベンチに座って秋を待っている

そしてもうすでにブラとショーツをつけており、なぜか恥ずかしい気持ちもあつたりする亜夜であつた

「あつはつはつwwけっこーもみくちやにされたんだなww」

そんな亜夜の行動が先ほどの惨劇をあらわしているのがわかつた樹はつい笑いをこぼしてしまう

「うー、あれはひどかつたよ、胸とかお尻とか・・・触られたしさあ（ハア）」

またひとつため息をついた亜夜は、ベンチに来る途中に自販機で買ったジュースを飲み始める

「でもまあ母さんの気持ちもわからなくもないなあ・・・ほら、亜夜ってかわいいじゃん？」

ブツとジュースがむせ返って、咳を数回すると顔を真っ赤にしな

がら樹に「なにいつてんだよ！」大声を出して怒鳴りつけた

その後ふんつとといった感じで亜夜は樹に背を向けて座りふてくされてしまったのだ

樹もしまったとは思ったがそのうち機嫌もよくなるだろうと思いはうっておいた

(かわいい……のか……)

実を言うと亜夜は樹に言われたことがうれしいのだが、まだ自分は男という主張が強いので素直になれないのだった

この時から、亜夜は樹に特別な感情を抱いてきたのだった……

「亜夜ちゃん」

十数分後、両手いっぱい紙袋を持った秋が手を振りながら走ってくる

そして現在時刻は8時、此处に来たのは6時前なのでかれこれ2時間ここにいることになる亜夜たちはもう疲れきっていた

「おそいですよ……俺もう眠くなってきました……」

連日の忙しさで睡魔が襲ってきた亜夜は目をこすりながら秋に訴え、

樹も疲れて眠そうに欠伸をしている

そんな二人を見て秋は帰ることにして重い荷物を樹に持たせて車に向かった

「・・・・・・・・（zzzz）」

ゆっくりと揺れる車内で静かに寝息を立てながら樹の肩に頭を預ける亜夜、また樹も同じく静かに息を立てて眠っている

二人よりそつと一緒に寝ている姿は本物のカップルのようで、バツクミラーでその様子を見た秋はにっこりと微笑み家に着くまで見守っていた

しかしこの時秋はひとつの心配事をしていた・・・

（まさかとは思うけど亜夜ちゃん樹のこと・・・・・・・・）

実は秋は亜夜が樹に対する思いが友情から恋愛感情になっているのではないかと思っていた

亜夜がゴスロリ風の服に着替えて家から出て時は樹に「似合うのかな・・・？」と聞いていたし、先ほど亜夜と樹がベンチに座っていた時樹に対する視線が少しばかり『女の子』だったことを遠巻きに見ていたのだ

(まあ・・・気のせいかもしれないけど)

所詮勘程度のよそうなのであたってはどうかはわからないが秋はこれからの二人のことが心配だった

(でも、もしそうだったら・・・)

そしてふつと脳裏によぎったイメージが秋に不安感を抱かせるが、そんなまさかと思いきその考えをやめてしまおう

いや『やめたかった』といった方がいいかもしれない・・・最悪な未来になるかもしれないから・・・

31話（後書き）

タイトルも変わりました。いよいよ恋愛に発展するのかな？

でも最後に秋の脳裏によぎった『最悪な未来』になっってしまうかも
しれませんねえ！

私はそうならないことを願っていますw

そしてhappy birthday!自分ww!(イエーイwww

だから小説をいっぱい書こうというわけではないですけど・・・

(じゃあ書くなよorz

では感想等お願いします！

そして誤字脱字等ありましたら教えてください、この前間違っていましたので・・・

32話

「ありがとうございます(ウトウト)」

家に到着して起こされた亜夜は寝起きのボーとした頭でぺこりとお辞儀をすると、ふらふらと家に入っていった

樹に荷物を玄関まで持ってきてもらい、手を振ってから扉を閉めた
亜夜は荷物を放置して二階の自室へとあがったいった

「あらら〜あのまま寝そうね〜」

そんな亜夜をみた秋はきつと服も着替えずに寝てしまっただろうと予想の中させて、樹が乗ったのを確認して家に帰るため車を進めていく

「いつちゃん?」

車を進めてすぐに秋が樹に話しかけると樹は「何?」と返事をして話を進めだす

「いつちゃんは亜夜ちゃんのことどう思ってる?」

秋は先ほど亜夜の感情にきがついて樹にもその感情があるか聞いてみたかったのだった

「ん〜どうって・・・親友とか？」

あまり意味のわかっていない樹は少し考えた結果この答えになってしまった

それを聞いた秋は（このこったら気づいてないのかしら？）と思って尋ねるのをあきらめてしまった

「ん・・・」

眠りについたはずなのになぜか目が覚めてしまった亜夜

上半身だけを起き上がらせてあたりを確認するが真っ白な空間しか目に入らない

何処を見ても上下左右前後何処を見ても白、白、白の世界、もう見慣れたといってもいいこの世界で亜夜はただ突っ立って何かを見上げるように上を見ていた

やあ・・・

脳に直接呼びかける声、前回はそのたびに頭痛を伴ったが今回は不思議と痛くなかった亜夜だった

そして瞬きをひとつした瞬間、刹那といってもいいタイミングで自

分そっくりの人間が亜夜の前に立っていた

あまりに突然すぎる登場にややあわてる亜夜だが、さすがに二回目もあり前よりは冷静であった

「・・・お前はだれだ？」

見つめあいながら『自分』に正体を聞いてみる亜夜

僕かい？・・・僕は君だよ

少し迷ったのか続けて言葉を発しなかったが少しの間を空けて答えを言い出すと『自分』はすつと右腕を上げて亜夜を指差す

目の前にいるのは自分と同じ顔、身長、体型、声すべてが自分のもの、おかしすぎる答えとわかってはいるが、実際に目の前に『おかしい』存在がいるので否定ができない

「お前が俺をかえたのか？」

なので次に亜夜は今とても聞きたいことを『自分』に尋ねてみるが『自分』は口を三日月のように歪ませて近寄って返事とは別に、恐怖を感じさせる

怖いと思い逃げようかと思っただが、この前のように瞬きをした瞬間に押し倒されると思い逃げる選択肢をやめた

だが抵抗をしなくてもやられることは同じであり、しかしそれでも亜夜は動くことすらあきらめていた

僕がやったっていつてもいいけど、これは『必然』なんだよ

ゆっくりを亜夜を中心にしてくるくと回りだす『自分』

それと言っておくけど、『変えたんじゃないよ』

「かえたんじゃないってどういうことだよ!」

クスクスと不気味な様子でいいながら笑う『自分』に亜夜は手を伸ばしてつかもうとするが『自分』はジャンプをして数メートル先へと飛んでいく

物理的にありえないことだが今の亜夜の立場からすると『普通』すぎる気もするその行為をただにらみつけていた

それは自分できづかないと・・・

クスクスと笑いながら蒼い炎に包まれていく『自分』に急いでかけよるが伸ばした手は届くことなく炎は消えていった

そのとたん急激な睡魔に襲われた亜夜は地面に倒れこんで、どんどん意識が遠くなっていき眠ってしまった

f r i e n d s h i p o f a y a a n d i t s u k i

漆黒に包まれた空、綺麗なほどに丸く栄える満月

建物の明かりでその暗さは中和されて見事なまでの夜景を作り上げている

その夜景の空に浮く長髪の人物がいる

唇からかすかにはみ出た牙、カラスのような真っ黒な翼は人間に似ているとはいえ『人間』とはいえない存在だった

閉じた瞳をそつと薄く開けて目の前に浮かぶ月を見上げるような形になる

「……もうすぐ……わかるよ……」

小声でそういうと、長髪の男は夜空をこんこんと『叩いて』その空間を割っていく

ひび割れた場所から見えるのは白く何もいないような感覚を思わせる空間だけ

それは徐々に色を映し出して一人の人物の形になっていく、その人物はこの前一緒にいた長身の男で、まるでそこにいるかのような立体感である

「レオ、仕事だ」

どうやら長身の男はレオという名前で見た目とあってさばさばとした性格が出ている

レオが「おう」と返事をした後に、割れた空間が再び戻っていき何事もなかったように夜空と一体になった

今のは連絡をつるための『魔法』か何かの類なのだろう・・・

そう・・・なぜならこの男たちは・・・

『神の使い魔なのだから』

数秒後、長髪の男の横に空間のゆがみが生じるとその中からレオがでてくる

大きな体をまっすぐに伸ばして背伸びをしてジャンプをしたりとはしゃいでいる

「クー！やっぱこっちのほうが空気がいいぜ！」

一体何処と比べているのかわからないが深呼吸を数回すると長髪の男に声をかける

「んで、ラビイスはまたあいつか？」

ラビイス、それがこの長髪の男の名前である、英語でI o v e t h .

・愛という文字が入っているが皮肉にもラビイスの無表情な顔からは一切の愛情を感じられない

レオに返事をする事もなくラビイスは「行くぞ」といつて街中に急降下していき、レオもその後を追ってものすごい速さで街中に落ちていく

『ピーポーピーポー』

どこかのビルに降り立った二人は、近くで鳴り響く救急車に目を向ける

「あれだ・・・」

ラビイスが指を差す場所、それは車とトラックの衝突事故現場

悲惨なことに、車はつぶれて中にいる人物はもう助からないであろうと誰が見てもわからうほどである

二人は事故現場に近づくためにすっとビルから落ちて、事故現場に向かった

まだ人が多い時間帯なのだが、異様なまでの格好の二人を誰も見ようとはせず道を歩いている

この二人は人間に見られない魔法でもかけているようだった

事故現場に着くと三つの白い玉が浮いていて、それをとろうとレオは翼を広げる

「あーあ、かわいそうに、まだ二歳児じゃねえか」

ひとつの玉を見ながらレオが残念そうに言うがラビイスは無表情に残りの玉を捕まえる

実はこの玉、人間の『魂』である

もともと人間は主に『精神』『肉体』『魂』の三つに分かれている、しんでもなお残り続ける魂を集めているには理由があるからである

この二人は神から命令を受けて人間界でなくなった魂を天界に送り届けるという指名を受けているのだ

三つの魂を集めた二人は人間では発音できない言葉で詠唱を始める

短い詠唱が終わると三つの魂はさらさらと消えてなくなってしまう

こちらの世界で言う成仏をさせたのだ、無事に来世を遅れるように

・

「・・・次だ」

振り返って、再び夜空に飛び立つラビイス、レオもその後をおって飛び立ちまたちがう魂のある場所に行くのだった

これがいつものこと、何も考えずただ魂を天界に送るだけ、この作業をやるたびにラビイスは表情こそ変えないがレオはそんな彼の背中がいように悲しいように感じていた

friendship of aya and itsuki (後書き)

arushelk zero loveneth (アルシエル
クゼロ ラヴィネルス)

身長：179cm (140を基準に±50くらい)、体重0〜90
122t (基本的に『重さ』の概念を持っていないでつくっている)
レオからはラヴィスと呼ばれている

天界で罪を犯してしまった天使、その処罰として期限不定の『魂浄
化』をやることになってしまった

そのせいで白かった翼は灰色かかった黒になり、悪魔と似て似えて
いない存在になった

disardit raleonard (デイスアーデット ラ
レオナルド)

身長：体重207cm (ラヴィスとは違いこれで固定) : 0〜90
122t (同じく概念を持っていない)

ラヴィスとは違いこうもりのような黒い翼、純血の『悪魔』である
証拠である

『魂浄化』をやる理由はラヴィスと同じだが、見た目とは違い子供
好きでそのたびに心が痛くなる思いやりのある悪魔である

33話

そつと目を開けて今自分がいる場所を確認する

いつもと変わらぬ白い天井、淡い水色のカーテンから漏れ出す心地よい日差し、毎朝の見慣れた光景が視界に映った

ゆっくりとベットから降りて携帯で今の時間を確かめると6時21分と表示されている

いつもより早い起床時間ではあるが、二度寝するような眠気もないので一階へと降りようと思いいドアを開けながら、ケータイを服のポケットに入れようと思いい手を入れるがその性でいつもと違う服を着ているのに気がつく

ゴスロリ風の服を着ていたことにいまさらながらに気がついて顔を真っ赤にする亜夜

昨日、着替えもせずに寝たせいで、朝から羞恥度マックスの亜夜はそそくさに風呂場に向かって服を脱いで洗濯機にぶち込む

あせつて勢いませに全裸になってしまった亜夜は汗をかいた体を洗い流そうと思いいそのまま風呂に入っていく

「……ふう」

シャワーをゆっくりとあびて、昨日の疲れをあらわしたため息をつく

ザーザーと水の落ちる音がよく室内に響いて亜夜はボーとした頭を

覚醒させていく

目の前の鏡を見ると湯気が立ち込めた浴室内につつまる自分の姿が見えた

「俺はお前……か」

夢で見た『自分』に言われたことを思い出す亜夜

（あいつが俺を女にした……あいつは男の姿……でもあいつは自分は俺って言ってたよな）

シャワーにうたれながら女になった原因を考える亜夜、『自分』が言っていた言葉をもう一度思い出してみても整理しようと思いき朝見た目を瞑って思い出す

『変えたんじゃないよ』と『これは必然』の二言が引っかかって亜夜はどういうことか考え直す

（『変えてなくて』……『必然』……ていうことは俺が女になることは前から決まっていたのか？）

（……もしかして……女だったとか？……いや！……
・違う！絶対にはいはずだ！）

考えれば考えるほど亜夜は真実が見えそつでなんともいえない感覚を覚える

自分が自分で内容に感じてしまっただけで仕方がならない

これ以上考えても何もわかりそうにないと思った亜夜はさっさと浴室からあがって学校に行く準備をしだす

亜夜がさらしと格闘して数分後、やっとのことでまけたさらしの上に一枚シャツを着てまたその上から制服を着て疲れていた時、玄関のチャイムがなって訪問者を知らせる

「樹か？」

早足で玄関まで行き扉を開けた亜夜は目の前の親友を見た瞬間笑顔になっていく

最近は何がわざわざ迎えに行くことが多くて亜夜は嬉しかった

樹がいつもそばにいてくれると少しだけだが女になったことを忘れさせてくれる

だがときどき樹のことを『特別視』してしまうことがあり、そのたびに自分自身が女になったこと自覚してしまう

「よっ！」

樹もまた亜夜をみて笑顔になるといつものように挨拶をする

ちょうど今制服に着替えて準備の出来た亜夜はすぐに学校に樹とむかっていった

そうして残りの二日間、何事もなく無事に夏休みに入った亜夜であった……

33話（後書き）

後書き とうとう夏休みに入っていった亜夜・・・この先はどうなるのでしょうか？

亜夜の樹に対する気持ちは恋なのか？と気になる点もありますが先ほど

『アクセス解析』というのをはじめてみましたが・・・3万アクセス・・・

こんなにたくさんの人たちに見ていられたとは、本当にうれしいかぎりです！

これからも頑張りますのでぜひ、私の小説を見続けてください！お願いしまーす！

ついでに感想等お待ちしておりますwでは！

34話

夏休みに入っただけで秋に呼び出された亜夜は今、隣町の病院に居る、隣町なのは顔見知りにあわないようにと秋の気遣いだ

「つぎのかた」

看護師に呼ばれた亜夜は秋とともに診察室に入っていく

そもそも病院に来た理由は、亜夜が『ちゃんとした女』として成り立っているのかを調べるためである

以前秋が一度確認したのはしたのだが、ちゃんとした医者でもないので断言できないということである

（じゃあ俺この前あんなことされた意味あったのか？）と亜夜も思っている・・・

「最近になって娘の調子が悪いんですよ」

入っただけで亜夜の状況を（嘘だが）医者伝えてどうにか身体検査を受けれるようになった

嘘を言っているのは、普通人間が一夜だけで性別が変わることなどありえないからで、もしこのことが世間に知れ渡ったりすれば亜夜は国にでも保護されて変な研究されてしまうかもしれないからである

その後、結果が返ってくるのに時間がかかるといふことなので、秋につれられて買い物に付き合わされてしまった亜夜であった

「亜夜ちゃんこれにあいそうねえ」

といいながら秋は赤をきちょうにした水着を亜夜にあててくる

現在、ところ変わって亜夜たち二人はつい先日来た実莉の店に来て
いていた

「いや〜こつちでしょ？」

約十数分前からこのような会話がずっと続いている

何を言い合っているかというところ『亜夜に似合う水着』である、当然
今の亜夜は女なので女物である

「でも亜夜ちゃん童顔だから・・・たしか・・・」

若干亜夜を傷つける台詞を言って、実莉はお店の裏に行つて帰つて
くると手には『5・2』と書いてある紺色の児童用の水着すなわち
『スク水』である

さっきまで見せられていたビキニ系統のどれよりも恥ずかしいくて
顔を真っ赤にして『似合うわけじゃないですよ!!』と大声で否定した

だがしかし二人の反応は・・・

「「……いや似合う!!」」

秋と、実莉は目でそれぞれに合図を送ってアイコンタクトするとも
のすごいスピードで亜夜に接近、脱衣、着衣、の三つを施した

あまりに早すぎる業に亜夜は戸惑いながら、半強制的に着せられた
スク水姿で二人を見上げ「服……返し……て……よお（泣）」

恥ずかしさのあまりか目に涙を溜めて目つめられた二人は興奮が高
まりきつてまた亜夜に飛びついたのだった

「「亜夜ちゃ~~~~ん!!」」

「ひにゃ~~~~（泣）」

デジャブといってもよい瞬間を見ていた数名の店員は引きつった笑
顔で三人を見ていた……

34話（後書き）

最近になって小説のモチベがかなりあがってきました

と、いうわけで〜

私がこの小説と同時に書いていた3つの小説のうちひとつを上げま
ーすw

題名は『異世界の死神君』です、主人公が異世界に飛んでってわー
ーとする小説ww

お時間に空きがある方は見てみてください、できれば感想もお願い
します

言っておきますけどかなりの自己満足小説ですwそのところを理
解の上見てください、ではこちらの感想等もお待ちしております〜

35話(前書き)

いえい!

総合評価2000pt突破——!!

これまで読んでくださった皆さんありがとうございます!
これからも頑張りますので、見てください

35話

ところ変わって再び病院、診察結果が出る時間に戻ってきた二人にちょうど看護師から呼ばれたので診察室に入っていた

「はい、診察結果には異常は見られませんでしたけど・・・娘さんはどうかしたんですか？」

診察結果のかかれた何枚かの紙を渡した医師はなぜか息切れ気味の亜夜を心配していたが秋が「さつき服を買いに行つて騒いでたからねえ」と笑い混じりに話して納得した医師も秋と一緒に「おやおや、彼氏にでも会う服かい？」といつてからかつてきて赤面する亜夜であった

実際騒いでいたのは秋であり亜夜はまったく何もしていないのにこの仕打ちはひどいと思った

しかも買い物というなの地獄で結局3着も水着を買ってしまったのだ(うち一着はスク水・・・)

「むっかんっべきな女の子ねっ」

亜夜の診断結果の載った紙を見ながら秋はつぶやく

何処をどうみても正常な診断結果、これは普通にうれしいことなの

だが亜夜にとっては『普通な』女の子ということである

「……そうですか」

半ばあきらめかけていた亜夜はもう落ち込みようがないことまで落ちたのもう慣れたといつてもいい

でも改めてそういわれると気分はもう最悪になってしまふ

「そんなに落ち込まないのよ、急に女になったんだから男に戻るわよ」

秋はのんきに言ったつもりなのだが実際心中一番心配しているのは秋なのである

学校でも亜夜や樹に気づかれないように休み時間ちよくちよく来てなにかと気にかけていたのだ

だからいつも明るく、亜夜が暗くならないようにめいいっぱい元気をだしているのだ

今日の買い物もそうである、亜夜は嫌がりながらも事実、心どころでは支えにもなっているのである

「……そう……ですね……」

でも亜夜はその言葉を素直に受け取らず投げやりな返事を返した

「でも……でも……もう戻れないかもしれないですよ……ね？」

「そつそんなことないわよ！・・・亜夜ちゃ・・・ん」

振り返つて車の座席を見る秋、そこにいたのはただ涙を必死にぬぐう『少女』がいた

下唇を必死にかみ締めて、痛みで紛らわそうとしている、しかし涙は止まることなく瞳からあふれ出るようにでている

右目を手でぬぐい、今度は左目を、それを何回も何回も繰り返していた

亜夜自身もこんなに泣いたのは覚えていないくらいだ

「・・・」

その様子を見ていた秋はただ呆然と亜夜を見ていた

いつもなら何らかの言葉をかけたりする秋もこの時だけは、口を出すこともなく、手を出すことなくただ亜夜をみつめているだけで何もできなかった

「すみ・・・ま・・・せん、」

途切れ途切れの言葉を発して亜夜は一生懸命に涙を止めようとした、だが涙はまだ出ている

秋はやつとのことので我に返り、亜夜に手をさし伸ばしてそつと頭をなでだした

本当は抱きしめてあげたいほど可憐で、綺麗な存在だが、それはま

だほかにいるはずと秋は思っていた

だから秋は母親のように、子供をあやす時のように・・・そつとやさしく亜夜をなでた

「覚悟は・・・できて・・・ます」

亜夜は必死につなげた言葉を秋にいい、なでてもらっている手を無理やり離れた

フルフルと震えた腕で涙の一滴をぬぐい、秋の目を見て話し出す

「もう、男に戻れない・・・そうなん・・・ですよ？秋さん？」

亜夜の瞳にはいつもの力強い目が戻ってきて、いつもの亜夜の瞳になつてゆく

（俺はもう戻れないかもしれない・・・なら戻れないって思ったほうがいい・・・その方がらくだよ・・・）

これ以上希望を持って、戻れなかった場合のショックは想像を絶するものである

だから亜夜は心の中で決心して、男に戻ることをあきらめたのだ

「亜夜・・・ちゃん・・・」

そうして秋はまた呆然と見るしかできなかつた、亜夜と言う名の一人の『少女』を・・・

35話（後書き）

最近パソコンの調子が悪いので明日修理に出します、すみません
なので2、3日投稿ができません、修理が終わったらすぐに投稿し
ます

ちなみに予定では9日の5時にあげる予定です、では感想おねが
いします

誤字脱字をみつけた場合知らせてくれると幸いです。

36話

おきた？

「う・ん？」

ゆっくりと目を開けて、定まらない視線で辺りを見渡す

何も無い真っ白な空間、亜夜は内心で（またか・・・）と思い、ゆっくりとたちあがる

（俺・・・今まで何してたんだろ・・・車の中で・・・車で？）

亜夜は此処まで来る途中のを覚えてはいなかった、それに秋に言ったことすらも曖昧になってきている

君は此処に来たいと思ったんだよ、だからここにいる・・・

気がついたら亜夜の目の前にいる、『自分自身』もう驚くことも疲れていた亜夜は無反応で目をじっと見ている

「来たいと思つてなんか無い！」

いいや、君は思ったんだよ・・・心の中で覚悟を決めても君は男に戻りたがってる、そうでしょ？

確かにそうである、秋に『男戻れないんですよね？』と聞いた時点で亜夜はもうあきらめていたのだが、しかし心の奥底では『男に戻りたい！』と必死に抵抗している亜夜もいるのが事実である

「そんなこと・・・そんなこと・・・」

事実を言われた亜夜は言い返す言葉もなくただ下を向いて、必死に拳を握っているだけである

いいかい？よく聞いて、君は男に戻らなくていいんだよ？

『自分』は鼻と鼻がくっつきそうなくらいに近づいて亜夜にいった

「どう・・・いう・・・ことだ？」

なぜそのようなことを言う『自分』に尋ねるが返事は返されることはなく『自分』はどこかに消えていった

答えは自分で探さないかね

のんきな声で最後に捨てていった言葉が耳にとどいてすぐ、亜夜は意識を沈めていった

37話(前書き)

アクセス数4万突破ー!!

ありがとうございますーす!これからも頑張っ
て書いていくのでぜひ
読み続けてください!

37話

「うん……」

目をこすりながら亜夜は思い体をおきあげながら夢のことを思い出す

『戻らなくてもいい』『答えは自分で探せ』の二言が今言われたみたいに耳に残っている

少女の夢を見だして約3ヶ月間ものあいだ『自分が自分でなくなってしまう』恐怖が日に日に亜夜にのしかかっているのだ

そんな感情にひたっていると家の電話がかかる音がして亜夜は急いで一階に走り降りていく

(父さんからも……)

亜夜がそう思ったのは、家の電話にかけるのはだいたい亜夜の父親ぐらいしかいないので亜夜はそれを期待して受話器をとろうとしたのだが表示されている番号は見慣れた父親のものではなく始めてみる番号で父親ではないとわかった

「もしもし、篠屋ですけど……」

父親ではないとわかり、若干低いテンションで電話の相手に言うと
思いがけない言葉声って来た

「え……今なんて？」

はじめ聞いたときは亜夜は信じられないといった様子であり今言われた言葉をもう一度尋ねた

「・・・篠屋夜一様が昨日お亡くなりになりました・・・」

今度はゆっくりと聞き取りやすい声で電話から声が聞こえてきた

内容は亜夜の父親の死の報告であった、死因は出勤途中の事故、目撃者によると車のわき見運転らしい

「嘘でしょ・・・」

信じられない、そんな表情で亜夜は口からこぼした

あまりにもあっけないとも思った、だがたった一人の家族がもういなくなってしまうのだ

今亜夜を陥れるのにこれ以上最高なものはないだろう

そして夜一が死んで、あつという間に五日間がすぎていった・・・

「亜夜ちゃん、こんな時期に・・・」

秋が後ろから声をかけ亜夜は秋に一礼をすると沈んだ顔で近くの椅子に座る

実は今日、夜一の火葬式で樹、秋それに見たこともない親戚が少し着ているのである

父親がなくなつたのはこの上なく最悪な時期であつた、女になつてまだ2、3週間しかたつていないのに

「亜夜……」

樹はそんな亜夜に声をかけることができずただ落ち込んでいる亜夜を見ることしかできなかつた

（なんていやいいのかな……へたに刺激するのも悪いし……）

樹は『何も話さない』事を選び、密かに亜夜をずっと見つめていたそのとき誰かが亜夜の方に後ろからそつと手を置き、それに反応した亜夜は振り返つた

「亜夜……だつたかね？君は？」

落ち込む亜夜に声をかけた人物、それは小太り気味のおじさんであつた

話を聞くと縁を切つたはずの夜一の父親だということがわかつた

「あいつは……こんな子供を残して……」

片手で顔を覆つてなにやらブツブツと言ひ出し、手を離すと亜夜を見ながら真面目な顔で話し出す

「実を言うと君に話があつてな・・・私たちと暮らさないか？」

「え？」

亜夜はおじさんの言うことに驚きつい声を出してしまふ

「ああ、驚くのも無理はない、初対面だからな・・・でも私は君の事を考えているのだよ」

亜夜の目をじつと見て真剣に語りだすおじさん、本当に亜夜の心配をしているようなのだが、少しの間があくと亜夜はそれを断つてしまった

「・・・すみません、僕は両親の家で暮らします」

小さく頭を下げたおじさんに断りおじさんが「だが・・・」といいだして言葉を続ける前に亜夜は続きを話し出した

「あの家には母さんや父さんの思い出があるんです・・・だから・・・
・気持ちだけ受け取るときです・・・」

真剣なまなざしでおじさんを説得し、亜夜はおじさんの去っていく後姿をみてとどけ再び席に着いた

そして別れ際に「困った時はいつでもきなさい」といい家の住所と携帯の番号を教えてもらったのだった

こうして静かな火葬式は終わっていったのだ・・・

37話（後書き）

今回は父親がお亡くなりになり落ち込んだ亜夜ですね・・・
本当悲しすぎてなんか作者まで泣けてきます
では感想、誤字脱字等あれば下さい！

「……………」

家の自室で布団に包まりくも亜夜はぼうつと黄昏ていた

もう何も考えたくなかった、墮ちるところまで墮ちたかった、このどろどろした精神の中に……

時刻は6時になるころ空はねずみ色の雲に覆われて雨がざあざあと降りそそぐ

寝ようにも寝れない亜夜は約一時間ほどこうつして

そんなとき部屋のテーブルに置いていた携帯からメロディーが流れ出す

何度も聞いたことのある親友からの着信である

「もしもし……………」

「亜夜、大丈夫か？」

落ち込んだテンションで電話に出る亜夜、その亜夜のを聞いて樹は心配そうに尋ねてくる

「……………」

見えるはずもないのに亜夜は小さくうなずき大丈夫だと伝える

でも亜夜の心境はそれほど大丈夫なはずではない、樹はそうわかっていた

「今さ、お前の家の近くにいるんだけど・・・いつていいか？」

だから樹は亜夜にあつてすこしでも安心できるよう会うことを提案した

亜夜は「・・・うん」と元気なく返すが実際は心の中ではこの言葉を喜んでいた

「じゃあ十分くらいで行くから」

そう言って樹は電話を切った

『十分』ほどで行く、という言葉はまっかな嘘であるなぜなら・・・

・・・亜夜の部屋にある窓から見えるのは、心配そうに腕時計を見ている樹の姿があつたからである

亜夜は急いで部屋からでて階段を駆け降りた、そして靴も履かずに玄関からとびだした

樹は玄関の門のところにおいて、でてきた亜夜を見るなり驚いた表情をしている

「いつから居たんだ？」

亜夜は冷めたような目で樹をにらむように見つめた

一瞬樹はそれにひるむが、間を空けて「3、40分くらい前から・・・」
「と言いつ返ししてくる」

樹の返事を聞いて亜夜は手をさしのばし樹の手をつかみ「早く入れ」といつて家に引きずり込んでいく

そのときぼそつと「・・・ありがとう」といつたのは樹には届いてはいなかった、いや亜夜にとっては届かなくてもよかったのであろう

「こんなにぬれて、ばかじゃねえの？」

樹を玄関に置いて、洗面所から何枚かタオルを持ってきて半分を樹にわたして半分は亜夜がぬれた体を拭いていく

「いや・・・その・・・心配だったからさ・・・」

樹は頭を拭きながら照れくさそうに言った

『うれしかった』樹の一挙一動すべてが嬉しかったのだ

だが自分がこんなに落ち込んでいるときもなにかと心配してくれる友人を亜夜は別の意味で『好き』なのだ

「ありがとな・・・樹」

亜夜はそんな樹にたいして今できるだけの笑顔で感謝した

どこか切なくて、どこか優しいような笑顔で

「おい、何泣いてんだよ、亜夜？大丈夫か？」

笑顔をつくりながらも亜夜は目から涙が零れ落ちる

「え？俺ないてるのか？」

亜夜は自分でも気づいていないようで樹の指摘でやっと涙をぬぐった

「あれ？・・・何泣いてんだろ俺」

でも何度目をこすりつけても涙は止まらなかった

『君は男に戻らなくてもいい』 『自分』が言った言葉がふいに亜夜の脳裏によぎった

(俺・・・女として・・・喜んでるのか、嘘だろ?)

「亜夜、急にどうしたんだよ？」

亜夜を心配して樹が声をかけるのだがそれは亜夜の耳にはとどかにいっていた

(でも・・・でも、もしそうだとしても樹は？女の外見に男の精神なんて・・・気持ち悪いだけ・・・だよ・・・)

「亜夜！おい亜夜！」

樹はそんな亜夜の肩をつかんで強く揺さぶりやっと返事が返ってくる

「・・・くは・・・」

小さくて聞き取れない声に樹は必死に聞き取るうとした

「僕は・・・男？女？」

先ほどの笑顔ではなく亜夜は充血しだした目を樹にむけて確かにつぶやいた

尋ねられた樹は迷った、男といっても正解であり、女といっても正解でもあるまたはその逆二つとも不正解であるかもしれない

なので答えを考えるため樹は黙ってしまった、これが引き金になっ
てしまうことも知らず

「答えられないんでしょう？・・・いいよ、僕は中途半端な・・・な
りそこないだよ！」

怒りに狂ったような亜夜は大声を上げて樹を押し倒してしまった

「父さんが死んだ時、僕は泣けなかった！、女になった時はあんな
に泣いたのに！」

涙を流しながら、樹の胸を弱弱しく叩く亜夜

樹はそれを呆然と見つめるしかなかった

「僕は出来損ないの不良品なんだよ・・・中途半端な人間なんだよ
・・・」

亜夜は樹の胸に顔を埋めて声を上げて泣いてしまった、こんなに泣
いたのは何年前だろうと思いつきながら

「亜夜、お前は出来損ないでも、不良品でもない！」

今度は樹が大きな声を上げて亜夜にいった、そして亜夜を強く抱きしめた

「いつ・・・き？」

それに少し驚いた亜夜は樹の名前を口にする

樹から見た見た亜夜のかわいい顔はくしゃくしゃになってしまっている

「いいか、お前はお前が思うようになればいい、男にでも・・・女にでも」

樹のその言葉でやっと亜夜は平常心を少し取り戻した

38話（後書き）

珍しく長くなってしまいましたね、今日暇でしたので・・・
そろそろ本格的な恋愛が始まりそんな予感くな気もしますが
それはその時の私しだいですw w
では感想等お待ちしております

39話

「く・・・ふう」

夜、夕食をすまし風呂にも入った亜夜は布団に包まってある行為をしていた

部屋の中にこだまする亜夜のくぐもったような声、くちゆくちゅといやらしい音を立てている

「あう・・・ん・・・」

女になってからの二度目の自慰、しかも今度は興味本位ではなく自分からやってしまったのだ・・・ある人物のことを思いながら

「いつ・・・きい」

女になってから色々な心の支えになってくれた人物、そしていつの間にか淡い恋心を抱いた人物

そして亜夜の指はよりいっそう激しさを増していきくわえる指も一本から二本に増えている

前は一本でもきつく入れるのが精一杯だったのだが今は二本くわえ込んでもまだ割れ目は物ほしそうにしている

「にゅふう・・・はあ・・・」

そしてとうとうその行為もクライマックスになっていき亜夜はこれ

からくる快感に身をゆだねる

「い……う……ふあああ！」

大きな声を上げ亜夜は人生二度目の『絶頂』をむかえてしまったのだった

そして快感の余韻に浸りながら意識を手放してしまった

「ラヴィス？顔が赤いぞ？」

まだ人通りの多い街中の中で異様な格好をした二人組み、ラヴィスとレオである

ふたりは今魂を天界に送り届けている最中である

「たぶん……亜夜が自慰をしている」

ラヴィスはそういうと作業を続けようと空間を歪まして魂を入れていく

「ふん……ん？」

レオはその返事に引っかけたのだ

(じゃあなんでラヴィスがあかくなってるんだ??)

確かに自慰をして顔が紅潮するのはわかるのだがその行為を行っていないラヴィスがなぜ赤くなっていると思う

(まっいっか)

特に気にも留めず何も聞かなかったレオであった・・・

39話(後書き)

短いですけどエロが入ってきましたね
では感想等お待ちしております！

40話

「ん・・・」

目が覚めた亜夜は部屋に漂う甘ったるいにおいを感じた

そして亜夜は昨日した行いを悔いていた、心もだんだんと女性化していつているのだと実感したような気がした

「なにやってんだよ俺」

しかし亜夜はさほど落ち込む様子も見せずいつもどおり朝食の準備をしていくなかあることを思い出すのであった

「今日からバイト・・・」

そう今日の9時から「sweet house」のバイトなのである

今の時刻は8時ジャスト急いで朝食を作ってはしって行けば間に合うであろう

ということとで亜夜はいそいで朝食を食べて、私服に着替えると（秋から渡された私服、しかもなぜか全部スカート・・・）家から飛び出して走っていった

途中亜夜を振り返ってみる人物が多々いたのだが、亜夜はパンツが見えているとも気がつかずに走っていったのだった

「すみません・・・ハアハア・・・遅れましたか？」

「いや〜ぎりぎりやでえ〜、亜夜ちゃん朝弱いのかいなあ〜？」

裏口から入るとそこには携帯の時計を見ていた和弘がいた、どうやら亜夜が来るのを待っていたらしい

「んじゃ、制服わたすから、着替えてきてやあ〜」

いつもどおりの関西弁おっとり口調の和弘は亜夜に袋に入った制服を渡す

指示の通りに亜夜はロッカールームにいった自分の荷物をおいて制服を着だす

「これでいいのかな？」

制服を着終わった亜夜は再び和弘の元へと行くためにロッカールームからでた

和弘が先ほどいた場所に戻ろうとしたときに、顔を知っている一人の男性を見た亜夜はその人物に近寄っていく

「龍さん、おはようございます」

丁寧にお辞儀をして挨拶をする亜夜、龍も「おはよ」と無愛想に返事してきた

「そういえば今日からだつたな、まあよろしく」

龍はそういって手を前に出して握手を求めてきたので亜夜も手を出して握手する

笑顔で握手した後亜夜は「じゃあまた」といって和弘の元へと戻っていった

「カズさん、着替えました」

和弘を見つけた亜夜は声をかけながら近寄っていく

「おお、にあつとるでえ、かわいいなあ」

(うう、微妙にうれしい・・・)

和弘の一言で顔を赤くしてしまう亜夜、そしてそれに気づいた和弘は予想通りほっぺたをつついてきた

「あつはっは、ほんまかわええなあ、樹から奪いたいくらいや」

「ななな何言ってますか!」

亜夜は和弘の追撃でさらに顔を真っ赤にさせ、動揺で言葉がかみかみになってしまう

そうならした和弘は声を上げながら笑っている

「んじゃあもうすぐ開店やから、後はあそこにいる人に聞いてなあ」

手を振りながらさっ歩いていく和弘を見送って亜夜は言われたとおりに、ホールに立っている女性の元に向かう

近づいてわかったのだがこの女性、モデルなみに背が高い

(また背が高い人・・・)

またしても若干落ち込む亜夜、確かにここの従業員は背が高いのが多いのだ

「はじめまして、今日から入りました篠屋亜夜です」

「ん？ああ、店長が言ってた子ね私は渡辺真央わたなへまお、よろしく」

第一印象では気さくで優しいそうな人と誰もが思うであろう『第一印象』では

「じゃあ時間もないしあなたの仕事言っね、基本は接客だけよ、前働いてたことがあるならだいたいわかるわよね？」

「はい、わかりました」

丁寧にお辞儀をした亜夜は女性に「うん、飲み込みが早いのは好きだぞ！」と喋ってなでられたので顔を赤くしたのであった

そして開店後、多くの客が押し寄せたが無事に仕事を終えたのだった

40話（後書き）

渡辺 わたなべ 真央 まお 24歳の大学院生

身長：体重 169cm：49kg

好きな：嫌いなもの 面白い、かわいいもの：うざい男

趣味、特技 ぶらぶら街を散歩すること

備考 第一印象いい人、第二印象怖い人の異名を持つW

まだ亜夜は知らないが、秋なみの（フッフフ・・・な人である

41話

「はあ、つつかれたあ〜」

シフトの時間は終わって私服に着替えた亜夜は裏口で背伸びをして気分をはらす

「亜夜ちゃん〜おつかれ、いい仕事ぶりやったでえ〜」

そんな亜夜に和弘が声をかけてきて「あげるわあ」といつてきて缶のジュースをわたしてきた

ちようどのどの渴いていた亜夜ジュースのふたを開けて勢いよく飲みだした

暫く飲んで「ぷはあ」といいながら口を離すと、相変わらずのニコニコ笑顔の和弘が亜夜を見て声をかけてきた

「いい飲みっぷりやあ〜、じゃあ次は二日後だから〜」

和弘は亜夜に手を振りながら店に戻っていく、亜夜もそんな和弘を笑顔で「またです」といいながら小さく手を振っていた

「用事もないしなあ〜……樹どこいるんだろ……」

ふと気になってしまい、亜夜は樹に電話をかけようと携帯を取り出したが樹の番号を押したもののかけることができなかった

（なんて言えばいいのかな、自分でこういうことしたことないから

な)

亜夜は友達が少ないのと、基本家にいるのが好きなのでめったに外に遊びに行くことなどない

ましては自分から『遊ぼう』などといったこともないので何といて誘おうか迷っていた

「……帰ろ……」

結局番号を出したただけで最後の一押しはできず亜夜は携帯を閉じてしまった

そのとき閉じたばかりの携帯から音楽が鳴り出してあわててでる亜夜

「は、はい!」

「ハハ、あわてすぎだろ」

慌てすぎたのか少し大きめの声で言ってしまうてそのことを指摘された亜夜はつい赤面してしまう

そして携帯から聞こえる聞きなれた声の持ち主はついさっき連絡を取るのをあきらめた人物であった

「初仕事もう終わったんだろ？」

「……うん」

樹からの連絡で内心かなりあわてている亜夜は短く返事をする

「じゃあおつかれさま……まあコンだけしか用事ないんだけどな、ハハハ」

樹は亜夜に電話をした理由はただ『お疲れ』ということではなく本当は亜夜の事が心配で声が聞きたかっただけなのだ

この時、すでに樹も先日のお出来事で亜夜に『特別な感情』を抱いていたのだ

だが本人は気づいておらずただ心配という形でおさめているのである

「……………」

そして二人は次の言葉に息詰まってしまう話もしないで数秒の沈黙の後亜夜が話をかけた

「樹……今から……えと……」

亜夜は樹に「会おう」「や」「遊ぼう」の一言も言えず口ごもってしまい顔を赤くして戸惑っていた

「どうしたんだ？何か用事か？」

一向に話を進めない亜夜にむかって樹は言う

それでやっと決心したのか亜夜は一呼吸おいてから電話に向かって「会わない？」といった

「なんだそんなことか、いいけどお前から誘うとか珍しいな」

樹にとっては『そんなこと』なのだが亜夜はこれでも結構勇気を出したほうだと一人内心で思っていた

そうして暫く話をして駅でおちあう事になった亜夜はもうすぐ来る電車に急いで乗って向かうのであった

41話(後書き)

では感想等お待ちしております！

42話

「いつき〜」

電車から降りて、ホームにでるとすぐそばに樹の姿があったので亜夜は声を出しながら駆け寄っていった

樹はその声に反応して振り返ったのだが、声の主を見つけることができず辺りをきよろきよろしだす

「こつちだよ、どこみてんの？」

そんな樹の手をつかんで自分のほうを向かせた亜夜なのだが樹は亜夜を凝視したまま声を出さないでいた

数秒の後、やっとのことで声をだした樹の第一声は「亜夜だよな？」であった

「当たり前だよ！」

少し前、亜夜が女装をした時とほとんど同じ反応の樹に怒鳴って、亜夜は機嫌を損ねてしまった

「ごめんごめん、かわいかったから」

いや〜といった感じで亜夜に一応謝りながらも頭にてを置いてなでる樹、亜夜もそれで目を細めて気持ちよさそうにするのだがすぐに我に返って「別にかわいくなんか・・・」といって顔をまっかにしてしまったのだ

「じゃあどっかいくか？でもなんかデートみたいだな、ハハハ」

「デートじゃないし！」

という感じで数時間さまざまな場所に行って遊びまわった二人であった

この時亜夜は心から楽しい、そう思っていた

そんな楽しく遊んでいる二人に一人の黒い影が迫っていたのにも気づかずに

「くそ、教師にも夏休みぐらいほしいな」

暑い日差しの中生徒指導のためグチを洩らしながら街中を回っている一人の教師

夏真っ只中なのにもかかわらず、サラリーマンみたいにスーツを着ている教師の名前は『藤沢充康』であった

そんな充康の目に、ある人物二人が目にと留まり、顔を見ようと目を細めてみる

「樹のやつ、こんな熱いのにイチヤつきやがって……ん？……あの女どこかで……!!」

樹の横にいる人物を見たたん充康は固まってしまい暫く動けなくなる

「篠屋・・・か？」

充康は衝撃の事実に関口を開けてただただ呆然と見ていることしかできなかつた

「そろそろ帰るか？」

時計の時間を確認した樹は亜夜に尋ねてみる、亜夜を携帯で確認すると「うん、そうしょ」と笑顔で返事してきた

遊ぶ内容はいつもと変わらずに街をただうろつろするだけだが、亜夜にとってはこれが一番楽しい時間であった

「じゃあ家まで送るよ」

亜夜たち二人は、そのまま他愛もない会話をしながら亜夜の家路に沿って歩いてつた

二人の笑顔は何処までも純粹で、だが少しの不安が見えるような・・・
・そんな笑顔であった

lose lose

とある部屋の一角、机に向かって勉強をしている人物は樹であった

夏休みに入ってこれはほぼ毎日やっている日課のようなものである

「うし、今日はこんだけでいいかな」

椅子の上で背を伸ばしてリラックスし、同時に腹がへったとおなかから「ぐう」と自己主張してくる

時計に目をやると時刻は1時過ぎ、お昼でも食べようと思いリビングに降りていく

「なんかね〜かなあ〜」

キッチンをあさり、何か食べ物はないかと探す樹

ちょうどよく期限が明日までのカップラーメンがあったのでそれでも作ろうとしてお湯を沸かし始める

そして数分後、出来上がったカップラーメンをテレビを見ながら食べてしまった

「ん〜、今日なんかあつたけなあ〜」

再び時計に目をやり時刻を確かめると時計は1時30分をさしていた

「そついえば今日亜夜初仕事じゃね?」

そう今日から亜夜は「sweet house」の初出勤なのである
樹はポケットから携帯を取り出して亜夜に電話でもかけようと思っ
たのだが

「・・・おつかれだけじゃなあ」

ためらったのだ

いつもなら何気なくいえるその一言が今の亜夜に対して樹はいえな
かった

(気がついたらいつも亜夜の事考えてるし・・・)

樹も亜夜同様、亜夜に気持ちを寄せていたのだ

しかし会うたびに男口調で話すのでいつも『男』と認識してしいそ
の気持ちも曖昧なものになってきている

「まあ、落ち込んでたらあれだし、かけてみつか」

慣れた手つきで亜夜に電話をかけると携帯からはあわてた様子で『
は、はい!』と亜夜がでてきた

珍しく亜夜があわてている様子を聞いた樹は微笑し、突っ込みを入
れる

「ハハ、なにあわててんだよ」

突っ込みを入れた後、「初仕事おわったか？」ときいて「うん」と返事が帰ってきた

「じゃあおつかれさま……まあコンだけしか用事ないんだけどな、ハハハ」

（実を言うとここから展開しようがない……そして向こうも電話切らないからきりずらい……）

「『……………』」

話しかけてこないのを見ると亜夜もきりづらいなのだと窺える

樹は何かはなしをしようと思いついて何かないかと考えるが先に亜夜のほうから声をかけてきた

「樹……今から……えと」

また何かあったのかと心配になる樹はぶっきらぼうに亜夜に尋ねた

「どうしたんだ？何か用事か？」

携帯から少しの間が空いて亜夜から「会わない？」と返事が来た

「なんだそんなことか、いいけどお前から誘うとか珍しいな」

そうして暫く話をして、亜夜と駅で落ち合うことになった樹はある心配事をしながら私服に着替えて家を早足に出て行った

（亜夜から……珍しいな、本当に何かあったのか？）

だがその心配もよそに、亜夜が思いのほか元気にしてほっとする樹であった

「亜夜……」

夜ベツトに寝ながら樹はある考え事をしていた

（本当に女みたいだった……いや女なんだけどな……可愛かったな）

（初めて会った時と同じだな、好きになっちまったよ……ハハハ、男を好きになるとか……）

「……だめだよ……」

（でも、もし……亜夜も俺が好きなら？……いやそんな理想叶うはずもねえな……）

「なに考えてんだろ俺……男を好きになるなんて……」

樹はそう言いながら部屋の電気を消し、目を瞑り眠りについていった

これ以上現実を考えるが嫌になったのだ……

lose lose (後書き)

今回は樹視点ですね

そして気がついたらアクセス5万突破

こんな駄文を読んでくださった皆様に感謝です！

これからも頑張るので、ぜひ読んでください

では、感想等お待ちしております

43話

ほとんどを樹とすごした夏休みが終わる直前のある日のこと亜夜はこの間なくなつた父、夜一の部屋にいた

理由は簡単、荷物であふれかえつた部屋を綺麗にしようと思ひ掃除をしに入つたのだ

月に一度、ほこりがたまつた部屋を掃除するのだが今日は違つた

もう『帰つて来ない』人の部屋をいつまでも思い出として残す事を亜夜自身がいけないと思つたのだ

「ここで、終わりかな・・・」

本や置物などといったものを片っ端からダンボールにつめていく亜夜

朝からやり続けている作業なので、あとはもう机の中だけである

仕事関係の書類が数えられないほどあり、父の多忙さが読み取れた

そして掃除が終わりそうになつた時だつた、亜夜はある一冊の本を見つけた

「母子手帳？」

ほこりをかぶつて見えにくくなつてはいるが、本の表紙には確かにその書かれていた

裏面を見て名前を見た亜夜は少し驚いた

『篠屋 かな』と自分があったことのない人物の名前が書いてあった

自分の親の名前があるのは当たり前のことなのだがそれより亜夜は自分を生んでくれたが、それと引き換えになくなった母親の私物がここにあったのをうれしく感じた

中身が気になった亜夜はぱらぱらと本を開く

『10月27日

赤ん坊がおなかの中で暴れてる

元気がよくてうれしいわ』

『10月28日

今日は雨が朝から降っている・・・気分が滅入る

でも相変わらず夜一さんは来てくれた

赤ちゃんも喜んでる』

亜夜は笑っていた、自然に笑みがこぼれたのだ見たこともない自分の母親を想像して

そして次のページは見ずに、亜夜はぱらぱらと自分の誕生日の日付を探していく

亜夜の誕生日は11月15日で、目的の日付に近づいてきたので亜夜はその数ページ前で手を止めた

『11月12日

本当に元気がいいわこの子は

でもおとなしいより元気なほうがいいよね』

『11月13日

そろそろ生まれてくると医者に言われたわ

自分でもそう思っていたとこなんだけど今日はなんだか赤ちゃん元気がないな〜？

今まで暴れてたのが嘘みたい』

『11月14日

うーん、なんかおなかが痛いというか・・・

陣痛かな〜？昨日とは打って変わって元気そうだから今日生まれそうなのかな』

そこから先の数ページは白紙で終わっていた

きつと母さんは生んですぐになくなったから何も書けなかったんだろっ、そう思った亜夜は本を閉じようとした

その時だ、残り数ページの最後らへんに何か書かれていたことに気づきいそいでそのページを開き何が書かれているか亜夜は確認する

『11月15日』

今日は亜夜の一才の誕生日

久しぶりにこの本を見つけたから書いてみちゃった』

亜夜は手から本を落としてしまった

今本には『何が』書かれていただろう

亜夜は床に落ちた本を手に取りもう一度同じページを見だした

(『今日は亜夜の一才の誕生日』?おかしいでしょ?母さんは俺がなくなつてすぐに・・・すぐに亡くなつたんじゃない?)

昔亜夜は夜一に母親は亜夜を生んですぐ寝込んでしまい『数日になくなつた』と言われていた

だがこの本には何とかいてあつたであろう

『一才の誕生日』・・・すなわち一年後のことである

なぜ母親が一年間も生きている?たとえ生きていたとしてもなぜ父親は子供に嘘を教えたのかと疑問に思う

『なぜ?』亜夜の心に一人の人物が映つた、このことに関する

であろう、いや必ずかかわっている人物を

「『自分』……」

そう『自分』がかかわっている、亜夜はそう決め付けた

いつも何か起きれば『自分』がでてきて、亜夜を翻弄する

だがどうすれば『自分』に会えるか、亜夜は考え出した

(……『君が来たいと思ったから来たんだ』……そうだ、あいつに会いたいと思えば会えるかも)

前にあつた時、『自分』がさらつといった一言を思い出し、亜夜はあまり会いたくない『自分』に会おうを決心をした

44話

亜夜が気がついたらすでに真っ白な空間に亜夜と『自分』が目の前に対面していた

相変わらずの不気味な笑顔でこちらを見てくる

またかい？

「ああ」

クスクスと足を組んで座って、笑いながら亜夜を見つめてくる同じ顔の『少年』

そんな『自分』に返事をして亜夜はずしずしと近寄っていく

どうして父さんは嘘を教えたの？

「・・・そうだ」

亜夜が尋ねようと口を開けた瞬間、『自分』がそれよりも先に言うてしまう

『自分』はすべて見通している、なぜなら『自分』は亜夜自身でもあるのだから・・・

歪んだ口元で笑う『自分』はそつと亜夜の目の前に立ち口を耳元にやる

確かにアレは嘘でもある、でも事実でもあるよ

「・・・またか、曖昧なことばかり・・・これ以上俺を巻き込むな!」

いままで我慢していた感情に飲み込まれ、亜夜は『自分』に飛び掛った、そして拳を上げて『自分』の顔面に向かって殴りつけた

いつもならいつの間にか『自分』は消えているであろう、しかしこのときはなぜか『自分』はそうしなかった

そして亜夜は何度も何度も、自分の手から血が出るほど『自分』をか細い腕で殴り続けた

憎いかい・・・僕が？

もう顔は亜夜そっくりとはいえないが、それでも『自分』は平然としている

珍しく笑っていない『自分』をみて亜夜は若干の恐怖を抱き、小刻みに震える振り上げた手を胸に押し留める

君はまだちゃんとした答えを見つけれない・・・

今度は『自分』が起き上がって優しくゆっくりと亜夜を押し倒す

いつの間にか顔にできていた痣や傷口は何事もなかったようになくなっていった

今度くる時は答えを見つけてきてね・・・『・・・さ・・・』

・
・
・

最後の言葉は耳にちゃんと届く事はなく、亜夜は意識を沈めていった
寂しそうな目をした『自分』に見つめられながら・・・

45話

悪寒を感じると共に亜夜は勢いよく上半身を起こして目を覚ました、おきたばかりというのに頭の中はいつものように朦朧とはしていない

「なんか、かわいそうな目だった・・・」

先ほどまで見ていた『自分』、その別れ際の表情は紛うことなく、悲しみや寂しさの感情が入っていた

同情はしたくなが、あの目を見てしまった亜夜はなんともいえない感じになる

(収穫は・・・また曖昧な言葉だけ・・・)

『嘘だよ、でも事実でもあるよ』この言葉は日常では絶対に使えない言葉である

なぜなら嘘と本当、その二つが事実なら二つの事実が存在しているということ

すなわち『亜夜が生まれて一年間生きていたかな』と『亜夜を生んですぐになくなったかな』ふたつが存在しているということである

「ありえない」

亜夜はそう吐き捨てると、ベットから起き上がり部屋から出てった

その時の亜夜は若干の怒りの表情と同情の感情が混ざったような顔をしていた

自室から出た亜夜はリビングのソファに寝転がりながら昨日見つけた日記を見ながら

『11月15日

今日は亜夜の一才の誕生日

久しぶりにこの本を見つけたから書いてみちゃった』

なんども読み直した、しかし何度読んでも同じ事しか書いてなかった

「はあ」

ため息をついて、体を反転させて天井を見る

いつもとなんら変わらない汚れひとつもない真っ白な天井だ

そしてこれからどうしようと思えば亜夜は何かする事を考える

（宿題も終わったし・・・バイトも無いしな・・・）

実際やることが何一つ無い亜夜、でもどうしてもとある人物が思い上がる

(樹 . . .)

「今暇かな？」

亜夜はそういつてポケットから携帯を取り出すと樹に電話をかけた
暫くして樹がでて「おう、今日ははえーなあ」と眠たそ
うな口調で言ったので今起きたことが見え見えである

そうして暫く話した結果、10時に亜夜の家で勉強をすることにな
った

携帯を閉じて再びポケットに入れると亜夜は朝の表情と裏腹にうれ
しそうに口を緩ませ笑顔になっていった

そのまま自室にいつて亜夜は服を着替えようとクローゼットを開け
てショートパンツを取り出す

スカートを履くのがいまだになれない亜夜はつい最近、樹と買い物
した時に買ったレディースのショートパンツを気に入っている

最近になって、女の服を着ることに少し慣れてきた亜夜はよく樹と
外出をするようになった

別に外出するだけなら男の時の私服をさらしを巻いて着ればいいだ
けの事なのだが亜夜は女の服をきている

普段近くのスーパーなどで生活用品や料理の食材を買ったりする時
はさらしをして男物を着ているが

だが亜夜自身は気づいてい無いが樹と会うときは無意識に女の服を着ているのだ

「あと二時間・・・何しよう」

今現在の時刻は8時15分弱10時までかなりの時間があるのまた暇になったのだ

なので亜夜はリビングに向かってテレビをつけたが、生憎つまらないニュースしか放送されていなかった

しょうがなくニュースでもみて暇をつぶそうと思いソファに腰掛けて暫くボーと見て暇をつぶしたのだった

character (前書き)

いや〜・・・風引きました・・・

熱も微妙にあってだるい

なので今日はコンだけですすみません・・・

character

篠屋 亜夜しのや あや

主人公、もともとちっちゃくて女顔で女に間違われることもしばしばあり
女になっても何にも違和感が無い、というか元々『女』といわれそうな……

光鷹高校一年生樹と同じクラスで席はその後ろ、11月15日誕生日、B型

神野 樹かんの いつき

亜夜の恋人？的な存在、思いついたらすぐ行動的な一直線な男
その性格からか嘘はほとんどつかなく、友達も多い

誕生日、未設定（後から重要になるかもよく考えます……たぶん）

AB型

神野 秋かんの あき

樹の母親、樹が小学生の時に夫が娘を連れてどこかに行方不明になつてしまった

それでもそんな風なそぶりはせずに、明るい性格

時々暴走するが生徒からよく慕われている光鷹高校の教師

藤沢 充康ふじさわ みつやす

上に同じく数学担当の教師

小説では怪しい雰囲気をかもし出したが本編ではまさかの演出があるかもですね〜

後は特にこいつに関してはとくにないですw

村谷 むらたに
和弘 かずひろ

樹の中学の友達、狐みたいに細い目でいつも笑っている関西弁男生まれつきの金髪気味の茶髪が目立ちよく不良に間違われる、その性で喧嘩もしばしば

友達思いのいいやつで、たぶん和弘以上に友達がいるやつはいないだろう・・・

私的にこの人が一番気に入ってますよぉ〜

東雲 しのめ
龍 りゅう

同じく中学時代の友達、和弘とは違いちゃらちゃらしていないく、どちらかという風紀委員みたいな人

和弘とは保育園からの付き合いで自分では腐れ縁だとか言っている一見真面目そうに見えるが妹相手にはもうデレデレなお兄ちゃん、まあ簡単に言うとしスコンですね

うわさでは今でも一緒にお風呂『なにかいとんのじゃぁー！！』by龍『？ぐはぁ！！』（作者負傷のため記載中止）

宮本 みやもと
実莉 みのり

秋の高校のときの二つしたの後輩

今はファッションデザイナーしてる人、なんか自分がモデル体型&容姿なので自分で作った服でよく雑誌に載ってたりもする
今ではお店を何個も持っていたりするすごい人

character (後書き)

すみません、だるいのでコンだけです

ねっおさまったら頑張ります

あとこれから勉強大変なので不定期更新になるかもです・・・
でもがんばってかきますのでぜひぜひ読んでください！

46話(前書き)

復活しました、そしてこの駄文・・・

ゆるしてください！旦那さまあ！

上は気にしないでください、病み上がりでテンションがおかしいんですよ

ではごっご〜ごらんくださねえ〜

46話

『ピンポーン』

時刻は現在9時40分、少し早めに樹が来たのかと思って早足で玄関に向かった亜夜

自然に笑顔になって玄関の扉を開けるとそこには同じく笑顔の樹が立っていた

「よっ、」

亜夜の頭がちょうど好い位置にある事をいい事に樹は若干撫で気味に頭を触って家の中に入る

この行動は今が初めてではなく少し前からやっている事だがいつも顔を赤くして亜夜はやめるといつているが樹はほぼ会う度にやるので言っても意味が無いのである

なかばあきらめた亜夜だが内心ではまだかなりドキドキしているのである

「む・・・おはよ」

最近慣れてきたのだがやはりまだドキドキして頬が少し赤くなっている

そして挨拶が済むなり樹をあげてリビングまで行く二人

勉強をするとは言っても実際亜夜は樹にわからない部分を教えてあ

げるだけなので勉強するのは樹だけである

でも亜夜はそれでも樹で会えるだけで良かったのだ

「んじゃ勉強やるから覚悟しとけよ」

「なんかその言い方嫌だな」

こうして二人つきりで勉強をして、朝食をとっていない亜夜のおながなるまで勉強が続くのだった

「樹く、何かリクエストある？」

キッチンから顔だけだした亜夜はリビングにいる樹に向かって聞いてみた

シャーペンを顎につけて暫く考えた樹は「なんでもいいや」といって亜夜に返した

「何でもいいって、それが一番困るんだよ・・・」

亜夜はそうは言いながらも冷蔵庫にある食材を確認してとりあえずその中で作れそうな料理を考えた

思い当たる食材を冷蔵庫から取り出して、棚から包丁を取り出し一定のリズムで刻みだした

「ん、いいにおい・・・」

いまだ勉強に勤しんでいる樹はいい香りにつられてついキッチンのほうを見してみる

気になった樹はノートをキリのいいところまで書き、立ち上がってキッチンを覗きにいった

「おお、うまそう」

樹の目にはおいしそうな料理が盛り付けられたのがうつりおいしそうと思ひ、口に出していた

「あ、樹ちょうどよかったこれ出来たからもってって」

エプロンをつけた亜夜は樹のほうにその中の一品を渡すと、自分も残りのお皿を持っていきりビングにむかった

ひよこひよここと樹の後ろをついて来る亜夜を小動物みたいでかわいいと樹は思っていた

「いただきます」

亜夜は樹に箸を渡すと、手を合わせながら声をだした

ニコニコと笑顔で自分が作った料理を食べだす亜夜

樹をそれに続いて箸を料理にのばして口に入れる

「うめえなこれ、いい嫁になるぞ」

樹は冗談で言ったつもりだが亜夜は顔を赤くして「ふぎけるなっ！
と行ってきた

（嫁って……誰の？……）

「おい、亜夜？」

（いつきの……？）

変な妄想が入ってきた亜夜は顔をさらに赤くしながらその先を考え出す

（幸せな家庭に……いつてきますの……チュウ?!）

ボンッ、といってもいいほど亜夜の顔は真っ赤になって、そしてぶっ倒れた

樹はあわてて駆け寄り「大丈夫か？」と声をかけたがなぜか幸せそうな顔になっていたので大丈夫と思いソファに寝かした

その後、亜夜が再起動するまで暫くかかったのだった

「んじゃな、勉強はかどったし、ありがと」

樹は亜夜に軽く礼をいいながら玄関の扉を開ける

亜夜は急いで靴を履いてその後をついていき外まで出て、樹に向かつて小さく手を振る

「またな」

樹もそれに気づき笑顔で手を振り返してくれ、亜夜もつられて笑顔になる

これが亜夜と樹が『最後』にすごした夏休みだった

46話(後書き)

これから不定期更新になります、予定では週3、4ぐらいです二日
おきぐらいに

読み続けられるように頑張りますので、これからもよろしくお願
い
しますm ─ ─ (m

47話

樹のおかげか、学校についてからは何事も無く夏休み前と変わらない時間が過ぎていった

そして昼休み、昼食をとろうと樹と一緒に亜夜は屋上に歩いて向かっている

「そういえばさ、3組に転校生来てんだってよ、見に行ってみね？」

「別にいいけど、それと転校生じゃなくて転入生な」

亜夜は弁当を片手に数秒考えて、自分も少し興味あるので見に行ってみることにした

屋上に行く道筋から離れて、自分たちの教室のすぐ近くの3組まで来た

周りの生徒が話をしてる声が耳に入ってくる

『あの子、かわいくね？』

『だよなあ、俺彼氏候補になりて』

『お前じゃ無理だよ、ばか』

どうやら話からはかなりの美少女が来たらしく、それに今までほんのちよっとしか興味も無かった亜夜もどんなものか見てみたくなった

「お、見たことないし、あれじゃね？」

身長の高い樹が一足早くクラスの中にいる転入生を見つけ出し、亜夜はその指差した方向を見る

数人のクラスメートと仲良く話している女生徒は今日学校にきたとは思えないほどなじんでいた

そしてさっきの男子生徒がいていたとおりに美少女ではあるのだが……

「樹、見たから、もう行こ？ね？」

亜夜はまるで逃げるように樹の腕をつかんで半ば強引に引っ張っていった

「おい亜夜、どした？」

樹は何がなんだかわからない様子で引かれるがままに亜夜についていき、最初の目的地の屋上まで向かっていった

その亜夜の様子をクラスの中である生徒が見ていた

「あや……にゃん？」

そういったのはさっきの男子生徒曰く『美少女』で、先ほどまで3組のドアの場所にいた二人組みを、美少女は瞳の端っこで見つけたのだ

少女も今話していた出来たばかりの友人に「ちょっとトイレ行って

くるね」といい二人の後を追うように教室から出て行った

「亜夜、どうかしたのか？」

屋上で、樹は購買で買ったパンを食べながら、少女を見てからの反応がおかしかった亜夜に尋ねてみる

弁当を食べている途中の亜夜はその質問で一瞬固まってしまう

「……………知り合い……………」

再び弁当に手を付け出すがその手が不自然に震えている、別に恐怖とかではなく動揺の震えだった

「ふん、『知り合い』ね」

樹はあえて震えている理由を聞かずに亜夜から視線をそらしてパンを食いちぎる

その時だった、亜夜の背中に衝撃がくわわった

「うわっ！」

隣にいた樹は驚いて立ち上がり何事かとそらした視線を再び亜夜に向ける

そこにいたのは亜夜と、その上に抱きついたように乗っている見覚えのある女生徒

「あやにゃん」

「ひにゃん〜いつき〜」

その少女は抱きつくまでにはいたらず亜夜の胸に顔をスリスリ擦りつけている

亜夜はかなり嫌がっているようで樹に手をさし伸ばして助けを求めた助けを求められた樹は亜夜の上のつかえている女生徒をつかみあげて、亜夜から引き剥がした

「あ、お前転入生じゃねーか？」

女生徒のことを見覚えのあるのはもちろんだ、なぜなら先ほど見に行っていたから

「亜夜、こいつ知り合いなんだろ」

「知り合い！？、そんなやすいもんじゃないよ、あやにゃんとは大大大親友だよっ！！」

その言葉を聞いたとたん、女生徒は樹の手からするつと抜け出して樹の顔に向けて指をさす

「あやにゃんとは山よりも高く、海よりも深〜い関係なの」そんな関係を築いた覚えは無いわあー！！」「ぎゃふうー！！」

しゃべっている最中に不意打ちで亜夜が背中からドロップキックをおみまいする

転校生は綺麗な放物線を描いて、3、4m弱ぶっ飛んでいった、蹴った本人は息を荒くして怒りの表情を露わにする

人前ではあまり表情を表さない亜夜がここまで怒っているのははじめてみた樹

「いまのマジの蹴りだったな・・・」

ぶっ飛んだ転入生を見ながらつぶやいたが思いもよらない返事が亜夜から返ってくる

「大丈夫、あいつこんなじゃ死なない・・・」

「殺すつもりだったのかっ!？」

亜夜の言葉にマジな突っ込みを入れて、亜夜のほうに振り返る

「ひどいよう／＼久々の再会なのにい／＼」

転入生は亜夜に蹴られたせなかを撫でながら、ゆっくりと立ち上がった

その様子を見るからに、さほど痛くなく、大事には至らなかった様だ

「瑞希、何でここにいんだよ」

鋭い目つきを瑞希という転入生に向ける亜夜

「いや、親の都合とかで引越したから？」

「何で疑問文!？」

「一応突っ込みを入れる樹、その反応がよかったらしく瑞希は樹に「ナイスツツコミだよ、君!」と親指を立てていつてきた

樹はなんだこいつと思いつながらまるで奇妙なものを見るような目で見ていた

「そうか……でも、俺はお前とは親友でもなんでもないからな!」

亜夜はそう言うのと食べかけの弁当にふたをして、屋上から出て行った

樹も後を追いかけてようと、残り少しのパンを口に放り込んでお茶で一気に流し込み軽く走り出す

「むう、寂しいなあ……」

一方瑞希は後を追わずに屋上でただただ突っ立っていた

47話（後書き）

七瀬 ななせ 瑞希 みずき

身長：体重 165cm：42kg

好きな：嫌いなもの あくやにゃん : 萌えないやつ・・・

特技、趣味：（内容がひどいので記載中止）

亜夜が樹のいた中学に入学する前にいた中学の時の同級生

その話はまた後ほど・・・

48話

「亜夜くあいつ本当にただの知り合いか？」

放課後、いつもの様に二人で帰っていると樹が声をかけてきた

あまり触れてほしくない話なのだろうだけれども、興味を持った樹はどのような関係か気になったのだ

『あいつ』の単語に小さく反応はしたものの亜夜は答える様子を見せなかった

「答えたくないならいいけど・・・じゃ、また明日な」

樹はいつもの亜夜の家の方と樹の家の方向に分かれた道で手を振り、背中を向けて歩きだした

無表情だが一応亜夜も手を振り返して、自分の家の道を辿っていった

「瑞希・・・か」

その帰り道、亜夜は自称親友といっている昔の顔見知りの名前をつぶやいた

『どいつも・・・篠屋亜夜です・・・』

春が少しすぎたころ、亜夜は季節かずれの転入生で瑞希のいる学校へと来た

このころの亜夜はあまり明るくなかった、いやどちらかというと暗いほうだったのだ

お世辞にも似合うとはいえないほど男子制服を着ているのが不自然な容姿のせいで亜夜はよくいじめられるようになった

中学なんてそんなもの……たかが『色白』『童顔』『チビ』『些細なことだけでいじめは始まるのだ

そして亜夜は一時的に不登校になった、だが亜夜の性格上、迷惑をかけたくないので夜一には『学校にいつている』と嘘をついていた

『ピンポン』

家のチャイムがなり、亜夜は時計の時間を確認して、またかと思いつつも玄関まで出て行く

「あやにゃん？いるんでしょ？」

チャイムを鳴らしたのは、クラスメイトで唯一普通に接してくれた瑞希だった

『あやにゃん』と言うのは止めてくれといったことがあるのだが、瑞希いわく『篠屋君とか亜夜君とか言いにくい』の一言でこのあだ名になったのだ、ちなみにその時周りに居た女生徒が何人も頷いていたのは秘密である・・・

毎日、家が近いという理由で学校のプリントなどを持ってきているのだ

「・・・ここ入れとくから、ちゃんと読んでよ」

近所迷惑なくらい大きな声で瑞希が言った後、扉のポストから3枚のプリントが出てくる

手に持って見てみると二枚は学校行事に関係したプリントでありもう一枚は手書きで書かれた紙があった

『今日は朝から晴れて気分爽快！そして今日から体育は水泳で楽しかったよ』

篠屋君もきたら絶対楽しいのに』

これもほとんど毎日である、毎日毎日どうつてことない事を書いて亜夜に渡しているのである

こうして亜夜が不登校になって約一ヶ月間、瑞希は雨の日が振ったりしても、いつもと同じ時間に亜夜の家に来たのだ

「あやにゃん、今日も来たよ」

不登校から19日目、夕立で雨が激しく振っているが、今日もいつもと同じ時間約4時50分に瑞希は来た

亜夜はこれが習慣になってこの時間帯は玄関で待っていたのだ、まるで主人を待つ犬のように

「帰りに急に雨降ってさあゝもうびっくりしたよあゝゝクシュッ！」

扉越しに瑞希がくしゃみが聞こえてきた、そうとう濡れたんだろうと亜夜はわかった

「じゃあここ入れとくからねえゝゝクシュッ！」

また今日もいつものようにポストにプリント入れられたが、亜夜はそれをとろうとはせずにドアノブをつかんだ

雨が地面にあたる音がよりいっそう大きく聞こえる中、久々に会った瑞希の顔が目の前にあった

「しゝゝあやにゃん！」

目を見開いて瑞希は驚いた顔をあげたので亜夜は少し照れたように顔を赤くした

「毎日ありがとゝゝそのゝゝ明日からゝゝ学校いくよゝゝ」

つなぎつなぎの言葉でもちやんと瑞希に届いたのか、驚いた表情から
らどどん笑顔の表情になっていく

これが亜夜と瑞希の出会いである・・・

48話(後書き)

感想等お待ちしております！

最近誤字脱字がひどいので気づかない場合お手数ですけど報告お願いします

49話

「亜夜？」

樹は亜夜の顔の前に手を持っていき、気づかせようと振っている

だが亜夜は気づいてはいなく、樹は小さくため息をついてポケットに手をつっ込んだ

(ん〜俺またなんかしたのかなあ〜?)

現在、亜夜と樹は登校中であり亜夜は朝からこんな調子なのだ

考え事をしているような顔で、ずっと上の空なのである

「あ〜や〜・・・にゃーん!!」

二人がそろって登校中に、同じ制服を着た女生徒が亜夜に向かって突っ込んだ

そして亜夜はそれをもろに食らってしまい、勢いよく倒れこんでしまった

「いつてえ〜・・・っ瑞希!？」

「亜夜にゃ〜ん」

樹の目の前では昨日と全く同じく瑞希が亜夜の胸に猫のように顔を擦り付けていた

「はなれるおー」

亜夜は必死に抵抗をして、瑞希の顔を片手で持って押しているが10cmの身長差の性がまったく微動だにしていなかった

「むふふ」

「いやあ~~~~いつき~~~~」(泣)

昨日と同じく、樹が出動して瑞希を亜夜から引き剥がしたのだ

口を猫のようにして名残惜しそうに見つめる瑞希だが、亜夜は息を整えながら制服の乱れを正していた

「昨日といいこんなことは止める、亜夜が困ってんだろ、それに自称親友だろ？」

右手につかんだ瑞希に、言い聞かせて最後のほうは少し笑い混じりに言った

「むう」とまたまた猫のような口をした瑞希は暫く考えて「そうだねえ」といって樹の言うことを聞いた

その返事を聞いた樹はつかんでいた瑞希の襟を離してあげた

「最初からそうしてりゃいいんだよ」

樹は瑞希に言ったのだが、その本人はすでに走り去って亜夜のもとに行っていた

(・・・無視かよ！)

そのことはあえて樹は声には出さなくジト目瑞希を見た

「あやにゃん、ごめんね」

といいながら、今したばかりの樹との約束を破り抱きついた

瑞希にとっての表現方法なのだろうが、亜夜はそれを思いつきり足で突き飛ばした

「今樹に言われたばかりだろ！」

またまた息を荒くして瑞希に指をさしながら亜夜は言う

1mくらい吹き飛んだ瑞希は、すぐに立ち上がって「つい」と頭をかきながらいった

「でもさあ〜あやにゃんも私に引越すの一言ぐらい言ってよ〜」

瑞希は頭にやった手を下ろすと、亜夜に向かっていった

この言葉に亜夜は反応してしまい、視線を下に向けてしまう

「いったらお前反対しただろ・・・」

表情は見えないが、亜夜は震えた声で瑞希にいった

瑞希は「もちろんだよ」と返事をして亜夜に近づこうと一歩足を進

めた

「……それについては謝る……でも、俺の初めての友達だったから……」

瑞希は亜夜から発せられた『友達』という単語を聞いて足をいったん止めてしまう

亜夜は今言った台詞が恥ずかしかったのか、顔を赤くして下をむいて照れてしまった

その一連の行動を見た瑞希は、顔がどんどん笑顔になっていったのと同時に亜夜に抱きついていった

「やっぱり友達じゃ〜ん、えへへ〜」

「だから抱きつくなあ〜〜（泣）」

こうして、昔の親友とのちゃんとした再会を果たした亜夜だった

50話

「あやにゃん、今日話したい事あるから一緒にかえろよ」

無事に旧友との中を取り直した日の放課後、早速瑞希は亜夜のクラスに来て亜夜にかけよってきた

ちょうど荷物を鞆に入れている最中の亜夜は、「いいよ」と短く返事をして帰る準備を調えた

「話したいことって？」

少し気がかりなことを聞いてみるが、瑞希は亜夜の手を引きながら「それは帰りにね」といって教室から走り去っていった

引つ張られている亜夜にはわからなかったであろうが、樹からみたのは一昨日や昨日のように純粋な笑顔ではなく、どこか疑いのある笑顔であったので樹はあわてて何か起こらぬように後を追った

「瑞希・・・で話したいことって？」

帰り道が途中まで同じ三人は人通りが少なくなってから、本題を話し始めた

「それはねえ・・・えい！」

離し始めるのかと思った瑞希はいきなり亜夜に抱きつくくと、制服の中に手を入れて、直接肌を触りだす

少しくすぐったいので顔を赤くして若干笑いながら「やめるよ／＼
とって瑞希の手を振りほどいた

「むう〜やっぱりねえ〜」

瑞希は振りほどかれた手で亜夜の胸においてある手を指差した

「男の子はそんな事しないよ?」

「「えっ?!」「」

亜夜と樹が同じように驚き、同じ言葉を口にし凍りついた

まさか、そんなという気持ちが悪かった、亜夜の隠していた秘密が
たったの二日で見破られてしまったのだ

「学校じゃ言いにくかったからけど・・・あやにゃんって女だったの?」

今までニコニコしていた瑞希が急に真剣な顔になって言った

樹が感じたいやな予感はこのことだったのだ

「・・・それは・・・」

亜夜はどう答えようかわからず、戸惑ってしまふ

「・・・瑞希、とりあえずこの話は家で話そう」

気まずい雰囲気になったので、樹が途中乱入して話を止めたが、亜夜はそれでもまだ信じられないように戸惑っていた

こうして一時的に話を進めなくてすんだ亜夜だが、帰り道の三人は一言もしゃべらず、気まずい雰囲気がずっと漂っていた

「　　っていう事なんだけど・・・信じられないよね・・・」

瑞希にすべてのことを話した亜夜、そして今でも自分では信じきれ
ていないのに、他人に信じてもらえるとも思ってもいない

「・・・あやにゃんは嘘つかないもん、信じるよ？」

「・・・瑞希・・・」

だが瑞希は、ありえない亜夜の話を通じてくれたのだ

瑞希は言った後、にっと笑顔を亜夜にみせ、亜夜も落ち込んだ表情
から切り替えて笑顔で返した

「あ、もうこんな時間、じゃ、あやにゃん私帰るから」

部屋にかけてある時計を見た瑞希は思い出したように立ち上がり、
亜夜の部屋から出ようとした

樹も続けて、席をたって帰ろうとする

「あっ・・・瑞希、よかつたら食べて・・・いく？」

瑞希より若干背の低い亜夜は上目遣い気味に瑞希に尋ねた

亜夜のこの『上目遣い』は女性にも有効である・・・

「いいのっ！食べる！」

相変わらずのリアクションの大きさで、瑞希は亜夜に飛び掛るがなれたようにさらっとよけた

「つぎやったら、ぶつつぶすから・・・それと樹も食うよな？」

可能な限り笑顔で隠した威嚇を瑞希に向けて、最後のほうは威嚇を止めて樹に話しかけた

「ん、じゃあ食ってかえるわ」

樹の返事を聞いた亜夜は微笑みながら「おう」といって、キッチンへと向かっていった

リビングに取り残された二人、先に口を開けたのは瑞希だった

「で、樹とあやにゃんって付き合ってるの？」

「はいい?!」

ソファに座ろうと思いついた樹は、まあ突拍子もないことを言い出した瑞希のほうに盛大にふりかえって奇声を上げた

「亜夜は男なんだぞ?!わかってんのか？」

「うん」

もちろんといった感じに、樹の言ったことを自信を持って頷いた

瑞希はたったの一日で気づいたのだ、亜夜が樹に好意を抱いているのを……

(でもまあ……絶対とはいえないしなあ、うん)

瑞希は返事をした後に口を猫のようにして渋い顔をして、頭の中で悩んでいた

(あやちゃんが樹に対する行動はどうもあやしいんだよねえ)

「この事亜夜には話すなよ、あいつ絶対に怒るから」

樹はそう言いながら、ソファに座ると眉間にしわを寄せ、何かを考え出した

(亜夜と付き合うか……って、俺何考えてんだろ……亜夜に悪いだろ)

もしものシミュレーションを考えた樹は、亜夜に悪いと思いつぐにやめ、自分を責めるように言い聞かせた

(むう、樹もねえ……)

瑞希は樹の挙動不審なしぐさや言動で亜夜と同じ気持ちなんではないかとうすうす感じていた

(まあ、いつかあやちゃんに聞こえ)

たった今樹に言われた約束を破ってこんなことを考えている瑞希であった

夕食も食べ終わり、二人は帰るため、亜夜は見送るために家の前に出ていた

空は暗くなっていて、もうこんな時間になっているのかと気づかされた

今まで楽しく、会話が長くある食事なんてめったに、いやぜんぜんやったことなども無い亜夜にとってはあっというまにすぎていったのだ

「じゃあね、あやにゃん」

「んじゃ、また明日な」

二人それぞれ違う言葉を亜夜に言って、手を振りながら帰っていった

亜夜も笑顔で手を振り返して「ばいばい」といって見送った

52話

『もう少しか……』

空に浮かぶ髪の毛の長い少年ラヴィスは明かりに包まれた街を見下ろしてつぶやいた

そして右腕を空の中に『入れると』中かから一冊の本をとりだした

『直接は教えられない……だから答えは自分で……』

その右腕に持った本を街に向かって落とした

重力で地面へと落ちていく本は次第に燃えるように蒼い炎に包まれると、消えてなくなってしまった

『……』

声には出さなく、唇だけを動かしたあと、ラヴィスは夜の空に溶けていった

樹と瑞希と夕食を食べた数日後、亜夜の生活は瑞希も加わり毎日にぎやかになってきた

今は学校で体育の授業のため、樹と二人で体育館に移動中である

女になってからの一番不安であった体育は最初こそ生徒の視線でいつも気にしていたが、周りの生徒は気づいていないみたいで今は普通に授業を受けている

「亜夜、俺なんかした？」

そんな時に、樹が声をかけてきた、なぜなら今日の亜夜は若干イラついているような感じがあったのだ

いつもいつも、いらぬ事をしたり、言ったりする樹は原因が自分なのかと思いきや率直な意見を聞いてみる

「別に」

これもいつもなら、「したよっ！」とか言って返してくるのだが、今日はノーリアクションで返事をした

「・・・そっか」

あまり納得のいかない樹だが、本人が言っているのだからとそうであると思いきや、時間が危ないので体育館へ向かう足を速めた

「亜夜、今日なんか変だぞ？」

体育のバスケの授業中、試合が終わって戻ってきた亜夜の様子がおかしいので樹は心配して声をかけた

顔が真っ青で見るからに気分の悪そうな亜夜は「きもちわるい」と小さく言った

「せいせい、篠屋が気分悪いから保健室行って来ていいですか？」

コートの上反対にいる、体育教師に聞いてみて了承を得た樹は亜夜と一緒に保健室へと向かおうと体育館を出た

「ほら、乗れよ」

足元がおぼつかない亜夜をみて、樹はかがんで負ぶるようなポーズをした

学校の建設上、体育館から保健室まではかなり遠いのでそれを気遣ったのだろう

「大丈夫・・・だから戻っていいよ・・・」

だが亜夜は素直にまかせようとはせずに、自分の足で保健室へと歩いていった

ふらふらと今にもこけそうな亜夜を見て、樹は心配して数m先にいる亜夜を早足で後を追った

ちょうどどのとき、樹の不安が的中して亜夜に追いつこうとした時、足をくじってしまった

「ほら、言わんこっちゃねえ、負ぶうから乗れ」

樹は後ろにいたので、すぐに反応できて亜夜を抱きとめた

「……ありがとう」

さつきとは違い、今度はちゃんと背中に乗って二人は保健室へいった

（うーん、今は亜夜が女だが……周りから見たら男同士なんだよな）

いらぬ事を考えている樹であった……

「失礼します……って誰もいねー」

保健室に来たものの、誰もいなくて樹は声に出してしまっ

取りあえず亜夜をおろして、誰か呼ぶために職員室に行くと言った
って樹は出ていった

「むう………恥ずかった……」

顔全体はあまり健康な様子ではないが、負ぶってもらったことが恥ずかしかったのか頬だけ紅潮している亜夜

頭痛もしてきた亜夜は横になろうかと思ひ、ベットに近づいていった

「おなか痛い・・・」

ベットの隅に座って、小さくため息をつくとき、そのまま後ろに倒れていった

（はぁ・・・なんかもんどくさい・・・）

亜夜は頭の中でそうおもいながら、ゆっくりと目を閉じて眠りについた

52話(後書き)

では、ご感想等お待ちしております！

53話

「はぁ~~~~~」

放課後、またいつもの様に樹と家路をたどっている亜夜は誰でも気づきそうなくらい大きなため息をついた

「どうした、そんなおきなため息ついて？」

「いや・・・役に立つけど微妙な知識を知ってしまつて・・・」

今日、秋に教えてもらったことを思い出して、微妙な表所をする亜夜

若干心配している樹だが、朝より顔色がいいし、困つたような表情もしていないので特に気にもしなかつたので「へえ」と一言言つて足を進めた

「あつ、そういえば食材切らしてた、俺スーパー行くから」

思い出したように樹が口を開くと、時計を見て方向転換しようとする、こつ見えても自炊をしている樹だ

「俺もちょうど少なくなつてきたし・・・一緒行く」

自分もちょうどいい機会だったので、樹が歩き出そうとする前に亜夜がいったので一緒に向かうことにした

実を言うと、今亜夜は特に買う必要など無かつたのだ、ただ無意識にだが『樹と居たい』と知らず知らず思っていた

「ふう、結構買ったな〜」

「そうだね〜」

(・・・こんなに買ってしまった)

少し大きめの袋にいっぱいに入った食材を身ながら後悔した

時々樹や瑞希が夕食を食べにくるものの、一人暮らしには少し多すぎた

(そして重い・・・筋力落ちたからな〜・・・)

女になったことで、筋肉が削げ落ちたのであまり力が出ない亜夜は袋一つでも重く感じた

「ほら、もってやるよ」

そのことを普段の生活で知っている樹は、亜夜の持っている袋を奪い取り無理やり持った

「別にいいよ、手いっぱいだし」

それを奪えかえそうと手を伸ばした亜夜だが、樹がそらしたのであつけなく手は目標に触ることなく空ぶった

「気分悪いんだろ？それに隠しても力なくなってる事わかるぞ」

「あう……」

別に隠していたわけではないのだ、人に頼ることが苦手な亜夜は言いたくなかった、それに言っても何になるとも思ってもいなかった。これ以上反論しても、どうせ樹は袋を話してはくれないと思ったので、そのまま両手で鞆をもって再び歩き始めた。

（俺って流されやすくなったのかなあ……）

そう思いながら、オレンジ色に染まった太陽を背に亜夜たちは家路を進んでいった。

「ありがとう、また明日」

今まで持ってきてもらった買い物袋を受け取り、手を振って樹を見送った亜夜。

玄関に入って靴を脱ぐと、そそくさと廊下を抜けてキッチンの冷蔵庫を開けた。

そして手に持った袋の中身を見て、再び冷蔵庫の中を見た。

「……入らないよね？」

ため息をついて頑張っ
て詰め込もうとしたもの
の結果努力はむなし
くすべて入らなかつた
ので夕食がかなり多くな
ってしまった

53話（後書き）

ポッキーの日ですね

なので大量に買って、今絶賛後悔中です（笑
では感想等お待ちしております！

54話

「ん………はや………」

時計を見て時刻を確認すると6時と少し、ようやく太陽が顔を出して明るくなりだす時間帯である

二度寝するのめんどくさいので、軽く背伸びをして部屋から出て行く

一階へ降りてまず、コップに麦茶をついでそのまま一気に飲み干す

「今日はバイトか、とはいっても時間まだまだあるし………」

ちなみに亜夜は朝食はあまり食べない派であるので、特に休みは食べないので作らない

暫く何をするともなくただテレビを見たり、学校から出された宿題をしたりしていた

カリカリとシャーペンをノートに走らせること約一時間弱、終わった宿題を鞆に入れようとした時にベットのしたに見たことのある日記が落ちてあった

それは夏休み終わりに見つけた『母子手帳』であった

「………こんなところに置いたっけ？」

不思議に思いながら亜夜は手帳を拾い上げると一瞬最後に見た文面

を見たくないと思い開くのを止めたが、しかし今でも信じられないのでもう一度確認することにした

まず最初のページに書かれているのは前と見た時と同じことが書いていた

文自体は少ないが、それが何ページも何ページも書かれていたのをじっくりと見ていた

『11月14日

うーん、なんかおなかが痛いというか・・・

陣痛かな？昨日とは打って変わって元気そうだから今日生まれそうなのかな』

そう書いてある次のページからは途中まで白紙がつづく

カーテンから朝日が差し込む部屋でペラペラと手帳をめくる音と、
亜夜だけに聞こえる自分の心臓の鼓動

（もうすぐ・・・だったよな・・・）

亜夜はページが近づいてくると、めくる速度を遅くした

そして最後の数ページ前にあるはずのページは

白紙であった

そして最後まで、何もかかれていなかった

「え……」

声を漏らした、確かに亜夜は自分で信じられないと思い、何も書いていないことを望んだ

しかし夏休み前、何度も何度も読み直したのに忘れるはずが無い

今でもちゃんと、母親の丁寧な字でかかれた文は頭の中に鮮明に残っている

当然こんなことになれば小さからずパニックになるのは当然で、亜夜はあせった

「嘘……嘘でしょ……」

亜夜はもう一度見たが、やはり最後の数ページは何も書かれていない白紙のページであった

（何で、何で？あれって夢だったの？）

夏休みの出来事を思い出してみてもやはり最後のページに書かれているのは亜夜の頭では事実であった

（いや……この手帳……机の引き出しに入れたはず……）

夏休みのことを必死に思い出した結果、亜夜は最後に手帳を置いた場所を思い出した

机の一番下の鍵がつく引き出しを引っ張った

「あ、鍵・・・」

鍵をかけておいたことを忘れて、思いっきり引っ張ってしまった

それで少しだが落ち着きを戻した亜夜は深呼吸を一つして、一番上にある引き出しを開けて鍵を取り出した

しゃがんでゆっくりと鍵穴に入れると、一番下の引き出しは開いた
此処には何も入れていない引き出しなのですが、一冊のピンク色のノートがあった

この時点で亜夜にとってもない違和感が襲った

『これは母子手帳、そして今もっているのも母子手帳』

この世に『一つ』しかないはずのものがなぜ今、目の前に『二つ』もあつたのだ

恐る恐る引き出しに入っている手帳をとりだして表紙を見ると案の定『母子手帳』と書いてあつた

そして開いて中に何が書かれているのかを確認した

同時にもう一つの手帳を開けて書かれている文を見てみた

これもまた案の定で、全く同じことが書かれていた

わかっているが理解できない、そう思いながら亜夜は一番気になるページを開いてみた

右手にある手帳には、先ほど見たものと同じく真っ白なページだが、左手の手帳には文が書かれていた

『11月15日

今日は亜夜の一才の誕生日

久しぶりにこの本を見つけたから書いてみちゃった』

そこに書いてあったことは、夏休み前見た文と全く同じであった

(これって母さんが一年間生きてた場合と、生きれなかった場合の?)

いやな変な考えが、亜夜の頭に呼びかけてきた、そしてそんなはずは無いと亜夜は頭を振って引き出しに二冊の手帳を突っ込んで部屋を出て行った

そのまま、どたどたと大きな足音で階段を下りていき家を出て行った

一刻も早く心を落ち着かせるために、このまま家に居ては気が狂いそうだったので、どこかに行って気を紛らわそうと当ても無く走っていった

54話（後書き）

気がついたらユニーク数10,000達成!?

ほかの人の作品に比べると劣りますが、それでも感激ですっ!うれ
しいですっ!

こんな駄文ですがこれからも頑張りますのでよろしくお願いしま
すっ!

55話

「はぁ・・・はぁ・・・痛っ！」

落ち着いてきたころになつてスリッパを履いて出てきたことを悔やんだ

かなり走ったので足の皮が剥けてしまっていたのだ

ちよつどちかくに公園があつたので休憩がてらに休もうと入っていた

住宅街なのだが、まだ朝なのでそんなに人は居なかつた

「はぁ・・・何してんだよ」

足の痛みで少しの冷静さを取り戻した亜夜はため息をしてベンチに座ると頭を抱えた

（見なかつたほうがよかつた）

いまさらながらも手帳の中身を見たことを後悔した

だがしかし、やっぱり色々引っかかる点があるので見たほうがいいとも思う

（ていうか何でベットのしたにあつたんだ？前には何も無かつたと思っけど）

ベッドの下に本を置いた記憶や、その付近にいていた記憶を思い出してみるが何も思い出せない

すなわちそんな事は『亜夜』はやっていないということだ

(じゃあ誰が……)

自分の家に、そして自分の部屋に最近入ったことがある人物はともう一度記憶をたどる

最後に自分の家に来たのは瑞希が亜夜が女になっている時になった時が最後なのだが、自分の部屋に入れては無いので当然違うだろうと答えが出た

それから今日までは誰も来ていない

(……もしかして……)

『普通』の人間じゃできないのなら、『異常』な者ならできるのではないかと考えた

(『自分』?)

普通ではありえない事とは十分承知だがそれ以外に考えられなかった

(でもだいたい『自分』って何なんだよ?)

亜夜は再び頭を抱えて悩んだがその考えは携帯の着信によって邪魔された

画面には見たことの無い番号が表示されており、誰であろうとおもった亜夜であった

「誰だろ……はい、亜夜です」

「亜夜ちゃん今何処いんねん、バイトの時間やのに」

最近になって聞きなれた声を聞いて、見たことの無い番号は和弘の番号ということがわかった

そしてその言葉で思い出したように公園の時計を見ると8時10分、朝早くのシフトは7時30からである

ちなみに開店は9時から、そして7時30分過ぎからは朝限定で出勤の人のためにコーヒーを出したりしている

亜夜は8時出勤なので、電車の都合もありいつも15分前には来ている

「あ……」

「その様子やったら忘れとつたんやなあ」

携帯でもわかるほど大げさに笑っている和弘が予想できる、大げさではなく常になのだが……

その後亜夜はあわてて家まで戻り服を着替えると亜夜は大急ぎで駅まで行ったのだった

55話(後書き)

では、ご感想等お待ちしております！

56話

「ありがとうございます」

いつもの営業スマイルで客を送り出す亜夜、夕方になり亜夜のシフトが終わる時間帯である

テーブルの上のお皿やカップを片付けている最中、亜夜の後ろから和弘が声をかけてきた

「亜夜ちゃん、来週に新商品の会議するから案を持ってきてな」
振り返ると、厨房から頭をちょこつと出して言っていた

（新商品ね〜・・・たべたいのならばいっばいあるけどなあ〜）
テーブルの上を片付けながら、亜夜は口を猫の様にしてデザートのことを考えた

（やばい、よだれが出てきそう）

このとおり、亜夜は甘い物好きでしょっちゅうスイーツの店に通っている

最近はこのを無料で食べさせてもらっている、というより本当はそれ目当てで入ったみたいなものだ

その後、食器やティーカップを持って、厨房に行きそれで仕事を終わった

「亜夜ちゃん、この後用事ある？」

「別にありませんけど、何ですか？」

従業員用のロッカーで制服を脱いでいた亜夜に真央が声をかけてきた

「いや、実はねこの後友達と合コン行こうと思ってただけ一人抜けたからさ」

そう言いだして話し始めた真央の言葉は容易に先を読めた

すなわち『足りない分合コンに来て』だろう

「いきませんよ、大体合コンに学生を誘わないで下さい」

いくら年上からの願いでもこういう関係には一切了承しない亜夜

制服を綺麗にたたみロッカーに入れ扉を閉めると「じゃあ、僕はあがります」と言いながら丁寧にお辞儀をして出て行こうとした

「あやぢちゃん（泣）」

だが真央は亜夜の腕をつかんで帰そうとはしなかった

これは毎度のことである、まるでだだをこねるような態度をして色

々言ってくるって性質が悪いのだ

「真央さん、泣くのも止めてください、どうせ嘘なんですよ？」

本当に涙まで流して演技した真央なのだが、最初こそ本当だと思っていたが、最近は慣れて泣きまねぐらいならすぐにわかるのである

「……ありやくばれたか？」

亜夜の腕に絡めた手を解き、自分の涙をぬぐう真央、本人曰く劇団部だったからと知っているがそれでもわずか数秒で泣けるのはある意味才能である

「じゃあいつてくれるわね」

「じゃあってどういうことですか！」

かなり理不尽な言葉を言われ、若干怒る亜夜

それでも真央はひるまずに亜夜に顔をつかずけ耳元でそっとささやいた

「この前みたいに、いい事してあげるから」

低音の声で言われてへんなことを考えてしまう亜夜だが、よくよく思うとそんな事をした覚えが無いとまた真央を怒った

亜夜のバイトの終わりは大体こんな感じのミニコントで10分は費やしてしまうのだ

「夕食とか作らないといけないんで帰ります」

今度こそともう一度お辞儀をして早足で去っていく亜夜であった

「いてて・・・そういえば足けがしたままじゃん」

帰り際、朝に皮がむけたまま放置していたので亜夜はどこかで絆創膏でも買おうかなと考えながら帰り道を歩いていた

（仕事は結構楽しいから忘れてたけどね、今思えば血も出てたよ
うな・・・）

そう思っていたらちようどいい具合にコンビニがあったので、絆創膏を買おうと入っていった

いらっしやいませと店員に出迎えられてそのまま何処にあるか少し探した後、飲み物と共に一緒にかつたのだった

「ありがとうございます」

何処のコンビニでもそうだが笑顔で客を見送るのは当然だ

そんな店員の声を背に亜夜はコンビニを出て行く途中、誰かと肩がぶつかってしまい体勢が傾く

「あっ、すみません」

「こつちも余所見してたから・・・」

その返事を聞いてから亜夜はもう一度小さくお辞儀をして、コンビ
ニを後にしたのだが

亜夜とぶつかった少年らしき人物は亜夜の背を見つめたままそこから
数秒ほど離れなかった

56話（後書き）

もうすぐ文化祭らしいですって、私の学校

はい、知りませんでしたよ、いきなり友達が

『文化祭何かする〜』

とか言ってたから

『文化祭？何それおいしいの？』

という反応……

教室言っていない私が悪いんですけどね（笑）

さてこんな私が高校に入れるのかは危ういですね〜

では、感想等お待ちしておりますっ！

57話

「はあ、きもちい」

湯船につかりながら大きく息を吐く亜夜

体にたまりまくった疲労と、寒くなったのもあり亜夜は風呂を溜めて湯船に浸かっている

何度も女の体で風呂に入っているものの、なかなか直視はできるものではない

(男としてはうれしい状況かもしれないけどね……)

自傷的なことを考えながら両膝を持つと湯の中に口だけ入れてぶくと吹き出した

(こつなつたのも全部……『自分』の性なのかな?)

口は湯船に浸かったまま目を瞑り今までのことを思い出しつつ考え出す亜夜

(肯定するところもあれば、否定することもあるし、今思うと自分でもないかもしれないし)

朝考えていたこととは逆のことを考えてみる亜夜、違う視点で見るとわかることもあるということであろう

だがしかし、いくら考えても、亜夜の部屋にもう一つ母子手帳を置

いた犯人はわからないままであった

(・・・さてよ、そういえばこの姿が必然とか言ってたし・・・)

日にちはかなりたつており、夢から覚めたときは朦朧としていたが亜夜は『自分』と会った時のことをすべて鮮明に覚えている

(『女だった』とか?・・・)

「はは・・・前にもこんなこと考えたな・・・」

湯船から口を開けるとそのまま浴槽から出てシャワーを浴びだしたザアザアと水が床に落ちる音がけが亜夜の耳に入る

「本当にそうだったら、どんなだったのかな・・・」

目に入らぬように実を瞑ってはいるが、この言葉からは悲しみの様子も入っている

もし自分がはじめから女なら、こんなに苦しまずにいられたかもしれないかもしれないと思ってしまう

「もう・・・いいや・・・」

なぜ自分がこんな目にあうのかも、もう考えたくは無くなって亜夜はシャワーを止めると風呂場から去っていった

「樹、明日会えるかい？」

携帯からはつい最近知り合った、瑞希からのものであった

「ん、別にいいけどどうした」

特に用事も無く暇なことを伝えると瑞希からは「じゃあ亜夜にゃんちきて〜」と喋って電話を切ってしまった

（……おいおい、場所だけいっても、まあ朝、亜夜に連絡とればわかるか）

やけに短い連絡だと思いながら携帯をポケットにしまう樹

そして暇だといったものの宿題等に手をつけていないので明日の分も一気にしようと気合を入れる

「うっし、やるか」

「亜夜……なぜ真実を見ない」

漆黒の中に浮かぶ一つの影

ラヴィス

手を顔で多い右目だけで街を見下ろすように見ている

「つかいたくはないが、最終手段だ……」

「ラヴィス！」

突如闇から野太い声が聞こえた、ラヴィスにとっては聞きなれた声であった

すぐ隣の空間は歪みだして、中から大きな男のシルエットが浮かびだす

「これ以上あの人間にかかわったら、消されるぞ！」

中から出てきたレオは何かしようとしているラヴィスの手をつかむと怒鳴り声を浴びせた

普通の人間なら誰でもひるむ体型と大声でもラヴィスは表情一つ変えずにたっていた

「それに執拗にあいつに関わるのはなぜだ？」

ラヴィスの手を離すと今度は質問をしたレオだったが、ラヴィスはその答えをせずに「レオには関係ない」といつて街に下りていった

「おいっ……まったく、俺にも少しは何かできるだろ」

実を言うと隠し事をされていて寂しいとも思っていたレオであった

「いつかはなしてくれよな……」

そついうとレオはラヴィスを追うために背中の翼をたたみ重力による自然落下をじだした

58話

携帯の着信により起こされた亜夜は音の発信源を手にとった

「亜夜にゃん」

「ん、みずき？」

目をこすりながら欠伸を一つすると、聞きなれた友人の名を口にした朝早いというのに声だけではいつもと変わらぬ元気のよさがわかる

「今日亜夜にゃんち行くから」

「別にいいよ、でも本当なら日曜はバイトだけど今日はなし」

すなわち毎週日曜は遊べないということである

「うん、わかったじゃあ後で行くね」

意外と携帯での会話は短い瑞希であった、というか苦手という落ちである

携帯を切り時間を確認する亜夜、画面には7時32分と表示されており何も無い亜夜はまた寝ようと布団にもぐりこんだ

本日二度目のモーニングコールもとい、誰かからの着信音で亜夜は目を覚ました

時間は9時半、久しぶりに長く寝て疲れも取れてすっきりした亜夜は背伸びを一度して携帯をとった

「樹？」

画面に表示された『樹』という名前を見て若干気分を良くしながら出ると当然のごとく樹から返事が来る

「おう、瑞希から昨日連絡あってな亜夜んち行くから」

「昨日って……今さっき知らされたんだけど俺」

亜夜の言葉を聞いておいおいと少し笑い混じりに言う樹、その後「あいつらしいな」といって二人で笑ったのだった

「じゃあ、今から家出るから30分で行くと思うから」

「うん、また後で」

電話を切った後、亜夜は立ち上がるとすぐ近くのクローゼットに行き服をあさりだした

秋に買ってもらった服はかなりというほどは無いがそこそこ生活には困らない程度あった

それよりも多いくらいでまだ来ていないのも2、3着はあった

「むう、これがいいかな？」

暫く悩んだ結果、白と黒の縞々の服に、ショートパンツという至って普通の格好……『女性』としてはだが

つい先日から亜夜は家に居る時でもだんだんと女性用の下着を着るようになってきた

とはいってもまだまだスカート等をはくには抵抗が少なからずあるのでバイト以外では控えていた

「でだ、後三十分何しよう」

服を着替えてもそんなに時間がかかるものではない、なので亜夜はどうやって暇をつぶすかを考えた拳句テレビでも見るために一階へと降りていった

59話

『俺……お前が好きなんだ』

男は女に向かってそういつた

『えっ?』

突然の出来事で若干あわてる女

今亜夜が見ているのはちょうどいいところのドラマである

結構なドロドロもので朝からこんなものを流すなよと思いつつ見えてしまうのが人間というもの

なので亜夜はかれこれ20分は見ている、しかも最終回とな

『茜^{あかね}俺と、一緒になってくれ』

男は茜という女の手をとり心強い目で瞳を見た

真剣そのものというまなざしで見られた茜は最初は驚いていたものの今は笑顔になって口を開けた

『もちろんよ……』

涙を流しながら笑っている茜、たぶんうれし涙なのだろうと読み取った亜夜もついもらい泣きをしてしまう

そしてドラマは二人のハッピーエンドで終わりを告げた

「最初はアレだったけど、なんか泣けた・・・」

いい話だったなあ〜などと思いながら時計を見てみるとすでに時間は10時の5分前、もうすぐ樹が来るであろう時間帯である

そんな事を思っていた矢先、玄関のチャイムがなって訪問者を知らせる

(ちょうど来たな)

とととと小走りで玄関に向かうと一度スリッパを履いて鍵を開けた

「やつほ〜」「よっ」

樹と一緒に瑞希をいたことに若干驚きながらも二人を家に招き入れた

「瑞希と一緒に来たのか？」

瑞希と一緒に来たことを気にしながら、平然を装いながら何気なく尋ねる亜夜

「ん、ああ電話して一緒に来たんだよ」

靴を脱ぎながら返事を返す樹、瑞希はすでに脱いで先にリビングに走っていった

亜夜も樹の靴が脱ぎ終わると同時に、リビングへと向かった

リビングに言ってみるとそこにはだらりとソファに寝転がる瑞希の姿が見えた

「瑞希は何で疲れてんの？」

樹に聞いてみるものの両手を少しあげて「さあ」というだけであった

「というか瑞希、今日は何しに来たの？遊ぶものも無いのに」

基本亜夜の家ゲームといった類のものは無い、父親の教育方針上だったり亜夜自身もゲームに費やす暇があるのなら基本ほかのことをやる

なので亜夜の家では基本的にやることは本当に何も無いのだ

ソファに転がった瑞希をつつきながら訪ねる亜夜

「お買い物だよお、あと亜夜にゃんのご飯食べたかった」

(どっちかって言うとご飯目的じゃないのか？)

そう思いながらも口には出さずに亜夜は「はいはい」といって早めの昼食をとることにした

瑞希の食べたいものを作ると机を三人で囲んで食事を始めた

「ところで買い物って、何処行くの？」

箸を動かしながら瑞希に尋ねる亜夜、瑞希は返事をしようとするがのどにつまって少しむせ返った

「こほ、こほ……えとですね、亜夜にゃんの誕生日プレゼントでも買おうと……」

お茶を一気に注ぎ込んだ瑞希は一つ間を置くとしゃべりだした

ちなみに今日は10月2日で亜夜の誕生日まで約1ヶ月と少しだ

「そういえばもうすぐだったな」

「あ……ほんとだ」

それで思い出したように樹が声を発すると亜夜も同じく忘れていたようだった

（最近忙しすぎたしな……自分の誕生日も忘れてたよ……）

「亜夜にゃんその様子じゃ忘れてたでしょ」

亜夜の思考を見事に読み取った瑞希はまったくといった様子だ

「誕生日くらいわざ、めちゃくちや楽しくないとなっ！」

これは最近落ち込むことばかり続く亜夜に対しての瑞希なりの気遣いだろう

(でもそついうのは隠してたほうが好きなんだけどな・・・)

さっき考えたことがわかった瑞希でも今の若干の苦笑いした亜夜の思考は読み取れないだろう

なぜなら亜夜はそんな事以前にただ自分を気遣ってくれる友人が居ることをうれしく思っているからである

「誕生日のパーティーしないと亜夜にゃんが作るケーキ食べれないしっ！」

(・・・前言撤回、やっぱり自分のことしか考えてないや)

59話(後書き)

感想等お待ちしております！

「そういえば亜夜にやんって何かほしいものあるの？」

ところ変わって今は隣町、もちろん亜夜の誕生日プレゼントを買うためである

「うーん、そういわれてもなあ無いんだけど・・・」

亜夜は腕組みをして考えては見るものの全くといっていいほど何も思いつかないのだった

その返事を聞いて瑞希も腕組みをして首を傾げて見せた

「そんなに考えなくていいよ、気持ちだけで十分だし」

「むう、それじゃあ私が許さないのだった！」

亜夜は気遣っていったのを瑞希はただ自分の都合で即答した

「じゃあ、みんなでどっかに行こうぜ」

それならばと今まで口を出さなかった樹が声を出した

亜夜と瑞希の二人もそれならと了承して、結果亜夜の誕生日は三人で遊びに行くことになった

(てか、これならここに来なくて良かった・・・ッ!?!?)

亜夜が一人で考えていると背後からただならぬ気配を感じて亜夜は振り返った

だが後ろを向いても歩いていない人ばかりしか見えなく、亜夜を見ているといったものはいなかった

「亜夜、どうかしたか？」

歩き出そうとしていた樹は亜夜の不思議な行動を目にして振り返ったほうを見るが何も無く、亜夜に尋ねてみる

「ん、いや何でもない」

気のせいだと思い二人の後を追う亜夜、そしてもう一度歩きながら後ろを見ても先ほどと変わらずなく歩いている人しか見えなかった

(気のせい……だよね)

もう一度二人のほうを向いて亜夜は少し早めに足を動かした

『時間が無い……』

長髪の男ラヴィスはそうつぶやくと亜夜の背中を見つめた

その直後ラヴィスが見つめていた亜夜は振り返りこちらを向いた

だがしかし、亜夜にラヴィスが見えるわけも無くそのまま樹のかけた声によって二人の後を追い出した

もう一度顔を少しひねってラヴィスのほうを見てきた亜夜だがこれもまた見えるはずも無く今度は逃げるようにその場を離れていった

『……………後少し……………』

つばやくと背中を一度羽ばたかせるとラヴィスは消えており、後には黒いカラスのような羽がいくつか舞っていた

60話(後書き)

後書きと書いてただの言い訳と読んだり・・・

私風邪を引きました、はい

最初は「明日には治るでしょう」とか言ってたけど次の日には・・・

・

38.8度・・・orz

バリバリの高熱でした

なので短い&更新の若干の遅れすみませんでしたっ！

61話(前書き)

あーうー、風がひどい……

一日で30錠も飲むとか、大丈夫なのでしょうか？

まあそれはおいといて(笑)

1000000pv達成!!

みなさんありがとうございます!!!

なんか寝てる間に超えてましたっ!!

これからも頑張りますのでぜひぜひ、最後まで見ていてくださいっ
!!

61話

「あ、今日発売日だ」

思い出した様に瑞希が言うと、そのまますぐそばにあった本屋に行くといった

二人は用事が無いので別に行かなくてもいいのだがせっかく来たのだからと行くことにした

「本かゝ、最近読んでないし」

「俺もそうだなあゝ」

昼間ということもありかなりの温度があった歩道とは逆に本屋の中はかなり涼しかった

瑞希はそそくさと新刊の本がおいてある場所に向かうと目的のものを手に取るとそのまま何かを探すように奥に入ってしまった

樹は少年誌を読み漁っているようだ

「小説でも買おうかなあゝ」

小説コーナーをまじまじとみる亜夜

「・・・」

そんな亜夜に一つの小説が目についた

裏に書いてある説明文には『朝起きてみたら、僕は女になっていた』とかかれていた

自分と同じだ、などと思いつながら所詮は小説だしコメディーみたいなのだらうと亜夜は思った

それでも自分の今の状況と同じなので中身に興味がありそれを手に取り読み出した

「亜夜にゃくん、それ買うの？」

数分後、瑞希が亜夜のそばに来て尋ねた

「え、あ、うん買うおうと思う」

読むのに集中していた亜夜は急に声をかけられて少しあわてて本を閉じて買うことなど考えていないのに瑞希に返事をした

瑞希はもう買うものは買ったらしいので外で待ってるねといい、本屋から出て行った

最初は買う気のなかった亜夜だけでもわずか数分、そんな間にこの本に共感を抱いていた

シリアス要素が多く、主人公も自分の立場とほとんど同じであった

(似てるな、俺に)

共感と、先が気になるので亜夜は結局かってしまったのであった

「亜夜何買ったんだ？」

樹はその内容が気になって声をかけたのだが亜夜はあまり言いやすいものではなかった。「別に、ただの小説だよ」と流すように返した

「ありがと、家まで送ってくれて」

「おう、じゃな」

家まで送ってくれた樹は軽く手を振ると自分の家へと帰っていった
まだ夕方ではないが昼間、という時間帯でもないのでまだまだ外は
明るい

そんな見通しのよい時間帯なのに樹の姿は早く見えなくなってしま
った

本当に見えなくなったのではない、亜夜の目に涙がたまって視界が
かすれただけなのだ

(あれ・・・俺、泣いてるのか?)

帰るさいに乗った電車の時、亜夜は半分ほど小説を読み後悔していた

『僕は友人に恋した、男友達に・・・最悪だよ、最悪だよ・・・
・最悪だ

勇気をだして好きっていつても・・・ただ気持ち悪いだけ・・・は
あ、こんなことならはじめから女に生まれたかった』

小説の一文にこう書かれていた

一瞬、本当に自分なのではと思いつくくらい同じ感情、境遇、そ
して苦しみ

(やっぱり俺・・・樹好きなんだよ、好きで・・・)

瑞希と別れた帰り際も樹を意識していた、なんともいえない、言葉
には表しにくい感情

自分は男に恋していいのか?それと違って女に来いをできる体では
ない

中途半端、そんな言葉がきくと今の自分に最適だと亜夜は決め付けた

だから樹と離れて、かなしかった、寂しいと思った自分に涙した

なぜといわれても言いたくない、人には絶対に

「とまれよ、なんであふれてくんだよ・・・なんで」

必死に手をこすりつけて涙をぬぐうがすぐに大粒のしずくが零れ落ちる

(やっぱり・・・好きなんだよ・・・)

61話(後書き)

此処らへんから物語が加速していきます

亜夜にゃんはいつたいたいどうなってしまうのか・・・

では感想等随時お待ちしております!!

『困りました。と作者はつぶやいてみたり・・・』

どうも委員長です

突然なんですけど聞いてください

前々から思っていたんですよね

まあ何かというと題名のことです

大体二字熟語に数字をつけているだけですが、正直しっくりこないような・・・というか数字をつけてみているものの新しく題名を変える時が自分でもわかりませんっ（涙目

なのでいまさらながらですけど変えようと思います、そしてどうかこんな駄目駄目作者に題名のネタを考えてくださいっ！

それとついでに小説事態の題名も変えようかな〜と思っているんですけど

実を言うとこの小説ほかに考えていた題名があったのですが・・・色々間違えてほかの小説の名前になっちゃった（てへ　おいつ！！

それで話も少々合うように変えています、当初考えていたのは『学校では教わらない人生』みたいな名前だったような・・・

まず各話ごとの題名のほうは結構自分的に気に食わないので言うてください、『〇話〜〇話まで　　』みたいに書いてくれると幸いです

そして題名はこのままでもいいか、それとも上記で書いたような名前、又はそれ以外でも、という選択肢があったりします

お手数ですけどこんな作者に協力してくださいっ！

それと知りませんでしたけど今日からテスト期間らしいです

なので投稿が少し遅くなるかもしれませんが、すみません

皆さんの意見お待ちしております！！

なおこの受け付けは今日から12月14日までです

62話

亜夜が昼間買った本は二冊で一冊は主人公視点、もう一冊は主人公が恋した友達視点だ

家での時間をもてあました亜夜は無言でページをめくる

ペラ、ペラとやや規則的にめくられる音はやがてなくなる

「良かった……」

亜夜は笑みをこぼした、別に楽しいことがおきたわけではない

あの後主人公は友達に告白し、どうせ振られるんだろうと思っていたが、予想を反して、見事結ばれまさにハッピーエンドこうして主人公視点の小説は終わってしまった

自分と重なり合ってみていた亜夜はそんな主人公が無事に結ばれたことを喜び、頬を緩ませたのだ

そして次は友達視点の小説を読み始めようと本屋の袋をあさり、取り出した

まずは当然プロローグから入った

『俺の名前は工藤くどう 樹いつき今日から高校生で別に浮かれることもなく学校に向かっている』

主人公視点での小説では友達の名前が実は出ていなかった、そうい

う風に書いたからだろうが今まで友達の名前が樹とは思ってもしなかった

(でも、時々見ることもあるし……珍しくないのか?)

最初から少々驚きがあったがちょっとした偶然なのでそのまま小説に読みふけていった

病院の一室殺風景な部屋に一人の女性がベッドに座っている

窓からそらを見つめる女性はにっこりとやさしく微笑んでおなかの辺りをなでる

「お母さん」

ドアが勢いよく開けられると学生服を着た少女が入ってくる

前見た時とは違いまっきりと少女の顔がよく見えた

「亜夜何も来なくてよかったのに」

よく聞き取れた、気のせいでも、勘違いでもない確かにこの女性は亜夜といった

「だって心配だったもん」

そういつと少女は女性の寝ているベッドの横にあるいすに座る

「ふふ、ちよつと風邪をこじらしたただけよ……でもありがとね」

女性はそつと手を伸ばして少女の頭をなでる

目を細めて気持ちよさそうにする少女は幸せそうに笑う

「亜夜、いい知らせがあるの」

女性微笑みかけながら、目を細めている亜夜という少女に言いかける

「ん、なに？」

それに返事をして目を開ける亜夜という少女

フフと笑ったあと、もう一度女性は口を開けてしゃべりだした

「とうとうお姉ちゃんになるのよ」

「ほえ？もしかして」

突拍子も無い声を上げて驚いた亜夜は女性の顔とおなかを交互にみる

女性のほうはそれが面白くてつい笑みをこぼしている

「ほんとに？」

念のためにもう一度聞く少女、ゴクツと息を呑むのがわかる

「ほんとうよ」

やさしくそういうと手をそっとおなかにまわしてなでる女性

少女はそんな返事と行動を見てフルフルと震えている

「やったあ」

そういうとうれしさのあまり女性に抱きつき少女は思いっきり抱きしめたのだった

62話（後書き）

おはこんにちばん

??

風邪が完治しました

そして・・・・・・・・・・感想何も無いorz

虚しいですう・・・・

まあ、この腐った脳内を振り絞って考えろということですね（グスン

私自身も精一杯努力しますがどうが助力を、全面的な協力を

これじゃあ助力じゃないですね（笑）

それでは感想等お待ちしておりますっ！！

63話

「かはあっ!?!」

何かを吐くような、または胸を思いつきり殴られたような声を上げて亜夜はおきあがった

実際はその二択の行動はしていない、ただの比喩表現だ

上半身を上げて数回せきをした亜夜は頭をおさえた

小説を読んでいる最中睡魔が来た、たぶん大体の人は経験したことがあるだろう

それに身をゆだねてすやすやと眠りについた亜夜

そして夢を見た、久々に見た、女になる前に見た『あの夢』をだ

「嘘、嘘、嘘だ」

夢の中の少女は自分だった、そのことにショックを隠せず亜夜は嗚呼と声を漏らしている

瞳は何処を捉えるでもなく転々と焦点が定まらずにいた

そしてさらに驚いたことに、病室にいた女性は『今はいない母親』であったこと

父親は亜夜が死んだ時に亡くなったといっていたが、つい最近にな

って出てきた日記には一年間生きたしるしがあった

この二つからいえることは

『 亜夜が女で母親が生きている世界』 『 亜夜が男で母親
がない世界』 の二つの世界が存在すること

でも所詮は唯の夢、妄想でしかないので証拠なんて全く無い……
・ いや日記という証拠があるにはあるが決定的な証拠にもならない
それに亜夜は何か『わかつていいるような』 感覚がある

夢の中でなぜか暖かい感じがした 自分の記憶でもないのに

夢の中の自分が、本当の自分のような気がした 夢なのに

いやそれだけじゃない、亜夜はこの二つの世界が存在しているなど
思っていない

『どちらか一方の世界しかない』ということもなんとなく感づいて
いた

平行世界パラレルワールドなどという世界はあるだろうが同じ世界が重なることは無
いだろうと予測を立てた

科学で証明できなくてもなんとなくわかっていた

そのことをふまえると、今のこの世界は亜夜が男で母親がいない世界『から』亜夜が女で母親が生きている世界になっていること

確実にそうといえるわけではないが現状ではそれが一番の答えであるう

(でも、世界が塗り変わることうって神様ぐらいしかできない……よね……)

冷静に考えたらそう、この世界にはそんな力を持つ存在なんているはずはない

亜夜はそう考えて心を落ち着かせた

「はぁ……夢だ、夢だから気にしない……こんな幻想」

瞳を瞑り頭を何度か軽く叩いた

(……でも、ひっかかる……夢の母さん妊娠してた……)

その子供は誰？と疑問になるがどうしてもわからない

亜夜の知っている限りは篠屋家の家族構成は夜一、かな、亜夜の三人だけ、そこにもう一人などいない

(俺以外家族に詳しいのは……縁を切ったおじさん?)

亜夜には身内はもういない、いや居ないというのはおかしいが父親、母親が結ばれるために縁を切ったから亜夜は夜一のほうの親しか知らないのである

しかもあったのはあの一度つきりで運よく別れ際にもらった電話番号だけである

ベットの横においてある携帯を手に取りピッピッと電子音を発しながら操作すると画面には『おじいさん』と表示された

一応縁は切ったものの事実上はお爺さんになるからこれで登録したのだ

そして暫く迷った、なんと聞こうかと

おじいさんは亜夜のことを女ということを知らない、話そうとも考えたがあの場合では話せなかったのだ

だから今自分の状況を説明した後、おじいさんは信じてくれるのだろうか？

そんな疑問と不安が脳裏をよぎり、携帯を閉じて、もう一度誰か良く知る人物を記憶から探り出した

(母さんや父さんの知り合い……あれ？秋さんって確か……)

約一年ほど前、父夜一が亜夜に言った台詞を思い出す

『学校時代の友人』

確かそんな感じだったなと亜夜は思い出しこんなにも身近に知る人がいるじゃないかと気づいた

早速亜夜は聞こうと思い携帯で秋に電話をした

数回の着信音の後、聞きなれたもしもという声が聞こえて亜夜はいきなり話し出した

「秋さんっ、僕の母さんのこと知ってますか？」

「え、あー、しってるわよ」

なにやら考えた風に秋が言った。たぶんそれほどはあっていないのだからとすぐにわかった

「母さんって・・・えと・・・いつなくなったか・・・知ってますか？」

まずはその疑問を秋に聞いてみた

理由はいたって簡単だ、亜夜が考えているとおり母親が居る世界とすぐになくなった世界の違うところは『母が死んだ時間』が半分を占めているだろう

そして後は死んだ時期が亜夜が生まれて一年以内ならばまず亜夜よりしたの子供は生まれないだろうと考えたからである

いや実を言うとわかっていたのだが、それは確信が持てないからである

今までずっとその日だと思っていたのに、もう一つの日記ではまだ生きていたのだ

「確か……亜夜ちゃんが生まれて一ヶ月も無かったはずよ……」

亜夜の生まれた生年月日は20××年の11月5日であり、確かにかんなの命日は20××年の11月20日である

(俺が知ってるのと同じ……か)

「あ……後、父さん、母さんと僕以外で……家族とかがいましたか」

「……」

ある程度かまをかけて、しばしの沈黙で凶星か？と亜夜は一瞬思った

「……いや、いないわよ」

「本当ですか？」

長いとは言えないが返答するには少し長すぎる時間に亜夜は嘘ではないかと疑った

口走っていった言葉はいつもの様にやわらかくはなく、まるで鋭いナイフのようなのがった言い方だ

「いいえ、嘘じゃないわよ昔のことだからよく覚えてないのよ、何があったかとか」

秋の言うとおり、十数年前のことを鮮明に覚えられるはずもなく思
い出すのに時間を要したただけであっ
た

あせっていたこともあったが、亜夜はそんな事も考えずに秋を少
しながら疑った自分に嫌悪した

(いくらなんでも秋さんを疑うなんて・・・こういうときは嘘つか
ない人って知っているのに)

普段頭がいい亜夜がそれほどまで頭が回らないくらい混乱している
のだ

「亜夜ちゃん、また何かあったの？」

いくらかのやり取りで亜夜が普段と違うことに気づいてまた何か災
難にあったのかと心配した

「・・・いや別に、気になっただけ・・・です」

話は少しそれるが、亜夜は嘘をつく人が大っ嫌いである。故に自分
も嘘をつかない

そんな亜夜でも嘘をつくことは時々、どうでもいいような些細なこ
とを本当に時々嘘をつくことがある

「そう・・・でもね亜夜ちゃん、困った時は頼ってね、一応これ
でも教師だから！」

だが今回のように重大なことでは嘘は簡単に見抜かれてしまう

この台詞をいった秋はきつと笑顔で言っているんだろうなとおもいつつ亜夜はありがとございませと一言言つと電話を切った

「ばればれじゃんか・・・」

63話(後書き)

今回は珍しく長めの投稿です

では、感想等お待ちしておりますっ！

64話

それから暫く亜夜はぼうつと考えていた

目を開けているのに、何も見ていないように目は全く動かさず、時折まぶたが開け閉めされる程度

後はただ小さく呼吸をしているだけであえう

「……………」

口に手を当てて天井を眺めることもう一時間、いやもうすぐ二時間に達するであろう

外の景色もだんだんと暗くなりはじめている

(樹って俺のこと……好きだったんだよな……)

はじめの一時間は何で自分がこうなったのか考えていたが、だんだんと馬鹿らしくなっていく、樹とであったころを思い出していた

(好き『だった』か、今は……ただの友達なのかな？

はじめから女だったら……良かったのにな……)

二時間動かなかった亜夜の体ははじめて動いた。とは言っても唯寝返りをうつただけでそれほど動いては無いが

そしてその行動により体は横になり、テーブルの上においてある小

説が二冊目に入った

(小説ならさ、ハッピーエンドで終わるのにな)

口や表情では笑わないが心の中でいつて笑ってみた

『空しい』 『虚しい』

そんな言葉が今の自分に似合うような気がした

(そういえば……夢見たから何か起きそうな気がするな……)
たしかに今まで亜夜は夢を見た日など禄でもないことが多々おこっ
ている

なのでまた自分に災難が降りかかるのだろつと自傷的な考えに浸った

(例えば電話とかなって)

『~~~~~』

「ッ!?!」

考えていたことがそのままおきて、亜夜は驚きベットから飛び起きた
音楽はすぐにとまり、メールが来たことを知らせた

「びっくりした」

小声でそうつぶやくと、深呼吸を二、三回してテーブルの上にある

携帯をとった

誰かなと思いき前を見てみると『神野 樹』と表示されていて少し喜んでしまう亜夜

本文が気になり、速攻でメールを開くと題名なしの少し短めの文があった

『今度二人でどっかいかね？』

瑞希とは別に誕生日祝ってやるからなっ！！』

短い、樹らしさが出ている

(この文章なんか見たことあるような……??)

携帯から目を離して考えているとテーブルの上においてある小説に目がいく

「あ……そういえば」

一冊の小説を手にとってパラパラとめくりだす亜夜

暫くするとあるページでとまり、何かを探すように視線だけが動いている

「あった」

『誕生日おめでと』

明日お前がいきがってたとこ行くぞっ!!』

シユチユエーションこそ同じでも、文章自体はそれほど似ては無かったことを自分で笑ってごまかし、小説を閉じた

でも亜夜は『小説の樹』もなんか樹に似てるな〜などと思っていた
もう一度携帯を開き樹のメールを見る

「……二人で……か」

(これってもしかして、で、デート……とか?? いやいやいや、俺は男だしデートとかじゃないっつーの!)

一人百面相する亜夜であった

「ん〜、何か喜びそうなこと」

樹は自分のベットの所で、瑞希とは別に亜夜の誕生日に何を
してあげようかということに悩んでいた

（あいつは物とかよりも、何かしてやるほうが喜びそうだしな〜）

「あー、くそ、わかんね」

ベットに倒れこんであきらめの一言をつぶやく樹

かれこれ1時間悩んでいるだろう、それほどまで亜夜を思っているから・・・

「やっぱり瑞希みたいにどっか行こうかな〜」

ボタンを力チ力チと小気味よく音を鳴らして、文章をつっていった

『今度二人でどっかいかね？』

瑞希とか抜きで遊園地とか、映画とかっ！〜！』

「これじゃあデートみたいじゃねえかっ！〜！」

即座に突っ込みを入れ勢いよく携帯をベットに投げつける樹

自分で書いた文を自分でツッコミを入れるというのははたから見た

らとてつもなくへんなものだろう

もう一度携帯を手に取り、少し悩んだ樹は力チ力チと音を鳴らして文章をうっていった

『今度二人でどっかいかね？』

瑞希とは別に誕生日祝ってやるからなっ！！』

「だああっ、これもあんまし変わんねえじゃねえかつ！！」

またもや携帯を壊さんばかりにベットに叩きつける樹

『二人で』、『そして瑞希抜き』、この2つの単語があからさまにデートをかもし出している

(亜夜は女になって困ってるのに、何でこんなこと書いてんだよ、俺はあ)

はあと小さくため息をつく樹、そのまま携帯を拾い何を書くかどうかと考えようとして画面を見た樹の瞳には画面には『送信完了』と表示されていた

その画面を見て大口を開けて絶句する樹

「いつちゃん、うるさいわよあ」

部屋の外からは秋が注意したのだった

66話

今日最後の授業、ぼうつと空の景色を眺める亜夜

特に何か見ることもなく

雲がかつたただただ広い空と

立ち並んでいる建物、どれにも焦点を合わせずに外の雰囲気
気を眺めていた

そしてその様子を授業のはじめから見ている数学教師、黒澤

生徒には自習と違ってプリントを配らせてやらせている、その間に黒澤はある考え事をしていた

（女・・・だが俺が調べる限り男だ・・・何か理由があるか、それともそういう趣味か・・・）

少しカマかけてみるか・・・）

黒澤は座っていたイスから立ち上がると、チョークを持って黒板に数式を書き出した

生徒の数人は何だと思いきり黒板を見ていたがきつと態度の悪い誰かに問題を出すのだろうと、皆、真面目にプリントをはじめだした

唯一、誰かに当たるとわかったのは亜夜の真後ろの席の樹、朝からこんな調子の亜夜にあてるのだろうと予想がついていた

「篠屋、この問題といてみる・・・おいっ！」

「へっ、あ、はい・・・」

最初の言葉で振りかえらなかつた亜夜に、黒澤は大きな声で怒鳴った
驚いたのか肩をビクツと震わせた後、亜夜はすぐに黒板へと向かってチヨークを持った

「どうした、早く書け」

黒澤の出した問題は東大並の問題、すなわち超難題で高校一年生は普通解けないであろう問題を出していた

いくら頭がいい亜夜でもさすがにお手上げのようすでジーと黒板を見ている

「五分で解け」

黒澤はそういつて再びイスに座って時計を見出した

「残念だったな、少しは解けたようだが時間切れだ」

残り時間2分程度になってようやく解き方がわかった亜夜は猛スピードで黒板に書き始めたのはいいが2分などすぐに経ってしまった
いや、元々超難題を5分で解けという黒澤が間違っているのだ

「篠屋、放課後に職員室……いや、会議室に來い」

黒澤が台詞を言い終わると同時に授業終了のチャイムがなり、黒澤は教材をもって教室から出て行った

(さて、篠屋・・・お前は男か・・・それとも女か・・・)

教室を出て行った後、黒板にたつたままの亜夜にむかって何人かの生徒がしょうがないよや、今度からは見とけよとそれぞれ声をかけてきた

樹も例外ではなく、亜夜の元へと近づいていった

「亜夜、あれはしょうがねえよ、俺でもわかんねーし」

「嫌、お前が解けないのは当然だろ」

少しでも気を紛らわそうと樹は冗談交じりに言うと、すぐに亜夜のツッコミが来た

そして自分の席まで歩いていき、帰りの準備をしようとして席に着き机の中の教科書等を取り出す亜夜

(それにしてもあの問題・・・答えが無いような気がするんだよな・・・)

一人の生徒がけしかけている数式を見ながら、亜夜は難しい顔をした

さすがの黒澤でも難しい問題を出しても、答えのない問題を出すはずが無いだろうと考えていた

ならなぜ？と考えてみて亜夜が思いついたのは唯一つ

(俺に用事？しかも他人に聞かれないような・・・)

亜夜は不安を胸に、帰りのHRが始まった

67話

「亜夜にゃ〜ん、帰るお〜」

H Rが終わって担任が教室を出て行ってすぐにドアから瑞希が出てきた

「ごめん、今日ちょっと用事できて、先に帰ってて」

学生鞆を持つと、手を顔の前に出して謝りながら教室を出て行った首をかしげて「どしたの」と隣の樹に聞いてみた

「亜夜なく、黒澤の授業でばーとしてて、それで呼び出したって」
荷物を鞆に入れながらしゃべる樹、瑞希は樹の言葉を聞いてなにやら顔を嫌そうにして口を開いた

「げ、あの黒澤に・・・あの先生あんまし好きじゃない・・・」

転校して日が浅い瑞希でも黒澤の立ちの悪さを知っていたようだったそれもそのはず、一度問題を出されて解けなかったので大量のプリントを出されたのである

それからは数学の授業を真面目にやりだしたのでかえって成績はぐんぐんと伸びたようだが

「まあ、今日は二人でかえるか？」

「ん、そだね、かえろっか」

特に気にしない様子で言った樹なのだが、この台詞が明日問題を引き起こすとも知らずに・・・

「失礼します・・・」

呼び出しされてあまり気分の良くない亜夜の言葉は、とても弱弱しく聞こえた

入ってまず見えたのはイスに座り堂々と言う感じの黒沢であった

机の上にプリントが無いのを確認した亜夜はやっぱり何か用事があるのか、と気にしながら出されている目の前のイスに座った

「今日は残念なことにプリントが無くてな、かわりに説教だ、説教を職員室でやるのも悪いから此処にこさせたわけだが」

「あのっ！」

黒澤の言ったことで、先ほど亜夜が抱えていた疑問のうち一つが消えた

後はなぜ答えが無い問題を出させたかが問題、それを聞こうと黒澤

が言葉を言う前に尋ねた

「・・・あの問題の答えって何ですか？」

亜夜が尋ねた疑問に少し驚いた様子を見せた黒澤だが、黒縁メガネを一度くいつと指先で触ると、口を開けた

だがこれは黒澤が予想をしていた答えであり、今の同様も実は演技、いや説教といったのも嘘である

これは黒澤が亜夜の性別を判断するためのものでしかないというわけである

当の本人はそんな事にも気づかず、唯質問をしていたのだが、実際は罠にはまったようなものだった

「答えは無い、いつもいつもぼけっとしてるお前におもいつきり説教でもしようかとな・・・にしてもお前は前よりもずいぶん華奢になってないか？男の癖になあ」

黒澤は最後のほうを強調して皮肉たっぷり気味に言ってみせた

（さて、どうな反応をするかが問題だな・・・）

その言葉を聴いて、亜夜は体を小さく反応して、黒澤から目をそらしてしまった

「ハハ、どうした、そんなに動揺して・・・まさか本当に女なんじゃねえのか？」

「っ!!」

亜夜のかろうじて声に出さなかった反応を見て、黒沢はイスから立ち上がり、会議室の扉に向かって歩きながらポケットから携帯を取りだした

携帯をとりだしたのは誰かに電話やメールをするためではなく、少しでも怪しまれないように演技のためである

そして振り返らぬまま、無表情のままに口を開けた

「呼び出してすまないが、今日中にやらないといけない用事があった、さっさとかえって反省してろ」

電話をかけるフリをしながら扉を開けて会議室から出て行った

(・・・女、決定だな・・・)

廊下には、なにやら真剣な顔をした黒沢が演技で使用した携帯をしまいこんで歩いていた

会議室にいた亜夜は黒沢の表情とは違い、一安心した様子の顔だった

67話（後書き）

そして物語は急速に・・・という展開になるのかな？

でもこの黒澤が次に何をするのか、作者も不安です・・・（おい、作者なのに心配سنナよっ！

それでは感想等お待ちしております

68話(前書き)

今週でもう学校は暫くおやすみ・・・

そう、冬休みなのですっ！うれしいっす！

まあ、勉強に費やすでしょうから遊んだりはできないでしょうが・・・

・o r z

結局亜夜は樹、瑞希とは別で、先に一人で帰宅していた

「くう・・・何で、なんでだよ・・・なくなよ・・・」

帰り道、家のすぐ近くになり、人通りも全くなかったところになつて亜夜は泣き出した

自分でも泣く理由はわかっていて、自分が樹のことが好きということとを、友達とかではなく、『愛して』いるという好き

「ああもう・・・」

ため息混じりに家の玄関を開けると荒々しくトビラを閉めた

そして靴を脱ぎちらかして、リビングへとまっすぐ向かうと、ソファにダイブした

「もうなんか・・・いやだよ・・・」

すすり泣きと鼻を鳴らしながら亜夜は目を瞑り、これ以上涙を流さぬようにした

数秒後、ポケットに入れていた携帯が鳴り出して、驚いた反応でソファから落ちてしまう亜夜

「何やってんだよ・・・たかが電話ぐらいで・・・」

自分にあきれ、右手で涙をぬぐいながらポケットから携帯を出すと、亜夜が今最も見たくない人物の名がそこにあった

『七瀬瑞希』

必死で涙をぬぐい再度確認しても、画面に映ったのはよく知った友人の名前だった

出たくない、正直な気持ちはそれだが、亜夜は見てみぬフリなどできない人間、つい出てしまった

「……なに」

少し強めに言ったのはやはり意識している性が、それとただの嫉妬か、自分でもよくわからなかった

「亜夜にゃん、今から会える？」

瑞希もいつもみたいに呑気な感じではなく、珍しく真剣そのものだった

「……別に」

瑞希の質問に即答ではなかったが、亜夜の答えには迷いが無かった

(……本人に聞かないとわからない……もんな)

「じゃあ今から行くから、たぶん十分くらいでつくよ」

瑞希もいつものようにのんびり口調ではなく、凜としたような声で言った

亜夜は瑞希が電話を切ったのを確認すると、数秒息を止めて、大きく息を吐いた

玄関のチャイムが鳴り、瑞希が来たことを知らせた

時計を確認すると、言ったとおりに10分で亜夜の家に着していた

そして亜夜は重い足をあげて玄関までいき、一度深呼吸をすると扉を開けた

お邪魔しますと一言言って瑞希が入ってくると、いつもみたいに飛びついたり、猫なで声で亜夜の名前を呼んだりすることは無く、亜夜の後を追ってリビングまでついていった

「亜夜にゃん、今日の用事って」「無いよ」「・・・」

瑞希が言葉を言い終える前に、台詞を無理やり止めさせた

亜夜はこんなわかりきった答えではなく、今日来てもらったための質問を早速言おうと口を開けた

「好きなんですよ?」

だが、先に行ったのは瑞希だった

「す、すきって・・・誰を・・・」

動揺しすぎて舌がうまく動かなく、自分に対して皮肉にも聞こえた言葉に意地で返事をした

「樹、神野樹のこと、好きなんでしょ？」

「・・・・・・・・」

今度は返事することさえもできなかった

心の中ではもう、好きだと、友人とかそんなものではなく、一人の『異性』として愛しているとわかっている

だが本当にそれでいいのかと、亜夜の中では葛藤が広がる

（俺は男・・・でも樹を好きになった・・・それでも俺は男なのに体は女なのに・・・）

だがそれは本当に異性なのか、と聞かれると、YESともいえるしNOともいえる

逆にYESしかいえなかったり、NOとしかいえなかったりともいえ、普通の人間ではありえないほどの正解と、不正解を持っていた

「・・・私は知ってるよ？亜夜にゃんが樹のことが好きなこと・・・

それで亜夜にゃんが苦しんでるのもわかるよ？」

瑞希のこの言葉で、亜夜の心に秘めていた思いは爆発した

「っそうだよ、俺は樹のことが好きだよっ!!」

でも・・・でも何がわかってるんだよっ!?!、そのこと知ってて、お前は樹と付き合ってたんだろ!?!」

息は上がり、目からは涙が流れて、最後のほうは絶叫に近かった自分の本音を瑞希にぶちかました亜夜は、嗚呼と声を上げながら、床に顔を沈めた

それでも瑞希はいつもとは違い冷静に亜夜をみて、言葉を発した

「付き合ってたなんか無いよ、たぶん見ていた生徒が勘違いしたんだよ?」

私は亜夜にゃんの気持ち、わかってるっていったじゃん」

瑞希はそんな亜夜の様子を見て、苦しくなった、いつの間にか抱きついていた

「ほん・・・と?」

亜夜は一字一句はつきりと聞こえたが、本当に自分の耳が間違っていないかを確認した

「ほんとだよ?・・・亜夜にゃんが樹好きなのも本当でしょ?」

言葉に詰まったが、亜夜はうんと小さく声を出して頷き、涙を服の袖でぬぐった

一方瑞希は腕をはずしてえへへといつもどおりのほんわかな笑みを浮かべていた

そして、いまさらながら勘違いした自分は馬鹿かとおもった

「・・・でも・・・今は女でも、元々男・・・男が男を好きになるなんて

だめ・・・気持ち悪いだけ・・・樹も嫌だよ・・・」

瑞希の証明により、気持ちは晴れたが、やはり自分が元男ということもあり、いまだにそんな自分を嫌い、自己嫌悪している亜夜

「亜夜にゃん、それは違うよ、今が男だとか女だとか関係ない

好きなものは好き、それが絶対だよ！

それに今の亜夜にゃんは女の子よりも女の子っぽいよ」

瑞希のありがたき言葉は、素直に笑わずに、苦笑いみたいに少し口をゆがめたものだった

(でも亜夜にゃんも鈍感だなあ、樹もたぶん亜夜にゃんのこと好きなのに・・・)

瑞希は言葉に表さず、心の中でそういった

なぜなら無駄に期待をさせてしまい、本当は違いました、という展

開は避けたかったからだ

それともう一つ、自分に対しての気持ちは、自分で気づいたほうがいいという瑞希なりの気遣いだった

夜の学校というものに溶け込んだ、黒いスーツ姿の人物は、携帯の時計を見ながらブツブツと口元を動かしている

学校というのは亜夜の学校、光鷹高校のことで、国内でも生徒数が多いことが有名で、大きさは飛びぬけての規模である

「……やっぱり、この世界は『偽り』の疑いがあるな」

背中から純白の光り輝く翼を出すと、スーツ姿の男は屋上から空中に身を投げ出して飛び始めた

街の光がスーツ姿の男を時折照らしているが、道を歩いている人には全く目にはつかずに比喻ではなく、そのまま空に溶け込んでしまった

68話（後書き）

感想、アドバイス、批判などお待ちしております！

「亜夜にゃ〜ん、おそぼお〜ん、ぐへえ」

相変わらず元気いっぱい瑞希は、大声を上げながら後姿の亜夜に両手を広げて抱きついた

亜夜は条件反射で拳を出し、それは瑞希のはらにクリーンヒットしたまさかクリーンヒットするとは思っていなかった亜夜も少し心配を
して瑞希をみたが、見慣れた笑顔だった

見るからに中がよさそう、と断言できない様子だが素直に表せない
亜夜なりの痛い表現であり、数日前の一件からこんな調子である

現在昼休みが始まり、いつものように屋上で朝食をとっている最中だ

「それにしてもお前は痛みとか疲れとかねえのか？」

さっきのすごく痛そうな一撃を引きつった笑顔で見届けていた樹が
声をかけ、かえってきたのは「頑丈だから」という一言だけだった

（そういえばこいつ・・・空手とか柔道ならってたっけ？）

体力が尋常なのは父親の過保護のせいで瑞希は中学のはじめのころ
まで格闘技関係を習っていたからである

「私も一緒に食べるよ〜」

そう言いながら、片手に持ったお弁当を広げていくと、箸をもってパクパクと食べだす瑞希

「それと今度の日曜日、亜夜にゃんバイトおやすみでしょ？」

「そうだけど、なに？」

もぐもぐと口の中の食べ物を数回かんだ後飲み込むと、箸を口にくわえてポケットをあさりだす

じゃんっ！と口で効果音を出して取り出したのは一枚の紙だった

「最近出来た遊園地亜夜にゃんの誕生日もかねて行かない？」

実は自分がすごく行きたく、亜夜の誕生日という祝い事としていきたがっているのが目を見てわかった

なぜならキラキラしているものすごく期待のまなざしをしているからである……

「ああ、近くに来たとかいってたなあ、まあ楽しそうだし俺はいいぞ」

「俺も、楽しそうだからいいよ」

二人ともOKを出すと、うれしそうにやったと歓喜する瑞希の聲が、屋上に響いた

残りの授業も終わり放課後になると、今まで静かだった教室から昼休みのような賑わいが戻っていた

11月に入って、もうすぐ文化祭という行事で学生のテンションがかなり上がる時期だ

光鷹高校はこういった行事に専念するので、2日間の文化祭はテレビでも放送されるくらい『祭り』である

亜夜と樹のクラスの出し物は定番といえば定番のコスプレ喫茶である

そしてクラスの中で唯一乗り気でないのは亜夜であった

裏方の生徒とウェイトレス役の推薦された女子に分かれていたのだが、女子の希望によって男子数名と亜夜はウェイトレスとして接客をすることになった

家庭科などの授業でしかなじみの無い被服室で地道に作業をしている亜夜と、先生が居ないことをいいことに色々あさっている樹がいた

「亜夜、しょうがねえよ、かわいいから・・・」

横にいる樹も気遣っていったつもりだが、無意識的に『かわいい』といってしまったことに気がついてはいなかった

なので横の亜夜の頬が少し赤くなっていることに気がついたときに

なんでだ？と思っていた

「にしても俺はやることねえなあ」

さつきから何処から取り出したかわからないゴムボールを投げたいして遊んでいるとため息混じりにつぶやいた

樹がやる仕事は教室の模様替えなのだが人数が多いという理由ではみ出してしまったらしい

「それならこれ手伝え、一人じゃ疲れるからさあ」

樹と似たようにため息ではないが息を吐くと、両手で持っていた服と裁縫道具を樹にした

渡したのは今回のコスプレ喫茶できる衣装だ、だが数名の男子生徒はもうすでに決まっているが、亜夜のコスプレ衣装はまだ決まっていないく、さらにほぼ90パーセントの確立で女装しなければならぬ、本当は女装ではないが

「俺は無理だよ、裁縫とか指に刺さる」

笑い混じりに服と裁縫道具を返す樹、はじめからやらせる気の無かった亜夜は少し取り合ってやろうと思って渡しただけであった

「ふう、今日はコンだけでいいかな？」

「おお・・・唯の布が此処まで行くとは・・・」

樹は亜夜が作った衣装を見ながら賞賛した

亜夜は裁縫が得意であるから裁縫の担当になっているが、ほかの生徒も5、6人いるにもかかわらず全くの素人、故に一人で衣装担当の仕事をしているのだ

そんな亜夜の作業がひと段落つくと、二人は帰るために被服室の鍵をもつと、職員室に向かつていった

「あ、瑞希も帰り？」

被服室を出てすぐの階段で瑞希を発見した亜夜は声をかけた

階段を下りようとした瑞希は慣れた声を聞いて振り返ると、あわてた様子で口を開けた

「劇の準備が大変だからまだ終わらないんだよ、寂しいけど先に帰ってて〜」

早口でそうゆくと、瑞希は一段飛ばしで風のように階段を下りていった

「あいつも忙しいみたいだし、帰るか？」

「そうだね、かえろっか」

職員室経由で玄関まで行くと、冬がだんだんと近づいてきているのを肌寒さで感じながら家路をたどった

69話（後書き）

今年最後の投稿ですねえ！

皆さん今年はありがとうございました、そして来年もまた読んでくれるとうれしいです^^

それでは、また来年です

70話(前書き)

a happy new year!!

皆さんあけましておめでとつです！

私の家の周りはすでに雪が積もり外に出るとまじガクブル状態です

罰ゲームで雪にダイブって・・・皆さんはやめときましよう風邪ひきますよ、現在進行形で私は引いています(笑)

それでは今年一年もよろしく願いします!!

70話

「ぶくぶくぶく・・・」

お湯の張った浴槽に口までいれて、肺の空気を吐き出す亜夜

（はああああ、いまさらだけど懺悔したい、何で瑞希に言ったんだろお・・・）

脳内では後悔はしているものの、大きな悩み事をすっきりできていともおもっているから、なんともいえないのが本音

「はあ・・・」

すっきりと浴槽から上がり、シャワーをだすと、亜夜はふと鏡に視線をやった

男の時とは違い膨らんだ胸、細い腰

そして数ヶ月前までは存在していた証はもう跡形もなくなってしまっている

（前は少しくらいドキドキしたのにな、なれって怖いなあ）

初めて風呂に入った時はそれはもう緊張しまくりだったのに、今では何も抵抗は無くなっている自分が少し怖く感じてしまう

もう一度ため息をつく、シャンプーの入った容器に手を伸ばして中身を少量取ると、シャンプーをしはじめた

『もうすぐだ、あと少しで………あと少しで

がる』

・ 夜空の月の真下には、ラヴィスが街を見下ろすようにたっていた・

土曜日の昼過ぎ、亜夜は毎週の日課であるバイトに来ていた

「亜夜ちゃん、終わった後暇かい？」

関西弁で話しかけてきた友人は振り返らずともわかったので、亜夜は背を向けたまま「なんですかあ？」と返した

小さな体で時折一つにまとめた髪がなびくように動きながらテープルを一生懸命に拭いてる姿をみながら和弘は続けた

「いやなあ、スイーツの材料が多く来てなあ、あまるのはもったいないからなんか作ってみ？」

和弘の言葉で瞳をぎらつかせて、数メートル後ろに居る和弘のもとまで一瞬で振り返り近づき期待のまなざしを送った

「やりたいですっ！」

(即答かい、まあそこがかわいいとこやけどなあ)

手に持った布きんを握りしめて、やや背伸びをした亜夜は、和弘にとっては一種の萌え要素でしかなかった

それを遠巻きに見ている真央も全く同じことを考え、和んでいた

余談だが近くの席に座っていた女性のお客も和んでいる

「それじゃあ、また終わったら声かけてえなあ」

和弘が言葉を言い終わる前にもものすごい勢いで手を動かし、てきぱきと仕事をこなしていった

「・・・ハハ、かわええなあ」

「私も同感、かわいいわあ」

口を猫のようにして関西弁をしゃべる和弘と、いつのまにかその横にいた真央は亜夜を見て二人して和んでいた

・・・訂正、亜夜の周りにいたお客さんもだ

73話

「　　」

電車の中で人がそこそこいるのにそんな事はしらないと言わんばかりで、亜夜はご機嫌よさそうに鼻歌を歌っていた

そして一つに結んだポニーテールは電車が揺れるたびに一緒に揺れて、横にいた樹の視線を誘った

（にしても最近亜夜女装が多いよな、・・・まあ母さんは『体に合った服はいいっ！』とはいつてたけど

あれは本人の趣味じゃねえのか？、ん、っーか亜夜の場合女装って言うのか？？）

女の自分を嫌がっていた数ヶ月前の亜夜と今日の前に居るご機嫌な亜夜を照らし合わせて、鈍感な樹も亜夜の変化に気がついた

そもそも亜夜の機嫌がいいのは2時間前にさかのぼる

（二時間前）

携帯の着信で目を覚ました亜夜は、画面の時間と名前を見ながらこんな朝早くから何だと思いなから電話に出た

『あやにゃんっ!』

いきなりの叫び声にも似た瑞希の声で、亜夜の脳は完全に覚醒した

「っっ、いきなり叫ぶなっ!」

右手で持った携帯を左にもちかえ、さらに開いた右手でもろに叫び声を浴びた耳を押さえて怒鳴った

『ごめん、で早速本題だけど〜』

「切り替えはやつ」

瑞希は謝罪を心のこもっていないごめんの速攻の一言で終わらせると、亜夜のツッコミを無視して話し始めた

内容はあと一週間まで迫った文化祭の練習に行かなければならないということではいけない、との事であった

「だから亜夜にゃん、私の分まで楽しんできて〜(泣)」

遊園地に行くという話は今日ぐらいしかいける日が無い亜夜は瑞希の言葉で樹と『二人』で行くことになった

(・・・って言うことはこれは樹とデート・・・みたいな事じゃないの? 樹と・・・デートノノノ)

「デートだからって浮かれちゃダメだよ〜(ムフフ)」

「っな！、何言ってるんだよっ！」

瑞希は亜夜の思考をどうやってか読み取ったらしく、的確なツッコミを入れた

顔を真っ赤にして携帯を切ると亜夜は、自分の赤くなった頬を両手で触って熱を感じると口を開けた

「・・・浮かれるわけ・・・あるだろ」

自分で言った言葉が恥ずかしかったのか、亜夜はさらにこれ異常なくらい顔を真っ赤にして部屋を出て行った

73話（後書き）

新年早々熱が出ました orz

ヤッパリ積もった雪にダイブがダメでしたね（笑）

受験も近いというのに熱出して勉強できないですし 『じゃあ投稿するなよ』というつつこみはだめですよ、重々承知ですからw

それでは皆さんは病気に気をつけてくださいね、特に受験生は頑張れっ！（特に自分）

74話

「亜夜、ほら降りるぞ」

目的地の駅に着いたらしく、亜夜は樹の声に反応して電車から降りたのだがウキウキした気分で見えていなかったため、休日の人ごみで樹を見失ってしまった

（あれ、きき間違いで降りた？・・・でも駅の名前はあってるし・・・見失ったあ・・・）

前後左右何処を見ても見当たらないので聞き間違いで間違えて降りたのか心配になってきた亜夜だが、駅の名前を見てもちゃんと遊園地の近くの駅だったので戸惑い始めた

キヨロキヨロとあたりを見渡す亜夜ははたから見れば迷子予備軍であつた

「亜夜、なに迷子になってんだよ」

すぐに人ごみを掻き分けて出てきた樹は亜夜の頭に手を置きそついうと、行くぞと一言言つて先に進んでいった

今度は迷子にならないように亜夜は恥ずかしながらも樹の服のはしをつかんで後についていった

「さて、うおゝ大きいなああの観覧車・・・」

駅を出てすぐ目に入った巨大な観覧車に圧巻する樹

大きさは国内でもトップ3に入る大きさで、夜になると派手なイルミネーションが光るといふことでカップルにも人気が出ているという
一方亜夜は駅同様に遊園地に続く道も人がものすごく多い状況で、また迷子になりそうだなと思いつながら、つかんでいる服のはしをよりいつそう強く握った

「学生二人お願いします」

樹が二人分のフリーパスを頼むと亜夜はサイフを取り出そうと鞆をあさる

「一応今日はお前の祝いなんだからおごるよ」

その行動をみた樹は亜夜がサイフを取り出す前にお金を払いフリーパスを受け取り、一枚亜夜に渡した

そのまま人ごみにながれて遊園地の中に入る二人であった

「なんか、すごいね・・・」

入って早々亜夜は正直な感想を口に、樹はわざと口を開いて目を細めている

何がすごいといえは大きさ、外からもわかるほどドでかく広いのでかなり大きいとは思っていたがそれをしのぐほどの大きさに驚いたのだ

入り口付近のパンフレットを見て説明文に目を通せば東京ドーム5つ半分と書いてあった

(・・・良くそんな敷地が合ったよな・・・)

「って、来たのはいいけど何処に行く？」

樹は亜夜の持つているパンフレットを見ようとして顔を近づけた

あまりにも近かったので内心ドキドキの亜夜は「こ、これっ！」と適当に地図を指差した

「お、俺ジェットコースター乗りたかったんだよなあ〜遊園地とか超久々だから」

ドキドキしている亜夜を差し置いて一人嬉しそうに目的地が何処にあるか地図を見ながら方角を確かめる

また顔が近くて心臓が高鳴り始めると思ったが、亜夜はそれよりも自分がよく見ずに指したことを後悔した

「あの、いつか割と近くだな、じゃ行くかつー!!」・・・うん」

樹にあることを言おうとした亜夜だがテンションがあがっている樹には聞こえなかった

そのまま手を引かれるまま樹についていった亜夜

嬉しそうに目的地に向かう樹を見るといやだといえないので『ジエットコースターが怖い』亜夜は嬉しそうな樹に死刑宣告されたのだ
った

お知らせなのです

小説をご覧になってくださっている皆様

私u p r委員長は中学3年生です

故に!!

もうそろそろ受験ですね……(鬱)

そして今日模試的な何かで最悪な点をたたき出しました……嗚呼

まあいわなくてもわかる人も居るでしょうが

約二ヶ月弱の間ですが受験なので暫く投稿を控えたいと思います

私はそれでも最低2週に一回の投稿、できれば週一の投稿をしたい
と思っていますので、どうぞ私の駄文をよんでくださいますせ!!

それとずうずうしいですが、感想や批判、誤字脱字報告はなるべく
してくれると嬉しいです!!

それでは、また!!

75話

「じゃ、次のかたどーぞ」

係りの人の声でジェットコースターに乗り始める二人

休日の賑わいのおかげで死刑宣告が40分ほど伸びたがただ時間が遅れただけで、亜夜は死地へ行くことに変わりはなかった

(あう・・・なんかもう吐きそう・・・)

乗っただけですでに吐き気を催した亜夜はしょうがなく意を決して安全レバーを下げ、頬を軽く叩く

最初はゆっくりと、徐々に速さを増していくジェットコースターですでに序盤から悲鳴がちらほらと聞こえてくるので亜夜も便乗して声を上げた

そしてクライマックス、カタカタとゆっくりジェットコースターが空に向かう

太陽がまぶしく暫く目を瞑る亜夜だが、すぐに重力のかかる方向が変わったため恐る恐る目を開けた

「何も無い？」

つい声に出し、現状を確認する亜夜

目の前は遠くの青空と雲、そして冷たい風が吹き黒い髪がちらほらと視界に入ってくる

頭のいい亜夜は、少しずつ下に傾いて先のレールの見えないジエツトコースタ「結構危険な高さから落ちそうな予感、というか決定事項という方程式が一瞬で頭に浮かんだ

「ひゃ・・・」

小さな口を開けてボソツとつぶやき、亜夜はほぼ90度になりかけてやっと先のレールが見え出したところで瞳から少量の涙がこぼれ

「ひにゃあああああ！！！！（涙目）」

遊園地に亜夜の絶叫が木霊した・・・

「亜夜大丈夫か？」

「大丈夫・・・じゃないかも」

ジェットコースターを降りてすぐに満喫した様子 of 樹は一変、亜夜を見た瞬間心配しだしてようやく亜夜がジェットコースターが苦手なことに気がついた

(ジェットコースター苦手だったとは・・・やべえ、そういえば行く時もなんかいってた様な気がする)

樹は両手で頭をかかえて失敗したあゝと反省している

一方亜夜は乗り物酔いをしたようで口元を押さえて下を向いている

「あ、俺なんか飲み物でも買ってくるから何がいい？」

亜夜はいまだに気持ちわるいので飲み物すら飲みたくも無いがせっかくのご好意を無駄にしないため飲めそうなお茶を頼んだ

走り去っていく樹の背中を見ながら消えていくのを確認すると、亜夜は再び下を向いた

「はあゝ、せっかくのデートなのに・・・」

落ち込みながらため息混じりで言うと、秋の終わり又は冬のはじまりの寒さに身を震わせて体を丸めた

「・・・デートじゃないし／＼」

無意識に言ったこととはいえ頬を赤くして恥ずかしくなる亜夜

赤くなった頬を手で押さえ熱を感じると、はあと最近多いなと思いつつ息を一つついた

「くそおゝ失敗した、マジ失敗したなあゝ」

自動販売機にお金を入れながら樹は先ほどの事を悔やんでいた

「もうちょっと早く気づけばな・・・」

ため息まじりな台詞を言うと、樹は下を向きながらも指を自販機のボタンに正確に押していく

ガタンとペットボトルが出てきて樹はそれを取り出すと来た道に足を返した

「まったくもお、あの二人はあ」

それを遠巻きに見ていたの『練習に行つて来れなくなった』はずの瑞希だった

（むう、せつかく二人っきりのシュチュ作ってあげたのにこれじゃあ無駄になっちゃうよ）

実を言うとこの遊園地に来たいと言い出したところから瑞希の計画は始まっていたのだ

亜夜が誕生日にもものがほしくないのは最初からわかっていたのでそれを利用して、樹と二人のシュチュエーションを作り出した、というわけである

だが実際は瑞希の望む『結ばれて幸せ』という事になりそうになるので心配して影でこっそりと見守っているのだ

「って、考えてないで私も亜夜にやんとこ行かないと」

樹が視界に入っていないことに気づくとあわてて後を追いついたために走り出した瑞希だった

75話（後書き）

いやあ〜来週によいよ最初の受験ですにや〜

ということでゲストがくると聞いていますが・・・

亜夜「やつほあ〜、作者」

作者「おお！、あやにゃん！！」

あやにゃんだとは、感激・・・かわゆすなあ・・・

亜夜「あやにゃん言うな！・・・って、そんなこと言いに来たんじやなくて」

樹「作者〜、受験頑張れよ〜、って言いに来たんだぞ」

作者「おお！、いつちゃんまで！！」

樹「・・・^^」

もしかして母以外にいつちゃんといわれるの嫌？

え、私そんな設定した覚えはないんだけど？？

でも明らかに怒ってるよね・・・

「シユバツ」「ザシユウ」「ゴメンナサイっ」

作者ジャンピング土下座中

亜夜&mp・樹「うわあ、無駄につまいな」

作者「この前暇だった時に練習したもん！」

亜夜&mp・樹「じゃあ勉強しろお！！」

瑞希「おっと、此処であやちゃんといつきのダブルドロップキック炸裂だ。」

ということとで作者は負傷しましたので此処からはみんなのアイドル瑞希たんが進行をしますっ
「三」

亜夜「はあ……（作者が高校うからなかったら俺たちどうなんの？……これじゃあ樹と……／／／）」

樹「ん？おい亜夜顔赤いけどどおした？」

瑞希「樹、あやちゃんは妄想中だから声かけないの」

樹「へ、あ、おうっ？」

瑞希「それじゃあ皆さん、作者を応援してね、亜夜にちゃんと樹のためにも（ムフフフ）」

樹「おい、それはどういう……って、その笑みなに??怖っ!?!?」

瑞希「じゃあねえ（グフフフフフフ）」

樹「だからその笑み怖いつーの!?!?」

76話

樹は亜夜のいるベンチに着くと、下を向いていまだに気づいていない亜夜のほっぺに熱いペットボトルを当てた

「っひゃ・・・」

びっくりして声を出した亜夜は樹を上目で見上げ、あわてたように下を向いて無言でお茶を手を取った

「はは、かわいい反応だな」

冗談交じりに樹は言い亜夜の隣に座ると、少しだが亜夜の頬は赤くなって恥ずかしそうな表情が見えた

「どした？」

そんな亜夜の表情は気分がまだ悪いのかと思いい心配して声をかけた樹

亜夜は返事はしないもののまとめた髪を揺らしながらフルフルと首を横にふった

(普通にかわいいとか言うなよお／＼)

樹の言葉で照れていた

「そか、じゃあもう大丈夫か？」

樹が尋ねると、亜夜はもう大丈夫と首を縦に振る

「うし、んじゃ楽しむぞ！」

とかるく大声をだして亜夜にむけて手を差し伸べる

意味がよくわからなくて首をかしげる亜夜

「ほら、行くぞ」

亜夜は突然の樹の行動になすがままだった

急に手をとって、手をつないだのだ

恥ずかしい感情がこみ上げてくるが、同時に樹のぬくもりを感じて嬉しさもこみ上げる

「また迷子になるのか？」

どうやらそういつことらしい

亜夜は思い出して顔を赤くしてもじもじする

「あう・・・あれは、その・・・」

「はは、はら行くぞ！」

樹は笑いで流して、亜夜の手を握り締めていいようになだめさせられ、先に急ぐ二人の姿を瑞希は微笑みしっかりと見ていた

「やるじゃん、いつきい」

無邪気の子供みたいに笑った瑞希だった

その後6時間以上遊び続けた二人だった

「あゝ、あそんだあゝ」

背伸びをして、樹が言つと亜夜も同じく口を開けた

「そうだねえ」

亜夜の中ではまだ1時間ほどしか遊んでいないように感じている

それほどまでに楽しかったが、時計と空は確実に時間を告げている

「次、暗いし最後にしようか」

亜夜の言葉に樹はうなづくと言で指を刺す

その先にあるのは、観覧車

しかも馬鹿みたいにでかい

(でもまあ、最後だし)

「乗ろっか！」

今度は亜夜が樹の手を引っ張っていき、観覧車に向かった

満面の笑みであと少しの今日という日を楽しもう

そう考えたのだ

76話（後書き）

亜夜「皆さん！今週の火曜、作者の受験でした！」

樹「そして案の定やらかした作者！！」

瑞希「亜夜にやんと樹の運命は……いかに！！」

t o b e c o n t i n u e d ……

作者「いやいや、やらかしてないし、てか t o b e c o n t i n u e d のつかい方うまい」

亜・樹・瑞「「「いやいや、そもそも空き時間に小説読んでるのが間違ってる、あとありがとう」「」「」

作者「そ、それは禁書目録の二次創作かいてるから……その……

」

亜夜「いくら本命の高校じゃないからって真面目に受けないと悪いぞ」

樹「亜夜なら真面目に受けなくても通りそうだけだな」

「厨二病がつ」「ぐはあっ！」

字の分「こうして漆黒の殲滅者は永遠に葬られたとち…」

happy end?

亜・樹・瑞」「いせ、ハッピーエンドじゃないし」「」

77話

ついでみてほかの乗り物同様に行列でもできているのかと思っていた二人だが、行列はさほどおおくなく思いのほかすいていた

15分程度待つと二人の番が来て、いよいよ最後だなあ、と亜夜はこうしていられる嬉しさもあるが、最後だと思つとつい寂しく思つたから樹の手をつよく握つた

それから15分程度、樹と他愛もない話を話し合い、あの時はこうだったね、という風に少し間の日々を話した

「結構綺麗だね」

ふと、亜夜が外の景色に目を向けるとすでに観覧車は3分の1ほどの一に来ていた

外はすでに暗く、イルミネーションが輝き、幻想的な様子を表していた

「・・・そだな」

樹も亜夜と同じように言葉を言った

だがそれは外の景色を見てではなく、亜夜を見ていった言葉

「あ、あのジェットコースター綺麗だね」

遊園地に来て最初に乗った乗り物を指差して樹を見る

じっと自分を見ている、そう気がついた

それから数秒とも数分ともいえるような長い沈黙

「樹はさ……俺のことどう思う？」

亜夜はいきなり核心をついてきた

そして樹は今まであわせていた視線を下にはずした

「……大事な親友だ」

顔を上げて樹はそう答えた

「そっか……」

今度は亜夜が視線をそらした

だが樹の返事は終わっていない、続けた

「そう思ってた……けど、俺は、俺はお前が好きになった……」

亜夜は視線を戻して樹を見る、耳を疑ったが樹の真剣な様子を見る限り嘘ではないと感じた

そしてまだ、樹の言葉は続く

「こんなこと親友としてだめかも知れねえけど……俺は会った時からずっと、お前が女だったら、とか思ってた

それで急に亜夜が女になって、そんな時はすっげえ嬉しかった

でも、お前が悲しんでるの見て、ああ、俺は何喜んでんだって思ってたさ
「

その後も樹は言葉を続けていたが、亜夜の耳には入っていないなく、本人は口を開けてほうけていた

（え、俺がすきななの？男なのに？いや、女だけでも・・・俺も、樹を・・・樹を好きになっても
）

戸惑いや葛藤が亜夜の頭の中で飛び交う

「ごめんな、お前は苦しんでるっていうのに・・・」

その様子を見た樹は乾いた笑い声を上げて謝ってきた

亜夜はその一言で決心がついた、きつと泣くほど、樹も苦しんだ

なのにこんなに自分のことを思ってくれている樹が、謝るなんておかしい

だから

「・・・そうだよ、親友として失格だよ」

樹は悲しそうに下を向き、落ち込んだ

そんな樹の顔にてをやって正面を見させ、そつと顔を樹に近づける

亜夜

樹は状況を飲み込めず固まっている

鼻と鼻がくっつきそうな距離までくると亜夜は口を開けた

「恋人としては、合格だよ」

頬を赤くしながら、唇を重ねる

初めての、ほんの数秒のキス

「ファーストキスなんだよ、責任とってよ／＼」

また亜夜は頬を赤くた

「俺もだよ」

今度は樹からの口づけ、しかも舌まで入れてのディープ

溶けそうでシビレそうな感覚に陥って、体が火照る

数分という長い間、お互いは抱き合いながら舌を絡めた

このまま観覧車が一周するまで続きそうなほどに

だがそれは杞憂にすぎなかった

ガタンと観覧車が大きく揺れ、明かりが消えた

外の景色も同様、鮮やかなイルミネーションがすべて消えていた

二人はその揺れた衝撃でおでこ同士を強くぶつけ、床に倒れこんだ

「いつてえ……大丈夫か亜夜？」

「う、うん……」

頭を押さえて目をゆっくりと開けた亜夜が凍りついた

今の二人の体勢は亜夜が仰向けで倒れこんで、樹がその上にのしかかったような感じ。そのまま樹がガオーとやれるような状況

「あ、……」

樹も状況を把握して顔を少し赤くした

そしてさらに数分の時が流れていった

「樹おもい」

亜夜が苦しいといい、やっと気まずい状況が終わり樹が外の様子を確認する

先ほどの光景とは違い真っ暗な景色、下に人間が居るとかもわからない

「停電みたいなの？」

「たぶん」

亜夜も起き上がって確認すると、樹の言葉と同じ結論にたどり着いた
結構落ち着いている二人はとりあえず座るのだが、10数秒前と違
いかなり気まづくなっている

別の話題で声をかけようか、と考える樹

その時うつすらと観覧車の電気がついた

外の様子も確認してみると、徐々に明るさを取り戻していた

『まことに申し訳ありませんでした!!』

今回は電気の故障で停電してしまいました

今は予備電力で動いていますが、もうしわけありませんが今日はこ
れにて営業をやめにします

なお後日改めて、今日のフリーパスを持ってくだされば無料で入園
できますので

・・・それと観覧車にいたりましては、30分ほどお待ちください

どもう、ご不便をいたしましたすみませんでした!!』

すごい謝罪だ、まるで土下座をするような・・・

実際に土下座しながらしているかもしれない

「・・・って30分?!」

亜夜はもう一度係員の言葉を思い出したがちゃんと『30分ほどお待ちください』といていた

(え、いや二人つきりだから嬉しいけど・・・ってそうじゃなくて
／／／)

「30分もか・・・確かになげえよな」

樹も同じ感想を抱いていた、というか二人の考えることがさっきからほとんど同じだ

77話（後書き）

作者「ついに恋人宣言しちゃったね〜」

瑞希「いや〜、まさか亜夜にゃんからとはねえ」

作者「ところで瑞希、男同士？の禁断の恋ってなんか良くない？」

瑞希「ん〜、私は言いと思う、てか相手が亜夜にゃんなら100パーセントいい」

作者「カワイイは正義の法則だね」

瑞希「うん!〜!」

作者「今日も塾でさ、その話してたんだよね!、同性愛もいいじゃないのノリで」

瑞希「……………（塾で何はなしてんだろ、この人）」

作者「……………言っとくけど3次元じゃないよ、2次元的な話だよ?」

瑞希「いや、それでも塾でその話するのはおかしいよ?」

作者「いや〜、その相手会った瞬間トイレに連れ込む野郎だからいいと思うて」

瑞希「相手も相手だなっ!」

作者「ふはははwww」

瑞希「とうかさ、今日はこんな話をしにきたんじゃないやなくておめでとを言いに来たんだよ」

作者「おめでと・・・？」

瑞希「あんた受験合格したの忘れた？」

作者「はっ、確かに！！」

瑞希「・・・こんな作者じゃ二人（亜夜・樹）の未来が心配だよ」

作者「大丈夫大丈夫、ハッピーエンドで終わると思うよ」

瑞希「まあ、それならいいけど」

作者「そいえば二人は？」

瑞希「観覧車でいちゃついでる」

作者「まじでっ！！、これは見に行くしか！！」

瑞希「させるわけないでしょ！！」

作者「ぎにゃああああああああ」

瑞希「七瀬流天咆哮（という名のパイルドライバー）」

作者「（あれ、瑞希ってこんな強い設定だったけ？）」

瑞希「と、言うわけで今週のおまけは終わり、え？作者は大丈夫か
つて？」

大丈夫だよ、リアルで3階から落ちても平気な人だからww」

作者「いや・・・さすが・・・にその時は、打撲した・・・」

瑞希「普通骨折はするよ、運悪かったら死ぬよ！、てかもう寝てて
！！！！」

地の分「おっと、ここで過剰なる蹴りが入りました」

瑞希「あれ、脈が無い？・・・作者、おい作者？」

返事が無い唯の屍のようだ

瑞希「……………やヴぁい、作者が死ぬ」

78話

つい差し出した右手には、亜夜の左手が絡んでいた

自然と手が出て、まるで『会ったび』に手をつないでいたような感覚だったから不思議じゃなかった

その後はめいいっぱい遊んで、遊んで遊びまくって疲れた

んで最後にしようかな〜と思って観覧車に入ったんだけどこれがまた・・・なんとやら

中に入ってはしゃぐ亜夜みて、こっ・・・可愛いとか愛おしいとか思ってたさ

んで見とれてたら「樹はさ・・・俺のことどう思う?」「だぞ??!」

いきなりこんなこと言って迷ったよ・・・んでとっさに出たのが

「・・・大事な親友」

本当にこれでいいのか？って誰かにいわれたような気がした

いいわけねえつつこの・・・

一目ぼれ、たぶん男ってわかってた時から好きだった

おかしいとはもちろん思ってる、でもこん時だけは同性愛者とかの
気持ち理解できそう

「そう思ってた・・・けど、俺は、俺はお前が好きになった・・・」

急いで訂正した、それで思ってたこと全部言ってやった

すっきりした、開放感とか重荷がなくなったとかそんな感じ

でも亜夜の顔を見てつかの間の開放感も終わった

だよな・・・男同士って・・・

「ごめんな、お前は苦しんでるっていうのに・・・」

謝罪、言った後すぐになんて最低か？

でも謝らねえときがすまないからかんべんな

ハハってついこの世の終わりみたいな笑い声を上げてた

突然亜夜は立ち上がって、俺の目の前まで来た

ピンタかなんかするのかな、最低、とかいって

「・・・そうだよ、親友として失格だよ」

樹の心に深く刺さった言葉は一度さしたらもうぬけそくに無いものだった

ふられたって言うやつかな・・・ハハ、当然だろうけどな

落ち込んで下を向いき、唇をかみ締めた

そんな俺に亜夜は手をさしのばした

顔が上げられると亜夜との距離が近い・・亜夜の開いた口から暖かな息があたる

「恋人としては、合格だよ」

瞬間頭の中が真っ白になってしまった

わずか数秒が何時間も長く感じた

唇から離れていく感覚で、ようやく自分がキスをしたんだなと理解した

「ファーストキスなんだよ、責任とってよ／＼／」

顔を赤くしながら亜夜は言った

俺の理性が落ちた

「俺もだよ」

唇を再度重ねて、絡めたあつた

もずっとこのままでもいいと思った

俺がずっと求めていたこの時を

目を瞑って行為を受ける亜夜はとてもかわいかった

でもそれもつかの間の幸せというやつか、急に観覧車が揺れた

ゴチンという風におでこ同士がぶつかり、今度は理性ではなく体が落ちた

「いつてえ……大丈夫か亜夜？」

「う、うん……／＼／＼」

あ、……この体勢はいけるパターンのやつやっ！

「あ……//」

って何考えてんだよ俺、んなことするより状況把握！

とりあえず暗いことに感謝した、俺の息子が自己主張してゲフンゲフン……なんでもない

「樹おもい」

あ、やべ、とりあえずどごうか

それと外の状況確認……くらいね、停電っぼいな

「停電みたいな？」

「たぶん」

亜夜も外の様子を見て同じように答えた

数秒して園内放送っぼいのが投げられた後に亜夜が驚きを口にしてた

「・・・って30分?!」

「30分もか・・・確かなげえよな」

まあ俺は亜夜と一緒にだからいいけど

やべ、全部いうところだった

78話(後書き)

瑞希「……」

作者「……」

瑞希「いや、悪気は無いのだよ……作者もようでしょ？」

作者「ええ、そうですね、ええい樹め、あそこで獣に、いや猛獣になつていればもつとおもs」だまらっしやーい、この淫獣がっ「グヘッ!!!」

瑞希「確かにあのシユチュなら私もこうふんゲフンゲフン……
……興奮してたかも
しれないけど!!!」

作者「訂正しようと思ったけど、どう訂正しようかわかんなかった
んだね(笑)」

瑞希「しょうがないもん、亜夜にゃんかわいいもんっ!!!」

作者「はいはい……フツ(内心大爆笑)」

瑞希「うわぁー!ーん、亜夜にゃー!ーん、作者如きがいじめ
る~~~~~(逃走)」

作者「如きつて、一応ここでは神みたいなものですよっ!」

地の文「神(笑)だけどねwww」

作者「というか前々からなぜ地の文係？真央さん？」

真央「暇？てか亜夜ちゃん最近バイト少ないのよね」

作者「亜夜にゃんパワー補充ですね、わかります」

真央「そゆこと、じゃ私は亜夜ちゃんに会いに行ってくるZ E
！！」

作者「じゃね、………ということで、次回予告的になっ！！」

「次回の罪罰はラヴィスのお話になっております、もしかしたらもしかすると亜夜にゃんとの関係がっ！！ということになるかもです！！」

「それではみなさんまた今度」

jealousy

「.....」

茜色の太陽を背に、ラヴィスは暗くなり始めた空に立っていた

風が吹くたびになびく長めの髪で視界が時折遮断されるが、払うことなくある一部を見ている

視線の先は、亜夜と樹の入っている観覧車の中に集中していた

「っ!.....、」

距離にして1kmほどの距離があるというのにラヴィスはしっかりと見た

二人が急にキスをし、そしてもう一度

最初は短く、恥じらいのある、二度目は
樹からのほうは味を
確かめるように深く、長くした

そして1分ほどたってもまだ離さないのをラヴィスは無表情という
『嘘の仮面』をつけて眺めていた

「……………」

今まで動かさなかった右腕をそつとあげて中指と親指の先を合わせる

パチンという音が空に鳴り、不気味なほど響いた

瞬間周囲の明かりがいつせいに消え始めて、二人のいる遊園地も例外ではなく機能を停止した

そして右手を下げ、もう一度二人に視線を戻す

重なり合ったまま暫く動かなかったが、急に樹がどいた

「……………くそ」

聞こえるか聞こえない声でつぶやく、だが周りに聞く者なんか誰もいないのでそのつぶやきは空に消えていった

暫く二人の様子を見ていたラヴィス、すでに先ほどのように明るくは無く街の明かりが消えて暗さがいつそう引き立つ

「嫉妬か？」

ラヴィスの真後ろから声が聞こえる

ラヴィスは後ろにいるものがわかっているのか、確認はせずに口を開けて声を放つ

「いや」

少しの間を空けてラヴィスは左手で空を切りながら、さらに言葉を続けた

「早すぎた・・・そう、早すぎるだけだ・・・きつと」

そのまま空間を切つてできた隙間に入ってラヴィスはその場から逃げるように、つむいだ最後のほうはまるで自分に言い聞かせるように言った

レオはラヴィスが入っていった空間を暫く見て、方向を変えた

先ほどラヴィスが見ていた二人の乗っている観覧車を見て眉を顰めると口を開けた

「・・・世界の抑止力に、いつ気づかれるか・・・できれば見つからないことを祈るが・・・」

もしもばれてもそれまで幸せに悔いの無いように生きてくれ、と心の中でつむいだ

そして目を瞑り、数秒後目を開けて再び

「
少なからずの愛をラヴィスの『姉』に与えてくれ。」

そう願うように言いながらレオは空に溶け込んでいった

jealousy (後書き)

作者「ラヴィス、ツンデレ疑惑・・・」

レオ「いや、疑惑じゃなくてツンデレ」

作者「だよな」

ラヴィス「・・・・・・・・」

作者「ラヴィスさん、その無言の視線が痛い^^;(汗」

レオ「俺に関しては、リアルに痛い攻撃が・・・グハッ!」

あ、レオさん剣で貫かれてやがるw

まあコレおまけだから死ぬことは無いでしょう(笑)

ラヴィス「次は君だよ?」

作者「ヤンデレだったあああああああ!!」

ラヴィス「キエロ、エクスカリバー」

作者「ちょ、それ作品がつて、ぎにゃあああああああ!!」

あ、そつだおまけだから死ぬことh(ry

80話

「樹、それとって」

学校の裁縫室、亜夜は樹の近くにおいてある布を指差して言う

言われた樹は机にばら撒かれた布の軍団を見て「どれ？」と返した

「その赤いの」

樹は赤赤あか、と口ずさみながら亜夜が手を伸ばして届くか届かないくらいの距離に赤い布をとったわたした

422

「にしても、今日中で仕上げないといけねんだろ？終わるか？」

「ん、ギリかな、別に今日中じゃなくて明日中でもいいんだけど・・・」

着合わせがあるんだよ・・・、と小声で続け、樹は苦笑いした

二人が話していることは文化祭のことである

亜夜は理不尽なことに『衣装作り兼実際に着て接客しましょう係りに決まっている』

なので今日こうしてあさってまで迫っている文化祭にむけて衣装を作っているのである

「ハハ、まあなんか・・頑張れ？」

とりあえずクラスの女生徒が今日『篠屋君のメイド・・ムフフ』や、『やっぱ男の娘よね』等、しまいには『明日は撮影会っミ』と言い出したことを覚えている樹は顔をひくつかせながら亜夜に同情した

一方件の亜夜は去年の文化祭もこのような感じだったな、と涙目に思い出していた

そんなこんなで文化祭前日の夕方、最後の準備なので遅い時間だというのに生徒の大半は学校に残っていた

光鷹高校はこういう行事に積極的なので校長みずから『楽しいならいいよ』のノリで何でも許可している、しかも校則も少なくなかったの二つ

『頑張る』『楽しめ』、と学生手帳の最初の表紙のようなところに書いてあるそれだけである

というより校則というのにはかけ離れている

その性が不良みたいのが増えるのでは？と疑問に思うかもしれないがそういうことかそういう人物は一人も出ていないことでも有名である

「いや、篠屋の裁縫技術は半端ないな」

机に無造作に置かれた亜夜の作った衣装を褒め称えるのは『衣装作り兼実際に着て接客しましょう係り』にした張本人の学級委員の阿あ南孝次である

本人曰く、中学三年の時に同じクラスだったこともあり亜夜の裁縫のうまさを知っていたからこの係りに任命したらしい

「あ、あたしコレがいつ！」「私はこれ」と次々に女生徒はコスプレ衣装を手にとっていく

3人の男子もおお、と感嘆をもらしながら、よっぽど気に入ったのかわなわなと震える手で衣装をもっている

「人数は男子3人に女子7人ね」

「チョット待つて、男子4人で女子6人だよつ！！」

「見た目や見た目、亜夜ちゃんは当然女子やで」

と、亜夜の言葉を関西弁まじりに返したのはもう一人の学級委員である小向佐奈こむかえさなという人物。一言で言うとマイペースな人といえる

「じゃ、亜夜ちゃんも着てね」

はなしをきけえええええ！！と亜夜は叫びながら男子生徒に引きずられながら教室から出て行く

それを見ていた樹と孝次は口をひくつかせながらこ愁傷様、といった具合に手を合わせた

「さ〜て、あんたらっ！急いで準備準備〜」

コスプレ組みが出て行ったのを確認すると佐奈は振り返って教室に残っている生徒に言い放った

とたん蜘蛛の子を散らすように教室内の生徒がわらわらと各自の担当する仕事をこなしていく

さすがの樹もこのときだけは仕事があつたらしく男子数人と教室の飾りつけをしていた

あたりはもうすでに真っ暗で、街頭の心細い明かりで道路が照らされている

「はあ〜、ばねそつでひやひやした・・・」

隣の友人は亜夜が女のことを知っているので亜夜が女物のコスプレ

を出てきたとき、本人同様ばれることを心配していた

このときだけは体のラインが出にくい猫耳メイド服に感謝した

中には制服のスカートなしで白のスクール水着という風なものもあり亜夜は正直作る（とはいってもスク水は買って制服は少し飾りをつけただけのもの）段階で手をつけなくなかった衣装もあった

それでも精神的に男の亜夜はクラスの全員の前で猫耳メイド服をきるのに抵抗があつて思い出すと顔が赤くなつて羞恥心がこみ上げる

「いや〜、でも似合つてて可愛いかったぞ、なんかこう、亜夜つて小動物？っぽいから」

亜夜の考えたことがわかつた樹はフォローとはいえないフォローを言つてさらに亜夜の頬を赤く染めるのだった

学校の通学路、いつもの分かれ道で二人は足を止めた

右に進めば亜夜の家、左に進めば樹の家にたどり着くこの分かれ道は二人にとって寂しい場所でもある

好きなもの同士ずっと一緒に居たいのは人間の性だろう

「んじゃ、また明日」

と笑顔で手を振って帰ろうとする樹は例外だろう・・・

そんな去ろうとした樹に亜夜は早足で迫って制服を後ろからぎゅ、と掴んだ

何だ、と思い振り返る樹

そこには顔を赤くしながらモジモジしている亜夜がいた

「えと、あの・・・キ、キス・・・あう・・・／／／」

小声でブツブツと喋っている亜夜だが1mも近くにいる樹の耳にはがながん聞こえてくる

何だこの可愛い生物は、と思いながら樹は亜夜がしてほしいだろうことを望み通りに実行した

「じゃな／＼／」

軽く重ねた後、樹は自分の顔を見られたくないのかすぐに帰ろうと家路に足を向けようとした

が、亜夜はまだ制服を掴んでいたのに気づいてはなれないことに気がついた

「その・・・もっかい／＼／」

() どうやらお姫様は一回だけでは物足りないようです・・・()

この後家に帰って風呂に入った亜夜は自分で自分のしたことに悶絶しながら湯船に張ったお湯をぱちやぱちやと叩いたのは余談である

81話

「くう、あ・・・は・・・」

部屋の明かりは消えているが、その部屋の中にいる亜夜自身はまだ寝てはいない

ベットにもぐって手を下半身に這わせ快感を楽しんでいる

しばしば、とまではいかないがある程度の頻度で亜夜は自慰を行っている

共通点といえはいいことがあった日や嫌なことがあった日

両極端だが亜夜にとっては『現実逃避』といえる

いいことがあればもっといい妄想の世界に入り込み快感を楽しむ

嫌なことがあればそのことを考えないように唯一心不乱に快感を求め

そして今日の場合は前者、いいことがあってもっと欲望に浸りたいから

「ん・・・いつ、き・・・」

甘いと息を漏らしながら思い人の名前をつぶやく

もし亜夜の考えていることがわかる人間がいたのなら、今いかにすぐく淫らな妄想を抱いているのがわかるだろう

「いつき、いつき、いつき、んあ！、ひゃ・・・いつき！」

絶頂。

暫く肩で息をすると、すうすうとそのまま寝息を立てて亜夜は眠りについた

頭の片隅に、妄想が現実になりますようにと思いながら

朝、亜夜は湿ったベットを見て昨晚した行動を思いだした

最初のころは恥ずかしさや自己嫌悪で顔を赤くさせたり蒼くさせたりもしていたが慣れとは恐ろしいものだ

またかと小さくつぶやきながら亜夜はシーツをはずして洗濯しよう

と持っており、洗濯機に突っ込んだ

「・・・さむ」

ようやく自分がズボンをはいていないことに気づき、急いで自室に行って制服に着替を手を取った

最近なれてきたなあ、と思いながら胸にさらしを巻いていく

「あれ・・・ん、」

最近になって体（のラインや格好）の事に気になりだした亜夜はきがついた

下に視線を下ろすと大きくは無いつてもりっぱな双丘がついて
いる

が、問題はその大きさ

大きくなっていったのだ

女性としては嬉しかったりもするが亜夜からしてみればそのことを隠しているのに主張しては意味が無いのでありがた迷惑だ

(でも樹は大きいほうがいいのかな?)

とはいえ大きくなって喜ぶ人がいればそれはそれでいいような気もする亜夜である

(とりあえず秋さんと相談してみても……何かされそうだけどしようがないよね、はあ)

ため息を吐いてやや大きくなった胸をさらして巻き終わると制服に身を包む

着替えが終わって階段を下りると時計に目をやり時間を確かめる

長い針が朝の7時をさしているのを見るともうそろそろかな、と思
い靴をもって玄関に行く

ちょうどそのころ玄関のチャイムがなって元親友、現彼氏の到着を
知らせた

「樹、おはよう！」

「おう！」

満面の笑みの二人はこれから毎日幸せに過ごせると思っている・・・

思うだけは自由だが、そんな理想はいとも簡単に碎かれるという
とは二人が知る由も無い

二人は気づかない

二人の背後に迫り来る苦難と絶望を

「ククク・・・、」

不気味に笑う声は生徒の朝の賑わいに溶けていった

82話

「・・・・・・・・」

二つの日記を流し目で見ながら器用に二つ同時にめくっている

途中、数ページ白紙が続くページに差し掛かって一瞬手が止まる

躊躇したが亜夜は思い切ってさらにページをめくる

短く、3行の文が書かれたページが開かれる

しかしそれは片方だけで、今まで一字一句間違えることなく、筆跡すらも同じだったもう片方の日記を片手でとじて、今座っているベットの枕の横に置く

『11月15日

今日は亜夜の誕生日

久しぶりにこの本を見つけたから書いてみちゃった』

そういえばもうすぐ誕生日だな、と思いつつ亜夜はある仮説をたてる

(もし、もしもこの両方が俺のなら・・・母さんが生きてた世界と、死んだ世界があつて・・・それで父さんは生んですぐに亡くなった行つてたから俺のいる世界は後者、だからこの日記は母さんが生きていたIFの世界のもの・・・)

深呼吸をして一拍おく

(・・・そして何らかの原因でその二つの世界が混ざつてこの日記が出てきた・・・、タブン母さんが生きてた世界では俺が女で、死んだ世界が男つてことか・・・だから体は女になつて精神は男か・・・)

少しの間を空けてそんなファンタジーなことがあるかー！、と言いながらベットに倒れる

ファンタジーじゃないと否定しても、男から女になるのはファンタジーではないのだろうか

「はあ、結局なんで女になったんだろ」

とは言っても女になったおかげですべてがマイナスになったわけではなく、嬉しい出来事もある

何より樹と付き合えるたのは紛れも無い事実なので、最初はいやでいやしょうがなかった体だが今では少なからず感謝をしている

(でも樹が好きになったのは女になったから……で……???)

ここで亜夜はふと、疑問を抱く

(あれ、そういえばそもそも樹を好きになったのは……？、あれ？？)

はたして自分は樹にいつ、恋心を抱いたのだろうか？

そんなわかりきったようで、全くわからない疑問が頭を埋め尽くす

(俺が女になった時でも、優しくしてくれた時？、いや、違う、違うそんなんじゃない、そこからじゃないような『気がする』もっと前？始めてあったとき？)

根拠の無い言葉が頭で響く

そして樹との思い出を限りなく鮮明に思い出そう亜夜は目を瞑る

不思議だ、あやふやな感じではなくはっきりと、鮮明にまるでテレビを逆再生するように記憶がよみがえる

「あれ……『私』、なんで樹と会う前から好きなの？」

自分で言った言葉で亜夜と、亜夜の周りの空気が冷たく凍りついた

第一声が、明らかに普段の亜夜とは違うものだった

(わたし……し……???)

「……………」

長い沈黙が続き、そして頬に暖かい雫が這っているのがわかる

瞬間、亜夜の脳内に莫大な『記憶』がぶつけられた

崩れたピースがつかなくなっていくように、徐々に、徐々に姿を現す

『夢』で見たのは『亜夜』としての『記憶』

『日記』は『真実』と『偽り』をつなげる『鎖』

そして女に『なった』のではなく女に『戻った』

嘘。嘘。嘘、嘘、嘘。嘘だ。嘘だ。嘘だ。

耳をふさいでハイライトが消えかかった目を瞑りながら心で念仏の
ように叫ぶ

経験したことはないはずの記憶が亜夜の脳内をかき回して、かき回
して、暴れまくり、更なる混乱を呼ぶ

瞬間ぶつつ、と糸が切れた人形のように亜夜の意識は崩れ落ちた

とある雨の日

その日はザアザアと大粒が降り注いで、車にあたり騒音になっていた

『お父さん、まだつかないの?』

雨の音に消されないように、少女はあせったように、車の運転席に座る父に言う

そんな父は目の前の車の行列を見て血が出そうなくらい強く唇をかんでいた

『くそ、こんな時に渋滞って・・・』

少女は横に座っている苦しそうな母を見た

息が上がり、痛みをこらえる姿の原因はわかっていた

『大丈夫、唯の陣痛よ・・・』

苦しいながらも、心配した目で見ている少女を気にかけて、母は頭を撫でながら言った

このとき、母は大丈夫なんてものではなかったのもわかっていた

私を生む時も、死にそうになって生んだことも知っていた

だから、少女は心配をしていたのだ

『この渋滞じゃ、回り道したほうが早いな』

父はとっさの判断で、渋滞から飛び出して、人通りの少ない山道へと入っていった

『霧がすごいな・・・』

あわてて山道に入ったものの、霧が出ており、数メートル先の道路も見えない状況になっていた

山なので交通量は少ないが、少女はその霧をみて事故とかならなければいいかと思っていた

『くう・・・』

ここにきて、母の容態が急変した、母の着ている服の上からはまるで水がかかったように濡れていた

破水、胎児が生まれる前兆であり、赤ちゃんを包んでいる卵膜が破れて、羊水が外に流れ出すこと

いつかの学校の授業でならった言葉を思い出した少女は母にとっての危険性がわかった

『おと、おとうさん、どうしょ、おかんさん破水しちゃった!』

『まじかよ・・・くそっ』

少女の言葉でアクセルを思いっきり踏んで、速度違反した猛スピードで道路を駆ける

通いなれていない道で、さらには数メートル先も見難いこの状況ではあまり言い行動とはいえない

そしてこのままいけば病院まで早く見積もっても20分程度

体の弱い母はそこまでもつのか？と疑問と不安を思いながら、少女の乗った車は山道を進んでいく

そして少女は母の危険がせまっているのはわかっていたが、豪雨と緩んだ地盤で起こる

『ズドゴオオオオオオ』

自然災害という危険が迫っているのを少女はしらなかつた

土砂崩れは遠くから見たらゆっくりとしているように見えるが実際は車並に早い

そしてその土砂崩れは、人気の無く、普通なら被害が出ないであろう地点に襲い掛かるうとしていた

が、突如として一台の車が現れた

『あ、お、おとうさんっ!!』

いち早く気づいた少女は運転席にいる父に呼びかけたがもう遅く、車のすぐ横に大量の土が襲い掛かっていた

『ア……………』

少女はまるで箱に閉じ込められたような圧迫感で目を開けた

視界は茶色と赤で埋まっていた

茶色は土の色で、赤は

数メートル先に横たわる、腹に突き刺さった木から流れる大量の父親の血、目立った外傷は無いが口から大量の血を吐いた母親のものだった

言葉を失って、肺の空気が全部なくなるまで息も止まった

まだコレなら奇跡のほうだ、土砂に埋もれたら確実に命が無いのだから

『お、かあ、さん、お、おと・・・』

手を伸ばそうとしても動かすこともできず声もかすれかすれの声しか出なかった

少女は半分埋もれかけていた体を醜いが死に物狂いで這い出ると必死にはいずりながら二人のそばまで行こうとする

だが途中で何か足りない感覚があることに気がついた

立とうと思っても足からの反応は無い、恐る恐る足が見えるように体をひねると少女の瞳に映ったのは

ありえない方向に曲がり、骨がむき出しになり、すでに皮一枚という言葉が似合うような千切れる寸前の両足だった

『ぎゃ……い……ゃ……』

幸い痛覚は麻痺しており痛みは感じなかったが、自分の足の惨状を

見て過呼吸気味になり急激にめまいが襲った

『此処らへんだな・・まったく面倒くさい霧だな』

黒い翼を背中にはやす、人の形をした何かは地面に降りて何かを探
すように周りを見渡したが濃霧の性で視界には何も見えなかった

『晴れる』

翼を生やした人間がつぶやき、右手を真横に振るうと風が吹き抜け
たように、言葉通り霧が晴れて見通しの良くなった山の一角が見え
るようになった

『ひゃ・・・ふえ？』

こほこほと赤く重い液体をこぼしながら咳こみ、いきなり晴れた霧に目をまん丸にして驚いた

今までの両足の惨状を、嘘のように忘れてしまい、ただ呆然としていた

『此処か・・・』

後ろから近づいてきた声に反応して、助けかと期待して振り向いたら、そこには翼を生やした人間だった

カラスのような漆黒の翼、現実では絶対に無いものを見て、また驚きで少女は目をまん丸にした

そしてその翼を生やした人間は少女に見向きもせず、倒れこんだ両親に歩み寄っていった

『なにすゝルの』

両親に一步一步近づく翼の生えた人間に少女はかすれかすれの声を出して静止させた

こちらを振り向き、少し驚くような又は関心するようにも見える表情をしたがすぐに無表情に戻して少女に向かってくる

『俺が見えるのか？』

翼を生やした人間は、当たり前のようなことをいつてきたが、少女

はずでに返事をする体力さえなくなっていた

『・・・悪魔が見えるみたいだな・・・死が近いからか・・・』

『っ！っ！』

翼を生やした人間が言った言葉に驚愕して、痛みを感じていたことさえ忘れて口をパクパクさせる少女

この世に存在するはずが無い、唯の人間の空想から生まれたと思っていた悪魔が目の前に居るのだ

(じゃあ・・・お母さんとお父さんを・・・それに赤ちゃんも奪いに来たの?)

再び背を向けて両親のほうへ歩き出す悪魔

『・・・オね、ガイ・・・みり、なタスケ、・・・て、（私の命でも、何でもあげるから
』

気づいたら少女は悪魔の足をつかみ、最後の力を振り絞って途切れ途切れの言葉をしゃべっていた

そして最後まで言葉を言う前に、少女の意識は闇に落ちた

目を開ければ、真っ暗な、ただただ真っ暗な世界が広がっていた

（JJJJ・・・何処？）

『ここは世界の狭間、君に興味が出てね・・・』

真つ黒な世界に真つ黒な悪魔、普通なら溶け込んで何処にいるのかもわからないだろうが、なぜ目の前に居る悪魔ははっきりくっきり認識できた

少女は口に出したのか？と疑問に思ったが

しゃべろうと思って、口を開けようとしたが、口は開かなかった

『必要の無い言葉はしゃべるな、今から少し質問をする、首を振るだけでいいから返して』

しゃべれないので、コクンと小さく首を縦に振ると、悪魔は早々と質問を始めた

『まず、君は死んだことはわかるな？』

少女は心を落ち着かせて、首を縦にふった

『死ぬ前にいったことを叶えて上げよう・・・それと』たすけるのは
君かい？』

悪魔の言葉を聴くと驚きながらもぶんぶんと勢いよく首を横に振っ
て否定を促す

『残念なことを言うが二人はもう死んでいるよ』

その言葉をきいて、少女は絶望の表情を表した

『だが』

悪魔が続けて言葉を言おうとして絶望の表情をすぐさま変えて少し

の希望に耳を傾ける少女

クククと小さく不気味な笑い声を口の端から漏らすと、悪魔は声を発した

『赤ちゃんはどうやらまだ、生きているみたいだよ?』

目を見開き、少女は喜びの表情を表す、だが悪魔は言葉を続ける

『でもね、この子をたすけるには必要なものがある……』

ククク、と先ほどよりも歪んだ笑みを作りながら悪魔は人差し指を立てて、少女に向ける

『君の『存在』が必要なんだよ、どうだい、どれでも赤ちゃんを助
けたいか?』

三日月のような口の歪んだ顔の悪魔

目の前には

反対の表情を見せる悩んだ顔の少女

だが悩むのはほんの数秒、少女は首を縦に振った

『・・・じゃあ、悪魔、.....は君に名前を聞く、名前は？』

悪魔は人間に聞き取れない言葉を発した

そしてゆっくりと口を開けだす少女

『私は亜夜、人間、篠屋亜夜』

悪魔と同じような口調で少女は言った

84話

「嘘だ」

起きて真っ先に吐き捨てた台詞は、今日何度も思ったことだった

目覚めは最悪、しかし意識ははっきりと目覚めではないようにはっきりと覚醒している

故に夢を、所詮夢程度のことだがあまりにも現実味がありすぎて、そして最近では現実が夢のように思えてくるので夢とは思えない

「僕は・・・俺は、信じない・・・信じないもん」

かろうじての抵抗は自分のことを『俺』と呼ぶこと、こうでもしなければ自分が本当に自分でなくなりそうだから

空はもう真っ暗に染まりきって月明かりがカーテンの間を縫っても
れている

いまだにはっきりとした頭では到底眠りにつくこともできない、か
とってこのまま不安を抱いたままおきておくのも嫌だ

それにもしも眠るといふ逃げる方法をとったとしてももう一度あの
ような夢を見るかもしれない

結局亜夜に逃げ場は無い

そして今も、ほかのことをしてでも紛らわそうと重いながらも頭の
片隅では『亜夜としての記憶』がたたずんでいる

見てもぬフリなどできない

（どろろじょうじょう……このままじゃ、どろろにかなりそう）

亜夜は震える体を抱いたまま、得体の知れない恐怖と共に一晩を過
ごした

「気づか……れた？」

空を飛んでいたラヴィスは急に立ち止まり、険しい顔に変えた

普段無表情な彼を知るものなら、すなわちレオが見たらかなり驚くような顔をしていた

現在時刻は11時を少しすぎて午後0時に差し掛かるころ、ラヴィスの眼下に広がる街の景色は今もポツポツと灯が消えていくのがわかる

今頃なら外を出歩く人間もないし、何より上空5000mほどを飛んでいるのでかなり目のいい人間でしか捉えることはできない

そもそも悪魔を普通の人間が見ること自体できないのだが・・・

なら、ラヴィスは何に気がつかれた？

「抑止力……あのときの魔法か……」

抑止力、普段何気なく生活を送る人間には到底縁の無い言葉だが、実際はその影響をもっとも受けているのは人間である

ラヴィスは悪魔、悪魔がいるなら天使もいる、天使は神の使いだから当然神も存在する

この三つの存在を大きくまとめた呼び方では『抑止力』と言う

ラヴィスとレオは魂を管理することによって人が生き返ったり、寿命を迎える前に死んだりすることを腐是具事により、この世界の『矛盾』を防いでいる

これを事前に魔法で調整したり、管理すること、もしくは少しの矛盾ならば直すことを抑止力という

だが時折、生きてもいい人間が死んだり、死ぬはずの人間が行き続けたりすることが何百年単位で一度ある

その場合は少しの矛盾ではなく、矛盾が矛盾を呼ぶ府の連鎖が生まれ取り返しのつかない矛盾になってしまう

ここで登場するのが世界が運命を強引に戻そうとする力『修正力』が働く

ラヴィスは後悔をした、昨日は表に出すことは無かったが感情の玉かマリのあまり、仕事関係以外で魔法を使用したことを

その性で抑止力が気づき、修正力が働いた

しかし本来、まったく気づかれずに一生終える、という選択肢は無く遅かれはれることはラヴィスは知らない

だから自分の性だと、そう決め付けてしまう

幸い完璧なまで修正するには時間がかかるのでまだ終わってわけではない

なにせ急に力が働き『修正力』がはたらけばあまりの莫大な力で関係の無いものまで巻き込み、結果着に広がりさらに修正を施し破壊を生む、それを防ぐために矛盾を一つずつ修正していくのだ

しかし一瞬でかなりの量の矛盾を修正する修正力の力ではそれほど時間は無い

どうすれば修正をとめれるか、できることならとめるだけではなくそれ以降もきづかれないうようにするためにばどうすればいいか、という答えを出すためラヴィスは悩む

そんな時ビツ、と空ごと次元を切った空間がラヴィスの真横に開かれた

「ラヴィスッ、抑止力がっ！」

悪魔、天使が自分たちを排除しに来たのかと思ったがでてきたのはあせりにあせったレオだった

よくよく考えれば排除しにくるならもつと早く来るはずだ、ならばラヴィスは標的ではない

と、言うことはだ

「わかってる！」

無表情という仮面を捨てたラヴィスは荒げた声で言い放ち、それを聞いたレオは面食らったようにひるんだ

(狙いは、亜夜か……『根本』を消すつまりか)

「まずは……全力で亜夜を護る」

怒鳴った性かラヴィスは冷静さを徐々に取り戻し、再び捨てた仮面をかぶる

そしていつもと変わらぬ冷たい表情に戻ると翼をたたみ街まで落ちていった

「うう、眠い・・・」

目をこすりながら亜夜はあくびをした

今日は文化祭で学校に早く来るのも理由の一つだがそれ以外にもう一つ、眠い理由の大半を閉めていることがある

昨日、思い出しただけでも嫌になる記憶を見せられ、眠りにつけなかったのがそうだ

隣をあるく樹は心配したのか「寝れなかったのか？」と声をかけた
が亜夜の返事は「覚えてない」の一言だけだった

(昨日は夕食食べた後に・・・後に?)

しかし亜夜はそのことを『覚えていない』、昨日の夜あったことすべてを覚えていないのだ

いや、それだけではない

「なんだ、今日の文化祭が楽しみで眠れなかったとか？」

ハハハ、と樹は笑う

本当ならこの後担任の先生が来るまで会話のキャッチボールを繰り返すのだが樹は「子供っぽいな」といつて賑やかに話している男子陣に混じるために突っ込んでいった

そう、記憶『だけ』なくなったわけではないのだ

いや、元々記憶がなくなったのはついでのようなもので、『亜夜が樹を好き』という事実を消したのだ、だから亜夜は樹とは親友と思っっているし好意を抱いてはいない

もちろん付き合っていた、という事実も消えている

「あー、ねむい・・・」

うとうとと頭を揺らしながら亜夜の意識は沈んでいった

24時間、これがラヴィスとレオに与えられた時間だ

現在時刻は0時0分、ちょうど日付が変わり、たいていの人々は寝ている時間帯

「今、亜夜と世界の関係を一時的に引き離れた……けれどそれで……『亜夜の本当の気持ち』が消された」

息継ぎをしてしかし、と続けて言葉を続ける

「だがまだ間に合う、修正力より先に『修正』すれば」

現状はこうだ

まず亜夜をこの世界との関係の外に出す、こうすることによって亜夜は一時的にだが世界からの干渉を受け付けなくなった

しかしその途中、中途半端な修正中に強制的にやったものだから」

亜夜が樹に抱く思い』という心を消された

なので今からラヴィス、レオの二人は『亜夜が樹に抱く思い』を元に戻し、尚且つ世界の修正力が修する前に二人が元の世界として修正することになった

もし失敗した時は、『亜夜の存在』が消される・・・

そのタイムリミットが24時間

長い？短い？、そんな事は二人にもわからないければ当然人間にはわからない

初めて遭遇したこの状況、一か八かの賭けに出たのだ

「まずは・・・何を・・・」

世界が修正しようとした部分を元通りに修正すればいいのだが、ラ
ヴィスは何処をどのように修正すれば元通りにすればいいのかなん
てわからない

やることはわかっているのに、手も足も出ない、考えても何も出て
こない

自分を恨んだ、何もできない己が悔しかった

「ラヴィス！」

ハツとしてレオに振り返る、レオのいつになく真剣なまなざしにな
ぜかラヴィスは恐怖を感じる

指先が震える、惨めだな、と自分で自分を責める

でもそれで何かできるといっわけではないのに

「何ができるかはわからないけどやらないうことが一番ダメだ、お前も唯亜夜を見ておしまいはいやだろっがっ！」

指先の震えが収まった

きつく、拳を握る音がした

(そつだ、何かをすればきつと・・・だから)

「・・・やる、僕はしないといけないんだ、亜夜を護らなくちゃいけないんだ」

いつものように冷たさや、堅苦しさはなく子供っぽく聞こえたラヴイスの声は闇に溶けていった

86話

現在時刻は7時02分、タイムリミットは後16時間58分、場所は光鷹高校のはるか上空

長いようで少なすぎる時間は無情にも刻一刻と時を進めていく

「修正せれるのはきつと・・・」
『亜夜』
「のはずだ」

7時間の時間を費やしてわかったのは『亜夜』という存在が修正されるということだけ

『修正』される部分は亜夜だけではない、というよりほかに『修正』される場所は？と言ってしまえば修正されてしまうのは世界中にある存在すべてに対して働く

だがしかし、そのすべての存在が元あるべく存在から変わったのは理由……根源があるのだ

それが『亜夜』だ

ほとんどのから導き出した答えには他の選択肢もあつたが、答えはこれとラヴィスは直感的に、根拠なしに確信していた

現に今、確認をして修正する『歪み』を発見したところだ

「ならさつさと亜夜を

「だが」

どうした？」

レオの言葉を否定するようなことを言っただけでさえぎり、ラヴィ
スは話し始めた

「どつちら僕らの体はこの世界に『顕現』されているようだ・・・」

そう、普段は魔法を使って姿をこの世界に『いるようにしている』
だけで、それゆえに人間に見られることも無く、触れることも無い。
ただし死に近い存在ほど見えるという例外があるが

レオは今まで気づいていなく、体のあちこちを触りながら確認を取
っている

本来なら実体は此処には無いはずなのだが、どういふわけかこの世
界に実体が現れ、人間に直接干渉される、見られるようになったわ
けだ

「じゃあ迂闊にその『歪み』に近づけねえな・・・くそ、どうする・・・」

レオはラヴィス同様苦い表情をし、唇を噛み締め、悔しそうに拳を握る

しかし時というのは残酷、こつしている間にもタイムリミットはどんどんと近づいていく・・・

87話

「はぁ・・・鬱だ」

ズーンという効果音が似合うほどふっかいたため息をし、亜夜は落ち込んでいた

原因は今、亜夜の手で広げられている今日文化祭で着るメイド服、それを着にきることだ

もちろん女の服で、今は女なのだが周りからは(きつと)男として見られているので女子とは別の場所に着替えている

だが男子と一緒に着替えることはせず、教室から少し離れた準備室で着替えている・・・

どうやら瑞希たちの劇用の衣装や小道具を置いている場所らしいのでまだ使わないこともあり更衣室として使用させてもらってるわけである

「そして難なくきれる自分もどうかと思うよね・・・」

グチグチと文句をはいているが、それでも手をてきぱきと動かして、着替えをこなしている亜夜は偉かった

「
今だ
」

現在時刻は7時28分、残り時間は16時32分

亜夜とどう会うかという問題は、亜夜が自ら人の目から離れたこと
によって出来た

はるか上空、鏡のようなもので亜夜を確認していた二人は翼をたたみ急降下し始めた

音速を超え、空気が切れる音がどんどんと地上に近づいていく

普段なら摩擦は発生しないのだが、このときは体が顕現しているせいで人間では悲鳴を上げるような熱を感じながら、熱いな、とラヴイスは感じていた

熱いな程度で済むのはさすが悪魔といったところだろう

地上のすぐ近くに近づくと、二人は今度は急停止をして人目がか

ない校舎の裏、着や林で薄暗く、校舎からは見えにくくなっている場所に降りる

バサバサ二度大きく翼を振るい地上に立つと、カラスのような真っ黒な翼をめいっぱい広げうっすらと薄くなっていく

スウツ、とどンドン薄くなり、者の数秒で翼は消えてなくなった

と同時に来ていた服もいつもの黒を基調としたものから光鷹高校指定の男子用の制服に変わる

レオも翼をたたみ、服を変えたが顔があまりにも学生・・・？、と

いう感じだったので魔法によって無言で顔を変えた

そして此処からは魔法は一切使う場面が無くなる

本来魂を管理すること以外で魔法を使うのはご法度、そして例外として『魔術』のしような制限はされていない・・・というよりも非効率的で実用性が無さすぎるためである

魔法よりも融通は利かず、かえって魔法と拒絶反応を起こして己の魂そのものにダメージを追わせるので使う悪魔や天使なんていない

だ、今はそんな事を気にしている暇など無い、一刻も早く亜夜の元に行き、歪みを修正しなければならぬのだ

「早く、亜夜の場所にいこう」

林を出て、二人は文化祭で賑やかになった生徒の仲に突っ込んでいった

89話

「あまりのり気じゃないけど、しょうがないんだよね・・・うんしょ
うがないんだよ（ブツブツ）」

メイド服に着替えた亜夜は残りの猫耳カチューシャを持って準備室
を出ようとドアノブをつかんだ

が、扉に手をかけ押ししても引いてもビクともしない

「あれ？・・・あかなつ、ッ！！」

誰か間違えて鍵をかけてしまったのか？と思ったが不自然だった

普通鍵がかかっているとしても強く動かそうとすればガチャガチャと音はするはず・・・なのにこのドアは音がするどころか1mmも動いていないような気がする

何か、いやな予感がする

(思いつきり蹴飛ばせばあくかも・・・)

足に力を入れ、拳を握る。その手は少し汗で湿っていた

学校の一部を破壊するのは気がひけるがこんなに冷や汗をかいているのだ早くもこの場から去りたい

しかし、ドアを蹴って開けようとした亜夜の後ろ、後頭部や下から衝撃を受けた

脳が揺さぶられ、気持ちが悪くなり、意識が強制的に遠ざかっていくのがわかる

殴られた、と気づくまでには倒れて床の冷たさを感じた時だった

ラヴィスは亜夜を迅速かつ自分たちのことを見られないようにするためにしたことはいたって簡単な行動だ

後ろからただ気絶させるだけ、コレだけならわざわざ魔術も使う必要も無い

「強引だが、すまない」

聞こえるはずもないのに、ラヴィスは床に倒れている亜夜にむかって言った

いくら歪みを修正するためだといっても少なからず手を上げるのに罪悪感があったのだろう

「レオ、術式を展開しよう」

扉に内側から鍵をかけているレオに向かってそういい、レオから返事を返されると二人は亜夜の頭と足のほうにそれぞれ立って目を瞑った

風が吹いてもいないのになびく二人の髪

そして床には蒼く光る魔方陣を何個も何個も重ねたような人間からしてみればごちゃごちゃした形が回っている

魔方陣の光が強くなると主に、次第に亜夜の体が蒼白い光が淡く光だし、包んでいく

「まずは・・・歪みを・・・表に、出す」

まるで苦しく、吐き出すようにそう言いながら光に手を翳す

ザザ、ザザとノイズが聞こえてくると蒼白い光はラヴィスが手を翳している側からやや黒がかった透明な色を変わり、鏡のようなものが浮かび上がる

その鏡の中に現れたのは心だ

鋭い棘が巻きつき、ところどころにひびが入っているハートの形をした灰色の心

これは亜夜の心そのものであり、今現在の亜夜の気持ちや感情を表している

棘は亜夜を傷つける男なのに女の体をしているという『嫌悪感』

ひびは記憶をなくしたことによって生じた『亜夜』としての『不安定さ』を表している

この亜夜の心のひびを直したら、亜夜と世界は元に戻るのだ

その鏡にラヴィスは手を伸ばし、肉でも裂くようにずちゅ、と触れた部分が水滴でも落としたように波紋を立てながら手が入る

そして此処からが問題だ、ラヴィス、レオの二人はひびなんてものを見たのなんて初めてで対処法なんて知らない、消し方や直し方がわからないのだ

「消える・・・キエ口・・・」

だから何度も何度も、魔術を組み立て失敗する・・・それを繰り返すしか手は無い

そして魔術は魂を削ることによって発動する有限の力

ラヴィスの口の端から赤黒い液体がゆっくりとたれ流れる

レオもレオで歪みを表に出す魔術を維持し続けるので口から、ラヴィスとまではいかないが少量の血が流れている

「消えろっ、きえろ消えろオ！」

準備室に、ラヴィスの声が響く

神野樹は教室の前の廊下でうろろろしていた

コスプレ衣装に着替える時間は知らないが（別に知りたくも無いが）
、所詮コスプレとはいつでも亜夜がきるのは服だ

「おせえなあ・・・」

しかし遅い、廊下から顔だけ教室にいれて時計を見るが時間は8時
少し前

すでに亜夜が着替えにいつて20分近くたっているのにまだ帰って
こないのはどうかと思う

（確か小向から聞くには近くの準備室で着替えてるって言ってたっけ？）

と、言うことは今亜夜は人気の無い場所に一人ということだ

（なんか嫌な予感・・・）

一分、いや一秒でさえ長く感じる

次第に意識が薄れるていくのがわかる

このまま何もできないまま終わるのか？とラヴィスは考えながらも新たな魔術を組んで、発動させる

口からでる地は最初、少量であったが今はあふれ出てくるほどたくさん出て、そのたびに体が跳ね、地中が途切れてしまう

その性で魔術を強制中断し、余計に魂のダメージが増えていく

「きえ……ろオ……」

それでもラヴィスは執念深く、すでにポロポロの限界がきている体で言う

レオはそんな姿のラヴィスを見て、また自分も『歪み』を表す魔術を継続しながら『歪み』を直す魔術を並列使用している

とはいっても、まだ数回しか使用していないがな……、と自分の非力さを実感しているレオは直す魔術はともかく表す魔術が途切れないよう雑念を払い、再び集中する

普通ならラヴィスの自殺行為を全力でとめたいところだが、普段冷酷なほど冷たいラヴィスがポロポロにもなって護りたい存在がいるのだ

だからレオはとめられない、巻き込まれてもいい、自分の命をあげてもいい

だからレオは悔いを残さないでほしかった

「？」

ドンドン、と急に扉が叩かれる音がなり訪問者を知らせた

周りはラヴィスとレオの血が飛び、亜夜はぐったりと横たわっている・・・最悪のタイミングでの知らせだった

そして意識が扉のほうにいったレオの魔術は中断され、ラヴィスは同時に床に勢いよく倒れた

唯一かろうじて動けるレオは魔術で飛び散った血を消し、ラヴィスを抱えたまま窓から飛び降りた

このまま亜夜がおきないまま閉じ込めておくのも気が引けるので鍵もしつかりと開けている

幸い、これは魔術ではなく魔法でもできた

91話

きてしまった・・・俺は本当にきてしまったあああああ

何処に？ 亜夜が着替えてるところにだ

何故に？ 俺には覗きという大事なミッションが・・・無いけど心配だから

「まあ女のことかばれたらやばいし、ちょっとは心配だろ・・・」
友人「だし」

はあ、とため息をして方を落とす

学校という大勢が集まる場所だからこそ亜夜が女ということがばれる可能性があり、ましてや着替え中を見られてはどつやってもごまかしようが無い

しかし、瑞希たちのクラスの小道具を置く準備室はちょうど学校の横に立つ木によって薄暗くなって人気なんて全く無い

なので別に心配する必要も無いのだが……どーも気になってやまない樹はきてしまったというわけだ

（あー、どうすっかなー扉を開けて着替えシーンを見たら殴られそうだな……とかいって開けなくて待ってたらすれ違いパターンとかも……）

右手をドアノブに伸ばしたり、引っ込めたりとなかなかどうしようか決められない樹は再びため息をついて扉に背中をつけてとりあえず出てくるのを待った

(後3分、それで来なかったら開けよ・・・)

チラツ、と時計を見るとすでに亜夜が着替え始めて30分・・・にもならないがすでにそのぐらいの時間はたっていた

今まで何してたんだよ、とか思ったりもするが深くは考えずやるこ
とが無いのでじーと時計を見ている

(・・・
戻らずにいったん何かするー的なこと言ってなかったっけ?)

なぜだか今まで悩んでたりプチ葛藤していたのが馬鹿みたい思えてきた

(そーだよ、そーだそーだ、亜夜は確か『男子の衣装は着るのが難しいから手伝わないと』とか言ってたな・・・(遠い目)

「かぁー、クソ・・・結局心配損じゃねーかよ」

またまた肩を下げてがっかりとする樹、よくよく思えば佐奈が微妙に笑っていたのはこういうことか?と思うが自分が忘れていたのがしょうがない、『きつと』亜夜が言ったのは朝だろっから忘れるほうが悪い

(きつと・・・あ、そういえばそんなこといったのは覚えてるけどいつ言ってたっけ?)

朝、は亜夜が眠そうにしていたので話はしていなかった。じゃあ昨日？とそこまで考えると昨日の記憶がいまいち思い出せない

(・・・あるうえ？、もしかして俺の聞き間違い？やっぱりそんなこといってなかったか？・・・つか手っ取り早くもう開けよう、すでに3分はたっている！)

ともあれ記憶力がいまいちな樹が鮮明に覚えているはずもなく、本人もあきらめたので扉を開けようとして体を180度回転させる

そして扉を引いた

・・・が、開かなかった

押してみた

……が、開かなかった

横にスライドさせてみた

……見た目からして開くわけがなかった

呪文を唱えてみた

そんな理想はぶっ壊されるのがオチだった

「あれ、開かねえな？」

扉は押しても引いてもスライドしてもなぞの呪文を唱えても（これは開かなくて当然）開かない

着替えてて鍵をかけてるのかと思い、数回ドンドンと叩いてみたが返事は返ってこない

（着替え終わって入れ違いパターンじゃね・・・）

はあ、と今日3度目のため息は盛大に、大きく聞こえた

亜夜がないとわかり扉から手を離し、教室に向かおうとした、その時

『ガチャ』

何かの鍵が開く音が聞こえた

あたりを見渡す、が準備室以外鍵が開いた時の音が聞こえるような
距離ではない

なら準備室だ

恐る恐る振り返り、扉を見るがさっきと何一つ変わりはない

それが異様に不気味だった。

扉の向こうからは声が返ってこなかったし気配もなにも感じなかった

ということとはかぎは誰かの手によって開けられたのではなく勝手に開いたということだ

もう一度、不気味だ。と樹は口だけを動かした

「……亜夜？」

声が返ってこない気配が感じなかったといってもただ隠れているかもしれない、そう思い今一番準備室にいる可能性が高い人物の名を言いながら扉を引いた

キィ、と不気味な感じをかもし出す音を立てて扉は簡単に開いた

木の陰で隠れているこの場所は昼だということにとっても暗く、電気を
つけなければあたりがよく見えないほど薄暗かった

明かりをつけようとも何処にあるかわからないのでしようがなく薄
暗いままの準備室に入っていく

何処を見ても亜夜どころか人影すらなく、やはり入れ違いで鍵が開
いてのも偶然かと思ひ引き返そうとした

そつと冷たい空気が頬を撫でる

後ろを見ればカーテンが開いていた

(あけっぱなしとか亜夜にしては珍しいな……)

そう思いながらカーテンをまとめて、窓を閉めて再び準備室から出ようとしたとき足元に何かがあり躓いた

準備室で小道具が置いてあるということは知っていたのでよく考えればわかることだ

しかし当たった感触が妙に生々しい、まるで人肌みたくにある低度の弾力が足元から感じ取れた

何に使う道具かは知らないが小道具にしてはクオリティが高すぎではないか、という疑問より違う疑問を考える

今の人じゃないか？と

目を細めて床を見渡すと薄暗い準備室の床、丁寧に直されていない
小道具と一緒にまぎれて、足があった

いや正確には足だけではなく、それ以上は布で隠されていた

実際は隠されていたではなく窓から吹く風で偶然道具を覆っていた
布が飛んで上にかぶさっただけだが

「亜夜ッ！！」

すぐにその足が誰のかがわかった樹はバツと布を捲って中にいる亜夜を確かめる

すうすうと寝息をたてて眠って、一瞬ぽあかんとしたがそういえば朝『眠い・・・』とうつろな目で言っていたことを思い出した

まさか悪魔によって気絶させられたとは知らない樹はなんともいえない顔をしてとりあえず亜夜をおぶってでていった

92話

校舎裏のまったく人が入ってこないような林でレオはラヴィスを寝かせながら先ほどの行動を振り返る

無謀。そして少し、簡単だと思っていた自分も未熟であるかだともった

そもそも24時間という制限時間が短すぎるのだ

話が変わるが シナリオ もし仮に人物Aという人間がいて、元々なる運命の死ぬ時間が数分遅れたとしよう

このときは『たかが数分』で終わってしまったのだが、その後人物Aという人間が知り合いの人物Bとあったとしよう

そしてその人物Bは本来交通事故になるとなっていたが・・・、人物Aの介入によりソレは少しずれてしまった

と、言うことはだ

『一人の命が延長して、一人の命が救われた』ということ。そしてあくまでも例えなのでその逆の『一人の命が延長して、一人の命が奪われた』ということもありうるのだ

さらにこの先には運命が大きく変わる出来事がある

死ぬ運命だった人物Bが人物Cと結婚をし、人物Fが生まれた

だが本来は人物Bは存在しない、人物Cは人物Dと結ばれ、子供も人物Eが生まれるはずだった

ここでまた『元あるべき存在が消え、新たなる存在が誕生した』という事実が生まれる

一人が消え、一人が生まれる

さらに今度は子供Fが成長し、子供を作れば一が生まれ、本来生まれるべき一は消えてしまう

結果は『無限に救い、無限に殺した』だ

そしてこれを防ぐのが『修正力』である

『無限をただし、あるべく一を元の位置に戻す力』

神にもできない力やってしまう力なのだ、その修正力のかわりに悪魔二人の魔術ではどうやってあがいても今のレオには思いつかない、そしてラヴィスも同様に考えても24時間では無理に近いだろう

しかし、その莫大な力を持つ修正力も一瞬で直せるわけではなく、『歪み』の酷さにより変わってくるのだ

とはいっても修正力が働く時点で一から最後まで見れるわけではないほど長い時間をかけて修正し、歪みを直した地点へ戻るのだ

その歪みが生じた時点に戻る際、時間軸が狂い、人間が永遠とも感

じれる時間は何万年にもなるしわずか数分ほどにも収まってしまっ
のだ

なのでレオやラヴィスはその影響で地球という世界には歴史上では
5000年ほどいるが修正力の影響を考えてみれば数えられる数が無
くなるほどの凶氏になってしまうのだ

「それを24時間で修正力よりも早く直そうなんて・・・奇跡が、
奇跡や偶然なんか重ならない限りおきるはずが無い」

523

短く、悔しそうに低い声で、くそ・・・。と言葉をはきすてる

「無謀、でも・・・できる。・・・かも、しれない・・・ぞ？」

ラヴィスはレオに顔だけを向けて言った

魔術の拒絶反応で魂はもちろん、体中の肉が裂け、じわじわと制服に鮮血が広がっている

そして言葉を言い終わったと瞬間、ラヴィスは口から血を吹き出し、同時に制服の格好から普段の黒を基調とした服に変わってしまう

それは燃料切れを指していた。魔術を後一回でも使えば魂その真野から消えてなくなることをさしていた

「無理だ・・・もうお前の体も持たない・・・それに今みたいに亜夜が一人でいることも、もう無いかもしれない」

レオはもっともなことを言う。不運にも今日は文化祭、一般人にも

開放しているので後少しで終わる準備が終われば文化祭が始まってしまい、終わるのは夜になるだろう

そして家に帰り一人に・・・しかしそこまで待てない、時間が無い

それに最初から亜夜が一人になるなど運がよすぎる。歪みはすぐに見つかり、ちょうどその時に亜夜が独りになったのだ、そのツケが今の今になってかえってきたのだろう

「それでも、だ・・・後、16時間・・・も、ある」

時間なんて関係ない、亜夜と合えるチャンスがあってもゆがみを直す魔術と、それを使えるブンの魂も消耗しすぎている

なのになぜこんなにラヴィスは自身にも似たようなことがいえるのだ？

自分の命まで差し出して、そもまでしてラヴィスは亜夜を助きたい理由がわからない

そもそも人間と悪魔、関係をきずこうにも築けない関係なのだから

なのに、なぜ？

ラヴィスと会ったのはこの世界でもうすぐ16年になる

(その時に何かがあった？……でもその時亜夜は生まれたばかりかその前か……)

ふとレオの脳裏によぎる言葉があった

(・・・修正力・・・も、もしかしてっ!?)

レオは気がついてしまった、亜夜を・・・『本来』の亜夜を知る方法を

「すべて、話そう・・・」

レオの驚きと困惑の表情を見てわかったのか、ラヴィスは今でもかすれて聞こえないような声で話し始めた

すべての、始まりを

「むー……この日も気持ちよそそつに寝てると起こしづらいよねえ
」……」

と、佐奈は保健室のベッドで眠っている亜夜の頬をぷにぷにとつつ
きながら言う

その言葉に樹と孝次はうんうんと頷き若干ほほえましいような顔を
作る。樹に関しては（よだれたらして……ハッ！なんか新しい境
地につ！）と意味不明な思考をはたらかしている

「じゃ、準備とか終わってるけど一応戻りますかね」

亜夜の横でしゃがんでいた佐奈は一人のほうを見て言う、もちろん
指はなおもつつき中だ

「じゃ、行くか」

疲労やストレスで疲れがたまっているじゃない？と保険医が言っていたので生憎亜夜の隣で話したり等しいようはやめに出て行くよと言われているのもありまだまだ離れたくない気持ちがあるものの樹は保健室から出て行く

（とはいっても、もうすでに1時間程度寝てんだよなあ〜）

1時間ほど前のことを思い出し、ハハハと苦笑いを浮かべる

が瞬間、表情が凍りつく

（そういえば・・・あん時の鍵は・・・）

そう、亜夜が衣装を着替えるために入った部屋の鍵がひっかかるのだ

色々な偶然が重なって自然に鍵が開くこともあるかもしれないし、古くなって鍵穴が壊れているのかもしれない

しかしだ、まずこの学校はここ数年で出来た新学校なので後者は考えられない

(やっぱり……偶然か……?)

「どつたの、神野くん？」

「……ん、あ、いやちょっと用事思い出したから……先いつててくれ」

そういうや否や、樹は進んでいた方向からま逆の方向に方向転換して早足で足を進める

後ろでは「ちょ、どこいくんだよ」と孝次が大きめの声で言うているが追いかけてくることは無かった

「『禁忌』か……亜夜も……『お前』も」

禁忌。

亜夜のように『亜夜が女である世界』ではなく『亜夜が男の世界』

に存在していること。本来の世界ではなく違う世界から引つ張り出された存在

それが『イレギュラー』

もし亜夜が『女である世界』で男として生まれた場合もそれはイレギュラーになる

なぜなら運命は決まっている。それは人間には変えられなく、神にも変えることはでき無く『世界』がすべてを決める

そして亜夜の場合はどこかに所属しているわけではなく『男である世界』と『女である世界』で混ざりあった、二つの世界が重なり合った存在で二つから拒絶される存在

ふつうのイレギュラーなら元の世界に戻し修正すればそれでおわり

だが亜夜は違う

女である世界でも男である世界でも、亜夜はどちらとも二つの特徴をもっている

なので、それぞれかみ合わない特徴は結果、世界は『亜夜も拒む』

どの世界からも、亜夜は存在も全否定されている存在

それが『禁忌』

「亜夜は……ルール上知っては『消さない』いけないから気づかないフリをしていたが」

なぜお前も、とかすれたような声でレオは先を言う

今にも瞳から涙をこぼしそうなレオを見て、ラヴィスは不適に笑う

「どうする、僕も・・・」消すか？」「

イレギュラーならどうにかならないこともなが禁忌にもなるとレオは手も足も出ない

ただ、掟に従い、ラヴィスと亜夜を『消す』

殺すなんて次元ではない

存在そのものをすべてを消す

誰からの記憶も消え、世界にも忘れられ、存在していた証明ができなくなるように消す

これが禁忌に与えるべき『罰』

亜夜とラヴィスはその『罪』を背負ったのだ

なぜ？

偶然？

違う

罪は誰かからおきるものであり、原点はどこかにある

そして罪は罪を呼んで、罰を増やす

それが『亜夜』と『ラヴィス』

(だが、しかしっ！！)

「俺は友を殺すようなことをしない、そんなことをするくらいなら自らの魂を消すぞっ!!」

クク、とレオの返事を聞きラヴィスは笑う

先ほどの不気味さは無く、妙に住んでいて、どこかに希望を感じさせる笑顔

それはまるで悪魔にあわないような笑顔で『人間』らしさのある笑顔だった

94話(前書き)

投稿が遅くなっちゃいましたね・・・

いや、止めるっていうフラグではないですよっ！

一応私も高校生で大変になっちゃいまして・・・そして無理をし
りとして風邪や熱が出たりしてましてエ

なので投稿は遅くなりますが、それでもこれから読んでくださ
いっ！

亜夜が文化祭初日の片付け、そして明日の準備をしていて、時計に気がついたときにはすでに10時前だった

一日目の固睡家やら明日の準備やらで残っている生徒はまだ多く、その中に当然亜夜、そして樹もいる

「みんな、もう今日はコレで終わって、なんかやることある人は朝はよきてやり〜」

佐奈の指示によって色々と作業をしていた生徒たちは10分ほど切りがいいところまで作業を終わらせると、みな、鞆を持って疲れた様子なのだが猛ダッシュで帰っていった

何せこの時間だ、宿題は先生たちの考慮もあり若干少なくなっているものもあるし何かやりたい事もあるだろう、とみんなが走って帰っているのを見て亜夜は思う

(後は電車の時間とか?・・・まあ俺には関係ないけど)

「亜夜、かえるぞ」

ほぐれ、といって樹はいつ柄の上においていた亜夜の鞆を投げてあわてて亜夜はキャッチする

以前なら難なく取れていたのだが筋力が落ちた性が重く感じてしま
う鞆

「・・・ありがとう、かえろっか」

改めて女だな、そしてこの台詞もいっぱいあったな、と思いながら
そのことには考えないようさっさと家に帰ることにした

時刻は飛んで現在午後10時30分ジャスト、残り時間はあと1時間30分

場所は亜夜の家から少し離れた上空、光り輝くつきを背に、魔術で人間に変装できないラヴィスは黒い空に身を潜めながらじっ、と時を待っていた

今日、亜夜が一人になるであろう場所は家のはずだと踏んで今の今まで無駄の労力を使わずに、歪みを消す術式を考えて待っていたのだ

『ラヴィス、もうすぐだ』

今レオは亜夜の監視役をしている

会話の魔法は幸い、人間に影響を与えないので使用できるので有効活用して、亜夜に異変が無いか、いつ一人になるかを伺っているわけだ

そして今その時が来た、亜夜が樹と離れて独りになったのだ

543

(どちらかの家にどちらかが泊まったりすると一瞬思ったが・・・
『この世界』は亜夜が女になったと知っている友達、という関係
だったな)

そう思いながら下を向くとちょうど亜夜の姿が見えた

しかし近くには仕事帰りらしきスーツを着た人、コンビニでもいこうとしているのか寝服のような格好で出歩く人がいて近づこうにも

近づけない状況であった

小さくしたうちをして、ラヴィスは暫く亜夜を見続けた

完全に亜夜の周りから人がいなくなったのは亜夜が家の目の前につ
いた時だった

シュバツ、と一度羽を勢いよく羽ばたかせると小さくたたんでラヴ
イスは急降下していく

視界の端には同じく、急降下していくレオの姿が見える

「もつすぐ、もつすぐだよ……まっけてくれ」

その言葉は轟々という風の音でかき消されて空に溶けていった

95話

急激に睡魔が襲ってきた

今まですっかり忘れていたが、今日の朝は何故だか寝た記憶が無い、かといっておきていたという記憶もなく曖昧だった

学校では30分ほどねたのはいいがそれだけでは眠気なんてとれるはずもなく文化祭のおかげで疲労もドツプリの亜夜は今すぐにでも道路でもいいから横になりたいくらいだ

理由を考えたが自宅の玄関が見えると、睡眠不足と疲労によって亜夜の思考は途中で中断された

このままりビングのソファで寝たく、亜夜はふらふらと鞆の中に手をつっ込み鍵を取り出しながら玄関を開き、中に入ろうとした

が、しかしその行動は背中に翼の生えた人間によって中断されてしまふ

(あの・・・顔は・・・???)

完全に意識が沈みきる前に見た顔は、『覚えているはずも無い顔』
だったような気がした

すまない、と唇だけを動かして亜夜の首の根本に手をたたきつけた

そして地面に向かって崩れかける前にラヴィスは亜夜の体を受け止めると、そのまま両腕で持ち上げる

「ちよつど家も開けてくれた・・・入るぞ」

レオは亜夜の家に入ると、ラヴィスも亜夜を持ったまま入っていく

リビングにおいてある机に亜夜を乗せ、早速レオが『歪み』を表にだす術式をそこらへんにあるもので代用品を作っていた

魔術による出費をおさえるためだ、時間を少しくつても結果はコッチのほうがいいの踏んでのことだ

よくわからないフィギュアや、テレビのリモコンなどを円を描くように並べて、少しのずれがあれば修正して、意味を練る

実を言うとレオもラヴィスも魔術の知識はあっても使うのは今日がはじめてで、術式も知識がほんのチョットあるだけで、失敗し、大事故につながるかもしれない

朝、うまくいったのはラヴィスの補助があつたからで今ではラヴィスは歪みを表す魔術と直す魔術両方使えるような魂なんてものは無い

だからレオは今までないくらい集中してラヴィスはじつと亜夜を見ている

549

失敗は許されない一発勝負・・・。

もしも失敗すれば亜夜は修正力により消され、ラヴィスは魔術の使
用で消え、レオは禁忌とわかっていて無視した罪でほかの天使、悪
魔から消される

だが大前提として、成功しても失敗しても僕とレオは消るんだがな、

と思うとなぜか乾いた笑いがこぼれた

「完成した」

本来ならそのあとに「はずだ」と曖昧な言葉を入れるがレオは自信満々で言い切った

時間は2時間以上もかかっている、後数分で時計の短い針と長い針が真上を剥く

次にレオが目を瞑り、集中しだうと同時に部屋全体が淡く青白く光りだし、朝と同じ光景がラヴィスの目の前で起きていた

しかしその光景の中で『一部分』朝とは違う部分があった

それは光の中に映る亜夜の『心』

ひびが全体的にいきわたり、いかにも崩壊寸前といったかんじで現在進行形で細かいくずが落ちて言っている

ラヴィスは焦らずに時計に目をやる

1 1時58分28秒、後一分と32秒・・・31秒・・・30

秒・・・

「これで最後だ」

手を伸ばす。

グジュと肉をつぶす音が部屋の中で小さく響いた。

不思議だった。

後一分ほどしかないのに、妙に冷静で、それでいてラヴィスの心は安心している

そしてラヴィスもまた心境に影響されて成功させたい、いや、絶対にしてみせる、と自信に満ち溢れていた

カツと目を見開き、魔術を発動しようとする

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レオは何も言わないで、別れを惜しむような苦い表情をしていた

さよならという言葉すら言わない。

ラヴィスが消えた後、存在が消えてしまえばそのものに関する思い出や記憶もなくなってしまうから意味が無いと知っているから。そして、原則を無視したレオも消えてしまうから。

「・・・・・・・・じゃあな」

だが、ラヴィスは瞳にレオを写していないものの、あえてレオが言うのにためらった言葉をつむいだ

それでもレオは何も言わないまま、心の中でつぶやいた

(ああ………これで、さよならだ)

ラヴィスから視線をはずして、レオは『最後の術式』を組み立てた

レオが悩んで出した答えはいたってシンプルだ

大切な友と呼べる存在も生かしたい、ただそれだけだ

そして、レオ組み立てた術式は確かに亜夜の心の歪みを表に出す術式だ

……いや、正確に言うと亜夜の心の歪みを表に出す魔術『も』含めた術式だ

じゃあ、レオはどんな魔術を発動した？

それは『ラヴィスの行使する魔術を無効化する魔術』だ

ラヴィスの目がいつそう大きく開き、レオを捕らえる

どんな術式を組み立てたかわからないラヴィスにとっては自分が魔術を発動できないので使えないようにしたと思っているのだ

「ラヴィス！、やはり僕等を消すために・・・ッ！！！」

怒りの上をあらわにしてラヴィスは激昂し、さつきが放たれる

罵声を浴びせられるという予想と覚悟はあった

しかし『やはり』という言葉はレオの心を大きく抉り取った

信じてなかったのか、とレオは自称気味に心中つぶやき苦笑いを浮かべてみた

(二つするしか、二つするしかないんだよラヴィス・・・)

もう一度いう、レオが出した答えは『大切な友と呼べる存在も生かしたい』という願いだ

これの問題に関しては、亜夜の心の歪みはあまり関係しなくてもいい

なにせ、『ラヴィスが自分の魂のそこが付くまで魔術を使った場合にしかラヴィスは消えないのだ

じゃあ、魔術をほかのやつが使えばいい

「……俺が消えても、亜夜を護ってやれよ」

「……なに……?」

ラヴィスの顔から一瞬にして怒りが消えた、どうやら言葉の意味がわからなかった様子だ

レオは一步、また一步とラヴィスに近づいていく

すでに魂ギリギリしか残っていないラヴィスは今此処でレオを倒して魔術を発動する時間なんて無い

が、しかしそんなラヴィスをほうってレオは横を通った

「ッ！、れ、レオッ！！」

暫くフリーズしたラヴィスはやっとレオのやろうとしていることに感づき、振り返ってすでに光に尽きさせた腕を抜いてとめようとした

「さっき、情報操作してお前が禁忌っつーことは誰にも知られないようにして、このけんにもお前は関与してないことにした」

レオはこれはお前の魔法の力を借りてやったことだから、俺が消え

てもその記録は残るとも付け加えた

「ヤメロっ！お前がする理由なんてないっ！！」

叫びながらレオの体を引つ張るが、すでに限界を迎えていたラヴィスの体ではレオはとめることはできなかった

「これで、亜夜とお前はいけていける・・・！！」

ラヴィスが組み立てようとした魔術は先ほど見て理解した、だから同じように魔術を組み立てることは知識は薄いレオにもできた

ラヴィスは今目の前で組み立てあげられていく魔術を見ながらレオに寄りかかる

「ウソだろ？やめろ、レオ・・・レオッ・・・レオオッ！！！！」

そのラヴィスの叫びは、誰にもとどかなかつた・・・

気がついたときには、この世界に『レオ』という悪魔の存在は消えていた

「ん、……………」

亜夜はうつすらと目を開けると見覚えのある天上が見えた

普段、毎日見ているのだからなんて不思議はなかったが、リビングの天上を見ておきるのは『違和感』がある

(うーん……、昨日は『文化祭の準備』で遅くなって……そのまま寝ちゃったのか……)

昨日の出来事は一切覚えていなかった。

修正力の力はすでに『昨日』という出来事を消している。

だからすでに、『昨日』という言葉自体合っていないく、すでにすべ
ての人間にとって、『昨日』の出来事は、『今日』の出来事として確定
されている

亜夜はそんなこともしらずボサボサの頭を手で解いて洗面所に向かう

「時間もあつし、お風呂はいつてこ……ふあ」

いまだに眠たそうに制服を脱ぎながらそういった

レオはこの世界から消えた

誰も覚えてなく、生きていたという痕跡さえ残っておらず、存在を消された

なぜ？

彼は友であるラヴィスと、友の大切なもの亜夜を救うために自分から命より重い『存在』を差し出した

だが、^{イレギュラー}異常があつた

「レオ……、」

ラヴィスだけはレオという存在を覚えていた

ソレは唯の偶然で、悪魔という曖昧な世界の住人だから見逃したからかもしれない

ラヴィスは覚えている

俺を頼ってくれ、といったレオの存在を

いつでも自分を心配してくれた悪魔らしくない悪魔の存在を

いつの間にか友として見ていた存在を

友のためなら自らの命も、存在すらも投げ出す存在を

そして、ラヴィスの魔術は絶対に成功するという奇跡を信じた存在

頼った自分は実は寂しかった

心配してくれて嬉しかった

友という存在ができて舞い上がってしまった

しかし、レオの存在で自分は生きたくはなかった

こんなことなら、魔術が失敗したほうが良かったかもしれない、でもそれでは亜夜が助からない

それらの記憶はラヴィスを心を締め付ける棘だった

(いくら僕と亜夜を助けるためとはいえ・・・存在まで身代わりになくても・・・)

一人の悪魔の頬に暖かい雫が這い、そして落ちると同時に声は出さずに唇だけを動かす

ナゼボクノタイセツナモノヲウバ
ウ？

その優しさが悔しかった。その優しさは苦しかった。その優しさをやめてほしかった。

そして、その優しさは、長くは続かない。

歪みが一度直っても、それは今にも崩れそうな老朽したものを応急処置下だけに過ぎない不完全なもの

いつかとはわからないが、いずれ世界に気づかれて修正される存在だ

そしてラヴィスには後一回魔術がつかえればいいぐらいの魂しか残ってはいない

一応魂は時がたつにつれ回復するもだがそれは微々たる物で、十数年かけて全快するものだからその間に修正されてはどうしようもない

だから、次にそんな場面に出くわせば、なすすべはなく、血が出るほど唇を噛み締め、拳を握り、見ているだけしか出来ない

そして次の瞬間、今回のような奇跡イレギュラーがおきない限り、なぜ悔しかったのかなぜ怒りがわいたのかという理由も忘れて、考えられなくなってしまう

その悔しさは何処へ消えた？

その怒りは何処へ去った？

答えはない。

無い。

何処へもいつてはない。それ以前にその悔しさや怒りがあったと
いう事実さえも捻じ曲がられて消し去られているのだから

だから、何処へという正解も無ければ。何が違うという間違いも無
い。

「僕は・・・何も出来ないのか？」

また、悪魔のあとから涙が落ちていく

しかし、地面に落ちる前に、空気抵抗で跡形も無く空に溶けていった

その隼の行方は誰も知らない、誰も見ていないし覚えていない

まるで存在が消されたみたいだ……

記念すべき百回目の投稿なのに・・・

すみません

作者の勉強、部活・・・ではないですけどっぱいのを二つほどして
て、すばらいくらい忙しいです

なので駄文なこの小説を暫く投稿中止をいたします、真に申し訳
ざいせんm(´`´)m

ほかの作品についても投稿中止です

高校入学前は大丈夫だろうと思ってはいたし、こつこつを書いてい
けばいいと思っていましたが・・・そんな暇すらもなくとうとう予
備の物語も投稿しつくという・・・

この作品はあと少しで終わりだというのに、非常に残念です

ですが、時間があるときにいつか別に訂正版を投稿したいと思っ
ています

見かけたときはよろしくお願いします

簡潔は絶対にするとはざいた作者のかつてなまでのまがまを許し
てくださいまし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407n/>

罪（わたし）と罰（ぼく）

2011年6月9日23時36分発行